
フェアリーテイルの世界に転生しました

馬糞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェアリーテイルの世界に転生しました

【Nコード】

N97230

【作者名】

馬糞

【あらすじ】

なんとなく書きたくなって衝動的に書いた作品です

オリ主、チート、性転換とかそういうのが苦手な人はご遠慮ください

こんな感じです←

神様に殺されてフェアリーテイルの世界に行ってきました

て・・・なにこれ

1000m上空から落とすとかなに考えてんの

んで

なんで女になってんの？

転生（前書き）

こんにちは、ばふんです

なんか衝動的に書きたくなった

それじゃどーぞ

転生

「すいませんでしたあああああああああああああ」

突然の大声に俺は目が覚めた

「うわっ！なんだなんだ」

起きるとそこは

何もない真っ白な空間でした

「どこだここは・・・」

横を見ると小さい少女がこっちへ向かって土下座していた

なにこれ

とりあえず無視して状況を把握しよう

えーっと確か

回想中

俺はコンビニにいた

すると

トラックがコンビニに突っ込み

俺死亡

回想終了

って死んでんじゃねえかアアアアアアアアアアア

ええええええええええ俺死んだの!?

マジでッ!?

・・・と、とりあえず落ち着こう

深呼吸して俺は土下座している少女のほうを向く

少女は既に土下座をやめている

なんかぶつぶつといている

(あーどうしょ・・・今日二人目じゃん・・・一日に二人ってオイ・
・・・あー仕方ない・・・この子も転生させちゃおう)

なに言っているのかはよく聞こえないが俺が死んだのはコイツのせいでコイツは今日もう一人殺っちゃっているという事は分かった

「ライダーキック!!」

俺は少女のドテッパラにライダーキック

「げぼあ」

とか言う悲鳴を上げて吹っ飛んでった

やりすぎた？

「いたた・・・なにすんのさー!!まったく人間のクセに!!」

お前だって人間だろうが

「違うよ?」

心を読みやがった

「は?お前のどこが人外だよ」

「私は神様だもん」

「神様?何言ってるの?」

「気付いてるでしょ?あなた・・・死んだんだよ」

「それじゃココは天国とでも言うのかよ」

「そんな感じ」

「は？」

「まあ死んだのは私のせいだけど」

神がボソリと呟いた

なんだって？

「どういう意味だこのやろっ」

「私は野郎じゃなくて女だよ？」

「そういう意味じゃねえよ・・・」

疲れた

突っ込む事に疲れた

「んで・・・元の世界には帰れるのか？」

「無理」

きつぱりといいやがった

てか『つけんな

「でも転生なら出来るよ」

「転生？」

「うん、これに行きたいところとほしい能力書いて」

渡されたのは書類

ジャンプとかの読者アンケートみたいなやつ

「そこに名前、ここにほしい能力名、そしてここに行きたい世界」

ふむ、なるほど

って

「書くものは？」

「ごめん忘れてた」

神は俺に持ってたペンを渡す

すげえ使いやすい

なんだこのペン

「神様特注」

「くれ」

「無理」

駄目だった

とりあえず俺は名前、能力、行きたい世界を書く

「ふむふむ・・・青崎峻クンね」
あおさきしゅん

「君付けすんな」

「それで能力は・・・完成？随分チートなのを選ぶわね・・・つい
ジエンド
アフノーマル
でいくつかの異常って」

ちなみに俺が書いた異常は

『大嘘憑き』

『荒廃した腐花』（オン、オフ可）

『致死武器』

『知られざる英雄』

『棘毛布』

『枯れた樹海』

e t e . . .

途中で記述するのがメンドクなつた

とりあえず裏の6人を除く大体の異常は貰った

ちなみに全て十全に使いこなせる

「チートすぎない?」

「駄目?」

「いや別にいいんだけど……んで行きたい世界は……フェアリーテイル」

よし

そういつて神は立ち上がり

「それじゃ行く準備するわね?」

「早いな……」

すると俺の足元に穴があく

深ッ……

俺はそこに落ちる

すると

バチィという音がした

何かと思うと俺に雷が当たった

「ウアッ……」

なんだなんだ

「やばっ・・・ごめん！ちょっとミスった！！」

「ハア！？」

「あっち行ったときになんか影響出るかも知れない！！」

オイオイ嘘だろ

「大丈夫！ちゃんとフェアリーテイルの世界にはつながってるから」

それなら安心・・・出来ねえよ

異常が使えないなんてことないよな

落ちてる途中身体が分解されて再構築されるような感じがした

ハガレン？

そのまま俺は深い穴の奥へと落ちていった

転生（後書き）

とりあえずプロローグ的な

今回はフェアリーテイルの面々との対面です

そいじゃまた次回

落っこちた（前書き）

2 話目です

そいじゃどぞー

すんごい違和感

なんか大事なものがなくなって代わりになんかついたような・・・

とりあえず触ってみる

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

ない

ないものがあつてあるものがない

つまり

「性転換つてオイ・・・・確かに異常があるかも知れないと言つてたけども」

この異常は能力の異常じゃないからね？

「うわああああああ最悪だああああ落とされるわ女に変えられるわ・・・・もう死のつかない・・・・生き返ったばかりだけど死のつかない！」

とか叫んでいたら地面が見えてきた

やべえ・・・・マジで死ぬ

どうやら大通りで時間も結構いい時間らしく人はあまり通っていない

つまり受け止めてもらったりはできない

まあ上空数千メートルから落ちてきた人間を受け止められる人間が居ればの話だが

そんな時思いついた

「そうだ！こうすれば死なないで済むかも！！」

思いついたのは

まずラフレシアで地面をどろどろに腐らせて着地

汚れたら大嘘憑きでリセット

んで地面も大嘘憑きで

これだ！！

俺はラフレシアをオンにする

「建物だったら色々まずいが・・・ただの道なら大丈夫！！」

とかいいながら俺は手を地面に向ける

すると

「！？」

一陣の突風が吹く

俺は右に流された

「うつそだろ!？」

落下地点には一つの建物があった

やばい

だが今更どうにもならない

俺は建物の屋根を腐らせ、2階と思われる床を腐らせ、1階の床を腐らせようやく着地

なんとか生き残れた

すると

「オイ」

なんか女性に話しかけられる

まさかと思い振り向くと

そこには

赤い長髪に銀色の鎧を着けた人が立っていた

こちらに剣先を向けている

ティターニア
妖精女王のエルザ

死んだわ・・・

「何者だ貴様は・・・」

えーつとですね

なんと答えると

どうやら俺が落ちた建物は妖精の尻尾のギルドだったようだ

運がないにも程がある

「えーつと・・・建物は直すんで勘弁してください」

「そんなのは後でいい。貴様が何者なのかを聞いているんだ」

オイイイイイイ

俺これ死んだんじゃない？

転生していきなり死亡って・・・笑えねえ・・・

つか俺まだ転生後の顔も見えてないんですけど

女体化したってことはアレだよな

顔は少なからず変わってると思う

元々女寄りの顔だったと思うけども

「オイ」

「ハイイ！」

俺はびびりながら返事をする

よく見ると他の人たちもこっちをにらんでいる

「質問に答えろ」

・・・仕方ない

転生したことバラすっきゃないか

でも普通これって転生物のタブーだと思うんだけど

すると

「やめんかエルザ」

なんかでかいジイサンがこちらを見下ろしている

ノッキングマスター次郎！？

ってそんなわけないか

多分

「マスター・・・」

マスター・マカロフか

でっかいジイサンが見る見るうちに縮む

「お前は誰じゃ」

結局同じ質問ですかい

よし

嘘をつこう

多分嘘を見抜く魔道師なんて居ないだろう

「えーっと・・・散歩している最中にですね・・・なんかでかい鳥にさらわれまして、何とか脱出出来たんですけどもとんでもない高さから落とされまして、仕方ないので魔法を使^{マジック}って地面を腐らせて勢いを殺そうとしたところ風に流されてここに落っこちた次第です」

嘘をついた

まあほとんど本当だけでも

でかい鳥じゃなくて神だけでも

散歩じゃなくてコンビニに居たらトラック喰らっただけだけでも

「・・・本当か？」

怖ッ！

エルザ顔怖ッ！

「それは大変だったな」

よかった・・・とりあえず信じてくれた

「それじゃ家まで送ろうかどこにあるんだ？」

さーて家どこだっけ

ダラダラと冷や汗が流れる

とりあえず時間稼ぎ

「あの・・・ギルドの修復手伝いましょうか・・・」

「いや・・・そんな事をさせるわけには・・・」

「あ、いえ大丈夫です。すぐに直せますんで」

俺は大嘘憑きでギルドを直す

わずか数秒で直った

エルザが呆れている

口が開いて目が丸くなっている

「凄いな・・・こんな魔法が使えるとは・・・」

果たして異常は魔法アブノーマルに分類していいのだろうか

「さて・・・それじゃ家に送ろうか」

・・・・・・しまった

時間稼ぎのはずなのに数分しか持たなかった

「君の家はどこだ？」

「・・・分かりません」

「は？」

「散歩って言うのは嘘です。本当はここがどこだか分からなくて彷徨ってたら鳥に連れていかれました」

困ったときの超奥義

『記憶喪失なんです』

奥義でもなんでもねえよ

「自分の名前と魔法以外覚えてません。あとは多少の知識とかだけでここがどこで自分の家がどこなのかも分かりません」

超大嘘つき

精神感応をオンにしてみる

よかった・・・信じてくれているようだ

「そうか・・・それは気の毒だ」

「ねえ、じゃあこの子ギルドに入れてあげたらどう？」

そう言ったのはミラジェーンさん

「それはいい案だ。これだけの魔力なら大抵の仕事はこなせるだろう」

おお・・・いい方向に話が進んでいるではないか

「ねえ、君名前は？」

「えーっと・・・青崎峻です」

「アオサキ？」

「多分東の方から来たのじゃろっな」

ジーさんナイス

「じゃありヨウの方が名前でいいのね？」

「ハイ」

とまあこんなやり取りをして右手にギルドのハンコを押してもらってフェアリーテイルに入った

今日のところは民宿を借り明日からまず家探しと資金調達（仕事をすることになった

民宿に着いた瞬間頭の上にでかいバッグが2、3個ほど落ちてきた

中には俺の生活用品やら着替えやらついでに通帳が入っていた

通帳の額を見たとき俺は目を見開いた

100億ぐらい入ってやがった

これだけあれば一生暮らせるってか何生暮らせるんだ？

とりあえず部屋へ行く

俺は部屋についていた鏡を見る

どうやら少し幼くなっているようだ

前世では17歳だった

今は14歳ぐらい

身長も縮んでいる

ナルホド・・・通りでミラさんの口調が年下に対する感じになっていると思った

胸は平均（だと思う）

まだ成長途中

そんな感じ

顔は上の下ぐらい

少し釣り目

髪は肩ぐらいの長さで前世と同じ黒

目の色も同じく

俺は自分の姿を確認した後部屋についているバスルームに行く

当然、恥ずかしかった

これは自分これは自分と延々と聞かせながら入っていた

唯一の救いは自分の身体が14歳と少し幼くなっていたこと

多分元の年齢のままだったらヤバかったと思う

自分で言うのもなんだが普通にかわいい顔している

風呂から出た後俺はパジャマを着て布団に倒れこむ

とりあえず今日はもう遅いので家探しは明日にしよう

今日はもう寝る

落っこちた（後書き）

終わってたぜ

1日で2話同時更新

次回は初仕事

まだルーシイは来ていません

時系列は原作の少し前です

1〜2週間前ぐらい

それじゃまた次回

初仕事・・・っていきなり魔獣討伐！？（前書き）

主人公の初仕事

魔獣討伐

峻「酷くない？」

だいじょーぶだ

チート転生オリ主は最強だから

峻「どうだろうか」

オラシオンセイスでも倒そうと思えば倒せんじゃね？

てか余裕

完成があれば使えるし

峻「まじで？」

まじで

そいじゃ本編どーぞ

初仕事・・・っていきなり魔獣討伐！？

「うう・・・」

悪夢を見た

よりによって死ぬ寸前

トラックが突っ込んでくるところ

死んだ途端に目が覚めた

「うう・・・なんていやな朝だ・・・」

俺は自分の頬を叩き目を覚ます

「気を取り直してギルドに行きますか」

どっかで仕事したい

・・・っとその前に家探しますか

俺は自分の荷物から着替えを取り出そうとして

呆れる

「なんで・・・女物ばかりなんだ」

A、性転したからです by 神

しかもズボンがほとんどない

ついでに言っちゃうとフリフリとか恥ずかしいのばかり

あの神・・・次あつたら殺そう

「・・・まあいいか」

やっぱ夢じゃないよな

実を言うと俺はこれまでのことを全て夢だと思った

死んだのも

フェアリーテイルの世界に来たのも

全部夢

「せめて性転換されてなけりゃよかったのに」

これまでのシリ阿斯を全てぶち壊す発言

でもないか

俺は自分の着替えの中から比較的マシなものを選ぶ

女性物の下着をつけるのは恥ずかしかったが何とか耐えた

神様もそこは気を使ってくれたのかスポーツブラとスパッツだった

助かった

膝下ぐらいのズボンにＴシャツとパーカーを着て民宿を出る

とりあえず家借りたいんだよな

俺は不動産屋（？）へ向かう

家は２時間ほどで見つかった

金はたくさんあるから条件とかにこだわらなかったためだろう

ちなみに一括払いで一軒家

ちなみに値段はそんなに高くない

あまり大きくても１人暮らしなので部屋が余るだけだ

それでも３ＬＤＫだけでも

そこそこ広い

「さて・・・まずは荷物をべばっ！ー！」

頭から俺の荷物が落ちてきやがった

手紙が落ちる

『送つといたよ 神』

なんで頭の上に落とす・・・

「おおおお・・・」

俺は頭を抑えてうずくまる

そのあと荷物を部屋に運びギルドへ向かう

「さて・・・なにするかね」

俺は掲示板(?)に張られてある依頼書を見る

討伐、採取、捕獲etc・・・

色々あるな

やっぱり討伐かな

とか思っていたらエルザに話しかけられた

魔獣の討伐と一緒にいかないかとのことだ

丁度行こうと思っていたので承諾

依頼書によると随分とでかい魔獣のようだ

体長30m、体重2t

でかすぎ

しかもでかい角には毒があるから注意って

こんなでかい角なら毒がなくても並みの人間なら即死だっつーの

まあ俺は普通じゃないけども

アブノーマル
異常だ

それでも腹を貫かれたりしたら死ぬか・・・

俺は依頼の内容をもう一度よく見る

報酬、210万J

これってS級じゃないよね

見るとS級ではなくAA級と書いてある

ギリギリじゃねえか

こうして俺とエルザは二人で魔獣の討伐に行く事になった

初仕事・・・っていきなり魔獣討伐！？（後書き）

次回、魔獣討伐依頼です

そこから戻ってきた頃にララバイ編です

とりあえず倒した魔獣があの時エルザが持ち帰った角の持ち主とでも思っと思ってください

明らかにS級な気もしますがスルーで

それとAA級なんてあるのかというのもスルーで

それじゃまた次回

アレ・・・ここに来てから俺、過負荷のしか使っていない・・・（前書き）

サブタイの事情は作者のストーリー的な都合です

今回は魔獣討伐ですね

主人公の初仕事？です

そいじゃどーぞ

アレ・・・ここに来てから俺、過負荷のしか使ってない・・・

ギルドで依頼を受けて大体3日が経った

「着いたぞ」

エルザが少し離れたところにある村をさす

「やっと着いたか・・・」

疲れた

まさか目的地まで馬車で3日もかかるとは思わなかった

丁度 村の門の前で馬車が止まる

俺とエルザは馬車を降りる

「さて、宿を探すぞ」

「あいゝ・・・」

「馬車に乗っていただけでそんなに疲れていては闘えないぞ？魔獣の討伐は大体時間がかかる。まして今回はAAランク、数日はかかると思っている」

マジか・・・

畜生・・・って待てよ？

アブノーマル
異常を全力で使えば勝てんじゃね

ちなみに俺は神に枯れた樹海の異常を貰うついでに武器を大量に貰っている

全部懐に隠してある

まだエルザの換装は見えていないので使えない

「何をしている。行くぞ」

おっと

いつの間にやらエルザがあんな遠くに

「あいよ」

適当に返事をして村へ入る

まずは村長の所に挨拶へ行くらしい

毒角竜

どうやらそれが今回討伐する魔獣の名前らしい

角と言うかどちらかという也太い棘みたいな物で全身に生えている

短い角だ^{もの}と4 m

長い角だ^{もの}と数十mにもなるらしい

いやでかすぎだろ

ありえねえ

だがむしろ警戒するのは身体に生えている長い毒角よりも尻尾に生えている1 mほどのもの

尻尾を動かして攻撃してくるので相当危険だそうだ

つか今更だけどA A級なんて原作にあっただろうか

ゲームにも無かった気が・・・

「奴を倒そうとして行った兵は皆戻っていません・・・今のところ犠牲者は100人以上」

いや絶対S級だろこれ・・・

オイオイ

「お願いします・・・早く何とかしてください」

なんだこのテンプレな会話

ドラクエ？

「分かりました。明日の早朝、退治に向かいます」

とエルザ

村長がお礼を言い今日は宿で休んでいく事になった

翌朝

「起きろ」

エルザに蹴り起こされた

「うばいっ!!」

わき腹にクリーンヒット

俺はうずくまりながら

「エ・・・エルザさん・・・いくらなんでも蹴りを入れることは無いんじゃない・・・」

「お前が起きないから悪いんだろう・・・何回も声をかけても起きないし・・・揺すっても起きないじゃしょうがない」

マジっすか

俺ってそんなに起きなかったん？

「うう・・・」

反論できない

仕方が無いのでさっさと立ち上がり着替える

そいじゃ毒角竜の討伐に行きますか

んで着いたのは1kmほど離れた村からすぐ近くの森

薄気味悪い獣の鳴き声やらが聞こえてくる

「……?」

俺はエルザに聞く

「村長によるとここらしい」

「ふーん」

とりあえず中に入る

しばらく歩く

すると背後から紫色の炎の弾が飛んできた

俺は反射的に避ける

（高千穂仕種の反射神経って便利）

とか考えている俺

にしても紫の炎って・・・アレ?そーいやフェアリーテイルにそんな魔法使う奴居たような・・・

あーそうだ・・・マカオだ

でも属性違っただろうな・・・

「来たぞ・・・」

エルザが警戒しながら言う

「まさかそっちから来るとはな」

そこに居たのは身体に無数の長い棘がはえた竜だった

棘はなんだか脂ぎったようにテカっている

正直触りたくない

すると竜の口が紫色に燃える

「来るぞ！！」

エルザが叫ぶと竜は炎を吐き出した

炎は大きく地面を焼き、腐らせる

荒廃した腐花に似ているのは気のせいではないだろう

エルザが黒羽の鎧に換装して切りかかる

だが竜はびくともしない

「よつと」

俺は懷からアスカロンを取り出す

え？それって禁書じゃないかって？

そうだけどなにか

「お前・・・私と同じ魔法が使えるのか」

なんか聞かれた

「懐に隠してただけ」

「嘘付け」

嘘じゃない

まあ無理も無い

だってアスカロンのサイズ自体異常だもの

たしか3mで200kg

だが骨切り指切りがあれば軽く振り回せる

「そおい！」

まずは棘を砕く

てかコイツの名前毒角竜から毒棘竜に改名したらどうだ・・・

明らかに角じゃねえよ

そのまま棘を砕いていく

エルザも棘を砕いている

すると鱗が見えてきた

「棘の下に鱗があるのかよ・・・」

二重構造とは驚いた

意味分からん人は勝手に解釈しんさい

俺は鱗にアスカロンを叩きつける

切れない

むしろアスカロンが傷ついた

「オイオイ・・・どんだけ堅い鱗だよ」

カッチカチやぞおおお

すみません、やりたかっただけです

気を取り直して俺はアスカロンを懷にしまい糸鋸を出す

神特製糸鋸だそうで

俺は鱗を剥ぐ

すると竜が尻尾を俺に叩きつけてきた

「っ……！」

毒が入る

やっべ……ミスった

だがこんなときに役立つ大嘘憑き

俺は毒を無かった事にする

もちろん傷も

俺は懷からバズーカを取り出し剥いだ鱗の位置に撃つ

『ギョルアアアアア』

竜が気持ち悪い鳴き声を上げる

今更だがこの竜に翼は無い

棘を碎いてしまえばこっちのものだ

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

エルザが雄たけびを上げ竜を切りつける

鱗が削ぎ落とされ肉が裂ける

なんつう力……

俺も機関銃やバズーカ、狼牙棒などでボッコボコにする

ぶっちゃけちゃうと荒廃した腐花を使えばあっという間だったろうが使わなかった

鱗が武器などの素材に使えるとか何とか

モンハン？

あと結構な高値で売れるとかで腐らせるのはもったいない

だから荒廃した腐花は使わない

さらに俺は竜を攻撃する

『ギョルギヤアアアアアアアアアアアアア』

竜は断末魔を上げ倒れた

「討伐完了」

「思ったより早く終わったな・・・」

そりゃあ妖精の尻尾最強の女とチート転生オリ主なら即効だろう

俺は完成でエルザの換装を覚えた

持っている武器をしまう

身体がとても軽くなった

少しテンションがあがる

俺とエルザは持ち運ぶために竜を一度解体する

使えそうな部分を持っていくためだ

角、鱗、尻尾などに残った棘

など

棘は全て折ってしまい残ったのは頭にある大きな角だけだ

それらをやってきた村人たちに運んでもらう

もちろん俺たちもいくらか運ぶ

村に着いた

報酬の210万Jは105万Jずつ分ける

山分けだ

村人たちが魔獣の角に飾り付けをしてくれた

毒とかないよな・・・とか思っていたら

「奴の毒は魔力で生成した物なので死ぬとなくなります。なので肉も食べられますよ?」

とのこと

それでも肉は食べたくない

だがエルザは肉を布に包み氷の入った袋に詰め込んでいる

「喰うのかそれ・・・」

と聞いたら

「せっかくくれるといっているんだから貰っていい。それに帰りは歩きだから食料はあった方がいい」

と返ってきた

ってちょっとまって・・・歩き？

「そうだぞ？帰りは歩きで帰る」

マジか・・・

仕方ない

そう思いながら俺たちはギルドへ帰る

途中の街でよった店で鉄の森のメンバーがララバイの話をしていた

エルザは気付かなかったようだ

俺は気付いていたが原作をあまり壊す気は無い

正確には今はまだ無い

もうちよい進んだら思いつきりぶっ壊す

さて・・・原作ブレイクが楽しみだ

アレ・・・ここに来てから俺、過負荷のしか使ってない・・・（後書き）

初仕事でいきなりA A

帰ってきた頃にはナツやルーシイも居ます

ちなみに主人公が落つこちたときはグレイもナツも仕事で居ませんでした（そういうことにしました）

というかナツは丁度 サラマンダー 火竜を探しに行っていた頃だと思えます

グレイはたまたま

まあご都合主義なところや強引なところもありますが今後よろしくお願いします

鉄の森（前書き）

やっとナツとグレイ、ルーシィの3人が出せる

ようやく原作介入です

そんじゃどうぞ

鉄の森

「やっと着いた・・・」

ようやくギルドが見えてきた

数日前、A A級の竜退治に向かった俺とエルザは徒歩でギルドまで帰った

「この程度で疲れるとは情けない」

エルザとは身体のがくりが違うんだよ・・・

元男とはいえ身体は14（推定）の女子だぞこのヤロー

「しかも・・・」

俺は一息ため

「何でこの馬鹿でかい角を持たなきゃいけないんじゃあアアアアアアアア」

叫ぶ

そう

あのでかい角は今俺が持っている

エルザによると

「あんな馬鹿でかい大剣を片手で振り回していたお前ならこれくらい持てるだろう」

とのこと

ふざけんなこのやロー

っと

なんかふざけてる間にギルドのまん前だ

なんか中が騒がしい

多分エルザが帰って来たからだろう

と思ったら違った

どうやらエルザが知らない奴を連れているからのようだ

って俺じゃん

そっぴや俺が来たときギルドには数人しか居なかったしな

てか居たのってなぜかミラさんにエルザ、マスターだけだったような

あと誰かいたっけ

えーっと・・・うん居ない

すると急に角が重く感じた

「あれ・・・」

俺は角に押しつぶされる

「重っ・・・」

すると急に背中が軽くなる

「大丈夫か？リヨウ」

どうやらエルザが角をどけてくれたようだ

「サンキューエルザ」

俺は立ち上がり中に入る

「今、戻った。マスターはおられるか？」

エルザが角を下ろしそう言った

「お帰り、リヨウにエルザ。マスターは定例会よ」

ミラさんが答える

なんかミラさんは呼び捨てにしづらい雰囲気なんだよな

なんでだろう

「エ・・・エルザさん・・・その馬鹿でかいのなんですかい？」

ギルドの人の一人が聞いてくる

「あとそいつ誰だ？」

誰かが聞いて来た

どうやらナツらしい

「そう言えばナツは居なかったな。この子はいこの間ギルドに新しく入った・・・」

「リヨウ・アオサキです」

一応、名前を先に言う

「新人？」

「てか・・・いきなりエルザと仕事行ったのかよ・・・」

ざわざわと声が聞こえる

「なかなかやるようだな、私の魔法を一度見ただけで使いこなした」

あれ

「分かってたの？」

「最初は武器を服から取り出す感じだったのが急に換装で出すよう

になった」

気付かないと思うか？

そう言つて来た

エルザの観察力つてすごいな

「見ただけで真似るって・・・」

「嘘だろ？」

「ありえねえ・・・」

またざわつく

既にエルザが持ち帰った魔物の角には興味ないようだ

「それよりお前たち・・・また問題ばかり起こしているようだな。マスターが許しても私が許さんぞ」

エルザがギルドに聞こえるように言う

委員長みてえ・・・

俺の学校の委員長がこんな感じだったような

「な・・・なにこの人・・・」

「エルザ！とっても強いんだ」

ルーシィとハッピーが話してる

とりあえず腹減ったな・・・

俺は取り合えずなんか食べようと思いエルザが周りを注意しているのを聞きながらミラさんになんか貰いに行く

「すみません・・・おなか減ったんでなんか食べさせてください」

「何にする？」

なににすつかな

メニューあるし

ギルドって酒場だったよなそう言えば

「コレで」

とりあえずスパゲッティらしきものを頼む

あと飲み物にコーラがあつたんでそれ

「ハイ」

速い・・・

一瞬で来た

「・・・」

あまりの速さに呆れる

とりあえず食べる

結構うまい

15分ほどで完食

さて・・・仕事選ぶか

とか思っているとエルザが話しかけてくる

「お前も来てくれ」

えーっと・・・何に？

「・・・話聞いてたか？」

後ろにナツとグレイ、ハッピー、ルーシィが居る

となると

「鉄の森のこと？」

いきなり原作介入ですか

早・・・

「そうだ」

どうやら4人でチームを組むことになるらしい

原作では+2だけど

「分かった」

俺はそう答え残っていたコーラを飲み干す

するとミラさんが呟く

「エルザとナツとグレイ・・・今まで想像したことなかったけど・・・これって妖精の尻尾最強チームかも・・・」

俺はスルー？

まあ新人だからな

周りがざわつく

「出発は明日だ。準備をしておけ」

そういつてエルザは何処かへ行く

その後

「む・・・無理だ・・・」

グレイが呟く

「こいつと一緒にっただけでうぜえのにエルザと一緒にだなんてー!!」

「こんなチームありえねえ!!っーかいきたくねえー!!」

本当に仲悪いみたいだなコイツら・・・

まあなんやかんや言って仲良いけども

俺は矛盾した事を考えながらボーっとしていると

「ねえ・・・あなたも新人なの？」

ルーシイが聞いてくる

俺は頷く

「へえ、私以外にも居たんだ！」

なんかうれしそう

「ヨロシク！」

といって握手を求めてくる

「よろしく!!」

俺はルーシイの手を握る

「リョウちゃんていいんだよね？」

「ああ」

「新人同士よろしくね？」

「あい」

「ハッピーみたいな返事・・・」

少し呆れながら笑ってそういう

「あー！オイラの口癖真似ないでよー！！」

「ごめんごめん、噛んだんだ」

適当にごまかす

「ようし！今回は許してやろう！」

なんで上から目線？

とりあえず仲良くやってけそうだ

俺は一通り話した後家に帰る

ロキがナンパしてきたので一蹴してから

鉄の森（後書き）

てなわけで原作介入です

てかこんなペースでどこまで進められるか・・・

まあ頑張ります

そいじゃまた次回

とりあえずチームメンバーの顔合わせ（前書き）

推薦貰えたあああああああ！！

はい。叫んですみません

つい

まあ推薦もらえたからっていい気になると本番の高校面接で落
つこちて推薦もらえても受からないなんてこともあるから気を抜け
ないんだけどとりあえず第一難関は越えたという事です

自分の私情ダラダラ話してすみません

それじゃ本編どうぞー

とりあえずチームメンバーの顔合わせ

「何でエルザみてーなバケモンがオレたちの力を借りてえんだよ」

「知らねえよ、つーか『助け』ならオレ一人で十分なんだよ」

「じゃあお前一人で行けよ！！オレは行きたくねえ！！！！」

「じゃあ来んなよ！！後でエルザに殺されちまえ！！！！」

マグノリア駅にやってきたらナツと 그레이が喧嘩していた

どうしよっかな

「ルーシィ、止めた方がいいかな」

「止められるなら止めてほしいわよ」

アレ？原作だと普通に止めてたような

まあいいや

「そおい！！！！」

俺はナツと 그레이の首筋にスタンガンを当てる

「ぐえ！！」

「があ！！」

気絶

「これでよし」

「よくないわよ!!」

ルーシィに突っ込まれた

「大丈夫大丈夫」

「ホントに？」

「多分」

「多分かい!!」

とかアホなやり取りをしているとナツグレイが起きた

グレイ「うう……一体何が……」

ナツ「敵か？」

敵って……

「とうかなんでルーシィが居るんだよ」

ナツがルーシィに聞く

「頼まれたのよミラさんに!ミラさんの頼みだから仕方なくついて

ってあげるのよ」

とか行っている

すると

「本当は一緒に行きたいんでしょ」

とハッピーが言う

「まさか！！てか3人の仲とりもつならアンタがいたじゃない！！
うわーかわいそっ！ミラさんに存在忘れられてるし！！」

「あい」

ハッピー言われたい放題だな

「というかハッピーにナツと 그레이 の喧嘩を止められるとは思えな
いんだけど・・・」

「それもそうね」

「あい」

とかやっていると

「テメエなんでいつも布団なんか持ち歩いてんだよ」

「寝るために決まってんだろアホかお前」

また喧嘩しとるし

するとルーシイが何か思いついたようで

「あ！！エルザさん！！」

と叫ぶ

するとナツと 그레이が突然仲良くしだした

俺とルーシイが一緒になって爆笑する

「「騙したなデメエ！！！」」

息・・・ピッタリじゃん・・・

「というかお前なんだその格好」

どうやら俺に聞いたようだ

黒タイツの上に白い制服

まあここまで言えば分かるだろう

ブラックオウガ スノーホワイ
黒鬼の上に白虎を着ている

白虎は耐圧繊維で造られていて黒鬼は防刃にありとあらゆる環境に耐え切れる装備

多分最強の防御力

「なんでそんなの持ってたんだよ」

「持ってたもんは仕方がない」

「あつそ」

こんなやりとりをしていたらエルザがやってきた

「すまない・・・待たせたか？」

「荷物多ツ!!」

ルーシイが驚いた

確かに多い

「エルザ、荷物多くない？」

「私はいつもこれくらいだ。前にも言わなかったか？」

そういえば

「ん？君は昨日妖精の尻尾にいたな・・・」

エルザがルーシイの方を見る

「新人のルーシイといえます。ミラさんに頼まれて同行することになりました。よろしく願います」

「私はエルザだ。よろしくな。そうか・・・ギルドの連中が騒いでいた娘とは君の事か・・・傭兵ゴリラを倒したとかなんとか・・・頼もしいな」

「それ全部ナツだし・・・」

と自己紹介を終えたところでエルザが話す

「今回は少々危険な橋を渡るかもしれないがその活躍ぶりなら平気そうだな」

「危険!?!」

ルーシィがエルザの危険という言葉に反応する

すると

「何の用事かしらねえが今回はついてってやる。条件付でな」

そういつてナツはエルザに条件を出す

「帰ってきたらオレと勝負しろ!」

その言葉に 그레이 が止めようとする

エルザは結構乗り気

그레이 にも勝負するか聞いている

그레이 は頭が取れるんじゃないかという勢いで頭を振っている

そろそろ汽車が出るので俺たちは汽車に乗った

乗った直後にナツがすぐ苦しそうな顔をする

「なっさけねえなあ、ナツはよお・・・」

同意

「まったくしょうがないな。私の隣に來い」

エルザが自分の隣の席をぽんぽんと叩きナツを座らせる

そして

鳩尾にパンチを打ち込んだ

ナツは氣絶する

「少しは楽になるだろう」

ひでえ

「そっついや・・・あたし妖精の尻尾でナツ以外の魔法見たことないかも」

ルーシィがエルザにどんな魔法を使うのかを聞く

ハッピーが答えた

「エルザの魔法は綺麗だよ」

という

「血がいっぱい出るんだ、相手の」

「綺麗なの？それ・・・」

ルーシィは呆れる

「たいした事はない・・・私は 그레이 の魔法の方が綺麗だと思うぞ？」

「そうか？」

그레이 が手を合わせ魔法を使う

そこには妖精の尻尾のマークが氷で出来ていた

「わぁ！！！！」

「氷の魔法さ」

「氷ってアンタ似合わないわね」

「ほつとけつての」

するとルーシィが

「氷と火って・・・だからあんた達仲悪いのね」

と言う

「そうだったのか？」

「どうでもいいだろそんな事ア」

そろそろ本題に入ろうと言う事でエルザが今回の仕事の説明をする

ララバイ

鉄の森

死神エリゴール

とりあえず簡潔な説明

ルーシィが帰ろうかなとかいつている

「不覚だった・・・あの時エリゴールの名に気付いていれば・・・
全員血祭りにしてやったものを・・・!!」

怖・・・

「その場にいた連中だけならエルザ一人でなんとかなったかもしれ

ねえ・・・だがギルド一つ丸まる相手となると・・・」

「奴らはララバイなる魔法を入手し何かを企んでいる。私はこの事実を看過する事は出来ないと判断した」

エルザは続ける

「鉄の森に乗り込むぞ・・・!」

「面白そうだな」

グレイは同意

ルーシィは後悔している

「そうだエルザ」

俺はあることを思い出す

「なんだ？」

「ナツは？」

「・・・あ・・・」

「なんという事だ!! 話に夢中になるあまりナツを列車においてきた!! アイツは乗り物に弱いと言っのに!!!」

自分を責めるエルザをルーシィが半ば呆れ気味になだめる

「そついうわけだ！！列車を止める！！」

「どついうわけで・・・？」

「エルザ・・・あまり無理を言わないほうが・・・」

半ば呆れ気味に俺は突っ込んだ

そのままエルザと駅員は口論を続ける

エルザは緊急停止信号のレバーを見つけハッピーにいかせる

「ナツを追うぞ！すまない、荷物をホテルチリまで頼む」

「誰アンタ・・・」

見知らぬ人に荷物を運ばせんよ

とりあえずチームメンバーの顔合わせ（後書き）

中途半端に終わってすんません

まあしょうがない

主人公に戦わせるのはもう少し先になりそうです

それじゃまた次回

久々に暴れてきます（前書き）

暴れさせられそーだ

そんなわけでどーぞ

久々に暴れてきます

俺たちは魔道四輪でナツの乗った列車を追っている

「エルザ、飛ばしすぎじゃない?」

「大丈夫だ」

「疲れたら交代してやるっか」

「まだ大丈夫だ」

「そっか」

とかなんとかやっているのと列車の窓からナツが飛び出してきた

「ナツ!?!」

「何で列車から飛んで来るんだよ!?!」

「どーなってるのよ!?!」

んで

ナツの頭が 그레이 の頭に直撃した

「うわーいたそー」

「あい」

俺とハッピーは結構冷静

「「ぎゃああああああああああ」」

二人は悲鳴をあげ地面に頭から落ちた

「ナツ、グレー、だいじょーぶかー（棒読み）」

「アンタ全然心配してないわね・・・」

「うん」

ルーシイの問いに即答する

「ナツ！・・・無事だったか！・・・」

エルザはとりあえず安心したようだ

ハッピーがグレーと喧嘩している所へ飛んでいく

「ハッピー！エルザ！ルーシイ！リョウ！ひでえぞ！・・・てか置いてく
なよ！・・・」

「ごめん（超棒読み）」

「すまない」

「ごめん」

「おい・・・随分都合のいい記憶喪失だな・・・」

エルザがナツを引き寄せ

「無事で何よりだ。よかった」

といって胸に抱く

もちろん鎧を装備しているので

「硬ッ！」

となるわけで

「無事なもんか！！列車で変な奴に絡まれたんだ！！」

エルザは頭に？マークを浮かべている

「ナツ、そいつってもしかして鉄の森とか言う奴じゃなかったか？」

俺はナツに聞く

「おお、そっぴゃそんな奴だった」

そっぴゃった瞬間ナツにエルザのビンタが飛んだ

数m吹き飛んだ

「鉄の森は私たちの追っている者だ！！」

「そんな話始めて聞いたぞ・・・」

「なぜ私の話をちゃんと聞いていない!!」

まるでコントのようだ

「エルザが気絶させたからだろ」

俺は冷静に突っ込む

「そうだった・・・すまんナツ」

ナツは殴られ損見たいな顔をする

だがエルザには逆らえない

下手に逆らうとどうなるか

「さっきの列車に乗っているのだな。今すぐ追っぞ！」

エルザはナツにそいつの特徴を聞く

「あまり特徴なかったなあ、なんかドクロっぽい笛持ってた。三つ目のあるドクロだ」

「なんだそりや・・・趣味ワリイなア」

それにルーシイが何か思い出したように考える

「どうしたルーシイ」

「もしもその笛が呪歌だとしたら・・・子守唄眠り・・・死・・・
!!--!!--」

どうやら気付いたようだ

「その笛がララバイだ!!--!!--呪歌・・・死の魔法!!--」

「何!!--?」

「呪歌?」

「(?!!--?)」

全員が何の事か分からないような顔をする

ララバイはその笛の音を聞いたものを全員死に至らしめる魔法だとか何とか

つまり集団呪殺魔法

俺たちは急いで次の駅へ向かう

クヌギ駅にやってきた

なんだか人が多いな・・・

ナツは魔道四輪のせいで虫の息だ

どうやら奴らは列車を乗っ取ったらしい

俺たちはさらに次の駅へ向かう

んでオシバナ駅

そこにもやはり人が集まっている

駅員が駅を封鎖していて中に入りづらい

どうにか駅員の前までたどり着く

「駅内の様子は!？」

エルザが駅員に聞く

「な・・・なんだね君は!!」

と返答した途端エルザの頭突きが駅員に直撃

同じ質問を他の駅員にも聞き次々とノックアウトしていく

「即答できる人しかいないってことなのね・・・」

「だんだんわかってきたろ？」

「うわぁゝ躊躇ねえゝ」

俺は駅員を次々ノックアウトしているエルザをポケットと見てる

駅員さんご愁傷さまです

とりあえず中に入る

「てかこれってあたしの役！？」

ナツを抱えたルーシィが叫ぶが

「中へ行くぞ！」

「おう」

「あいさ！」

「おー」

全員無視

もちろん俺も

ナツを抱えるのはめんどい

中では軍の兵が倒れていた

全滅

俺たちはそのままホームへ向かう

そこには

「やはり来たな・・・妖精の尻尾」

鉄の森が集まっていた

「待ってたぜえ」

そういったのは多分エリゴール

「貴様がエリゴールだな」

エルザが問う

ナツは気絶中

列車

←

魔道四輪

←

ルーシィ

の3コンボだとか

ルーシィも乗り物のガテコリかい

奴らはどうやらララバイを馱で放送するつもりらしい

まあ本当は違うが

俺以外の4人が驚く

「何でアンタは驚かないのよ・・・」

半ば呆れ気味に聞かれた

「顔に出ないだけ・・・」

とりあえずは驚いている

「残念だな妖精ども」

その声を聞きナツが意識を取り戻す

「闇の時代を見ることがなく死んでしまうとは!!」

カゲが影を使いルーシィに攻撃する

だがナツが炎で影を切り裂いた

復活

「今度は地上戦だな！」

そしてとりあえず戦闘開始

エリゴールが窓から逃げた

「ナツ！グレイ！二人で奴を追うんだ！！」

ナツとグレイは嫌そうだ

「ここは私とルーシィとリョウでなんとかする！！！」

「なんとかって・・・この数を女子3人で？」

「大丈夫だと思うけども・・・武器かそっか？」

俺はアックアのメイス（5m）を渡す

「んなでかい武器使えないわよ・・・」

ふむ

どこから出したとかは聞かないのか

ナツとグレイがエルザに怒鳴られ肩を組みながらエリゴールを追う

すると

「女3人で何が出来るやら」

「とっ捕まえて売ろう」

「待て待て！妖精の脱衣ショー見てからだ！」

とかなんとか言ってる

「気持ち悪ッ！」

「下劣な・・・」

「かわいすぎるのも困り者ね」

ルーシイは自意識過剰

「なんですって！」

「地の文に突っ込むな」

エルザが魔法剣を出す

「珍しくもねえ！！」

「こっちにもぞろぞろいるぜえ！！」

「その鎧ひん剥いてやるわあ！！」

「ひやははあー」

とか叫びながら鉄の森のメンバーがこっちへ向かってきた

エルザはそれに切りかかる

俺は螺子を飛ばして敵の顔面を狙う

「どわぁー!!」

「この女！容赦ねえ!!」

とかリアクションはさまざま

「死んでも生き返らせてやっから問題ねえぞ!？」

俺は今殺人衝動全開だ

さまざまな暗鬼を身体中から取り出したり換装したりして敵を切り刻む

「容赦なさすぎいー!!」

ルーシイが叫んでる

「ルーシイ見てないで精霊呼び出せこのヤロー」

「なんか口悪くなってる!？」

とかやっている後ろから敵が一人切りかかってくる

「腕一本貰ったあああああああああ」

剣が俺の肩に当たる

だが切れない

「んな！？・・・ひい！」

俺はそいつの顔面にアイアンクロー＋ラフレシア『弱』

「ぎゃあああああああああああああああああああ」

顔面がみるみる腐り、ただれていく

俺は動かなくなったそいつを捨てる

とりあえず大嘘憑きで直すが意識は戻っていない

よほどショックだったか

「めんどくさいな・・・」

いい加減めんどくなっただんで

「アイスメイク・・・槍騎兵！」

さっき完成させた 그레이 の造型魔法で敵を一掃

「ええ！？」

この声を上げたのはハッピー

「なんでリヨウが 그레이의魔法を使えるの!？」

「それが俺の特技です」

見ただけで120%引き出せる

でもそこまでは説明しない

螺子とスーパールボールも使って残った敵を殲滅していく

最後の一人の顔面に螺子をぶっ刺して終了

どうやらエルザの方も終わったようだ

エルザの方は倒れてるだけ

こっちは螺子を全て抜いて直したが精神的ショックは酷い

なにせ一度顔面を螺子に貫かれて死んだんだ

当然だ

意識を取り戻したものは俺の持つ血のべったり付着した螺子を見た途端また倒れた

ほかにもイカレてしまった者や

しゃべれなくなった者もいるようだ

「さすがにやりすぎた・・・」

ちよつと反省

「本当にやりすぎだばか者！！！」

頭を叩かれた

片刃の剣の峰内で

「いつてえ・・・」

俺は頭を抑えてうずくまる

「いいじゃんエルザだって魔力温存できたんだし」

「よくない！！」

また叩かれた

ルーシィは呆れながら苦笑してこちらを見ている

「頭痛い・・・」

そう呟いて俺たちは移動した

久々に暴れてきます（後書き）

とりあえず今日は終了です

そいじゃまた次回～

魔風壁（前書き）

今回短いです

ごめんなさい

そいじゃどーぞ

魔風壁

「うわぁー完全に見失った」

俺は駅の構内をうろろしながら呟く

ちなみにハッピーとルーシイもいる

俺たちは逃げた鉄の森のメンバー（デブ）を追ってやって来たが見事に見失ってしまったということだ

「あい」

「ねえ一旦エルザのところにもどらない？」

ルーシイが提案した

俺は同意しようとしたがハッピーのビビリ方をみて思いとどまる

そんなにエルザは恐いのか・・・

ルーシイはその様子を見て探す事にしたようだ

「ルーシイってコロコロ態度変わるよね」

とハッピー

「同感」

俺

んでルーシイが切れた

「てかなんであたしに懷いてんのこのネコオ！！！」

「マアマア落ち着けコロコロルーシイ」

俺は少しからかってみる

「コロコロってどういう意味よ！！」

とルーシイが反論

すると

「コロコロ態度変わるって意味じゃないかな」

ハッピーが乱入

「それぞれ」

同意

「もおおおおお！！」

ルーシイ困ってる困ってるww

おもしれーw

さて・・・

「さっさといこーぜ」

「そうね・・・疲れた」

「あい」

俺たちはまた歩く

んで

「お邪魔だったかしら・・・」

「あい」

「うわー大惨事」

行ってみるとそこにはナツとグレイ、エルザがいて

カゲが倒れていた

後ろから刺されたらしい

だがカゲがいなければ魔風壁は解除できない

しかも奴らの狙いは定例会

急がなければまずい

と言う訳で俺たちは今魔風壁の前にいます

ナツが無理やり突破しようとするが簡単に跳ね返される

「うわー凄い事になってんね」

「下手に出ようとしたらミンチだぜこりやア・・・」

「リヨウの魔法で何とかできないか？」

「いや俺に頼られても・・・」

ふむ・・・そうだな

「とりあえず俺だけ先に出てた方が良かな」

「いやだから出るにはこの魔風壁をどうにかしなければならんだ」

反論されたが無視

俺は少し下がり

「先行ってるわ。皆離れてて」

運がよく大穴あいて全員出られることを祈ろう

俺はその場でジャンプ

とーんとーん

とーんとーん

「なにやってんだ？」

「良いから離れないとミンチになるぞ」

とーんとーん

とーんとーん

とーんドンツ！！

俺は一気に前へ飛ぶ

黒神ファントム

使った奴の苗字が先に来るなら青崎ファントム？

そのまま魔風壁をぶち破った

「つと・・・！」

勢い余って外まで飛んでってしまった

「おおおおおおおとおっとお！」

ギリギリ着地

「あーあぶねー……危うく転んで顔面が摩り下ろされる所だった」

転んでたら大惨事

うわー……白虎がボロボロじゃん

もちろん魔風壁によるものではない

黒神ファントムの余波である

「なんつー威力……」

俺は大嘘憑きで修復

すると少し離れたところから声が聞こえた

「ええ！？何あれ！？」

「魔風壁を破るとは……」

「お——い！生きてるか——！！」

最後のはグレイ

「生きてるわバカタレ」

聞こえるように叫ぶ

「よし！！それならそのままエリゴールを追ってくれ！！こっちも何とか出る手段を探す！！」

「わかった！！」

俺はエリゴールを追うためにクローバーへ向かう

そして向かってる途中で気付く

「カゲを大嘘憑きで治せば全員出れたんじゃない？」

後悔してももう遅い

多分そのうちバルゴで出てくるだろ

「行くか」

俺はエリゴールの元へ向かう

魔風壁（後書き）

ちよつと短かったです

許してください

それじゃまた次回

エリゴールをいじめよう(前書き)

更新しましたー

そいじゃどーぞ

エリゴールをいじめよう

俺は翼でエリゴールを追っている

「居た」

400mほど先にエリゴールの姿が見えた

4秒とかからず追いつく

「オラアアアアアア」

俺は翼を解き勢いに任せてとび蹴りを喰らわせる

「がはあ!!」

エリゴールは吹っ飛んだ

「ようエリゴール、追いついたぜ」

俺はあざ笑うようにエリゴールを見る

「貴様・・・いつの間に・・・なぜこんな所に・・・」

「お前を木製フィギュアにでもしてやろうと思ってな」

俺はエリゴールに言い放つ

「木製フィギュア？」

なんか呆れられた

「来いよ、ついでにその笛もただのリコーダーにしてやる」

（魔風壁は・・・カゲヤマどもはどうした・・・あと少しでじじいどもの居る場所につくつてのに・・・！！）

うわー考えてる事まる分かり

まあ俺がそういう異常を持ってるからか

「魔風壁なら簡単に破れたよ。あんなただの紙みたいな薄い竜巻簡単に貫けるっつーの、俺を止めたいなら・・・」

俺は手元に風を集める

「これぐらいやんねえとなああああ」

そして特大の竜巻をエリゴールの足元に発生させる

「なあ！！」

エリゴールはそのまま数百m上空まで巻き上げられた

「そのまま上空から逃げようなんて思うなよ？」

俺は一瞬でエリゴールの目の前まで上がる

「何！？」

そして踵落としを決める

「ぐああ！」

そのまま一気に落ちていった

俺もそれを追い地面に降り立つ

エリゴールも風で勢いを弱め降り立った

（なんだ・・・なんなんだこいつは！）

「アフノーマル
異常だ」

「なんなんだお前はあああああああああ」

俺は叫ぶエリゴールの目の前に行き腹に蹴りを入れる

「がああああ！！」

そのまま10mほど吹っ飛んだ

「ストームスプリンガー
くそ！！暴風波！！！！」

エリゴールが竜巻を放つ

「そんなん効くか」

俺は同じ技をエリゴールに放つ

「何！」

相殺

本気を出せば問題なく倒せるがそれじゃつまらない

「その程度かお前は」

「くそ！！」

エリゴールは暴風衣を纏う

とてつもない暴風がこつちへ流れてくるが俺には何の障害にもならない

「死ねえ！！」

エリゴールが大量のカマイタチを放つ

「うわーこりゃ避け切れんわ」

そういつつ俺は避ける

「避けてんじゃねえか！！」

突っ込むなよエリゴール

俺は殺さないようにカマイタチを放つ

カマイタチはエリゴールの腹に直撃する

もちろん真っ二つになんかしてないよ？

「がは・・・！」

エリゴールの暴風衣が解ける

「そろそろ飽きたな」

俺は懷からでかい筆を取り出す

「フェアリーテイルの木製フィギュアにでもなってるよ」

「なんだその筆は・・・」

うわー呆れられた

お前負けてんのによく呆れる余裕があるな

それだけこのでかい筆があほらしい武器に見えるんだな

「これは生き字引の筆といってだな・・・とりあえず見れば分かるだろ」

末代までその姿を恥じてみる

次の代も無いだろうがな

「お前が最後の代だよエリゴール」

俺はエリゴールに一瞬で近づき身体に『古毛四』と書く

するとエリゴールがこけしになった

「一生恥じてるよwその姿」

結局、翠緑迅見損ねたな

見るつもりも特になかったけど

すると後ろから誰かに呼ばれた

「リヨウ！」

振り向くと魔道四輪車がこちらに向かってきていた

「遅かったな。もう終わってるぞ」

「なんだそのよく分からない彫刻（？）は」

エルザに聞かれたので答える

「木製フィギュア」

「って・・・エリゴールじゃん・・・なんでこんな格好なの？」

「文字を消さない限り元には戻れんぞ」

「うわぁ・・・悲惨」

見るとナツと 그레이가 エリゴールの姿を見て爆笑していた

エリゴールは自分の着ている木製フィギュアを壊そうとしているらしいが無理そうだ

動く事も出来ず目に涙を浮かべている

「くつくつく、悲惨だなエリゴール」

といったらぶちい！という音が聞こえた

切れたらしい

カゲはショックを受けながらも笑いをこらえている

「やりすぎじゃないか？」

エルザが聞いて来た

「動けないだけで腹は減らない、寝なくても問題ないという状態だぞ？フェアリーテイルの玄関前にでも飾って見るか？」

「外観が悪くなる」

「じゃあ評議院にでも送りつけるか・・・」

「いい案だなそれ」

これ言っただのは 그레이

「あい」

ハッピーも賛同

皆ノリがいいな

とか考えているとカゲがララバイを持って逃げた

「笛はココだー！！ざまあ見る！！」

そのまま魔道四輪者に乗ってクローバーにむかう

「うわぁ・・・助けてやったのに逃げるとか・・・あいつ絶対友達
いないだろ・・・」

「いやあんた何もしてないし」

大嘘憑きで怪我を治さなかったのは正解だったかもしれない

そう思った

「とりあえず追うぞ」

俺たちはカゲを追いかけた

追いついてみるとカゲはマスターと向かい合っていた
いこうとするとオカマに止められた

「誰？」

「蒼い天馬のマスター！！」

「アラ、エルザちゃん大きくなったわね」

知り合いかエルザ・・・

カゲとマスターの会話が聞こえる

「どうした？早くせんか」

「・・・」

どうやらカゲは迷っているようだ

笛を吹くことに

「さあ」

エルザが止めに行こうとするが止められる

「・・・！」

（吹けば・・・吹けばいいだけだ！！）

受信感度でカゲの考えてる事が聞こえる

（それで全てが変わる！！）

「何も変わらんよ」

マスターがカゲの心境を見透かすように言う

「さすがだな・・・」

俺は聞こえないよう小さく呟く

カゲが動揺する

「弱い人間はいつまでたっても弱いまま・・・しかし弱さの全てが悪ではない、元々人間なんて弱い生き物じゃ」

マスターがカゲに語る

「一人じゃ不安だからギルドがある。仲間がいる」

カゲが迷う

「強く生きるために寄り添いあつて歩いていく、不器用なものは人より多くの壁にぶつかるとし、遠回りもするかもしれん。しかし明日を信じて踏み出せば・・・おのずと力が沸いてくる。強く生きようと笑っていける・・・そんな笛に頼らなくても、な」

見ると担いでいる木製フィギュアが涙を流していた

カゲが笛を落とす

そして

「参りました」

負けを認め頭を下げた

その途端にエルザやナツ、グレイ、ルーシィ、ハッピーが隠れていたところから一斉に飛び出す

「ぬおおおお！！なぜお前らがここに！！？」

「さすがです！！今の言葉目頭が熱くなりました！！」

エルザがマスターを抱く

鎧を着ているので

「痛ッ！！」

となるわけで

ナツがほめながらマスターの頭をたたく

ルーシイがカゲに医者に行けと言う

蒼い天馬のマスターはなんかかわいいとか言ってる

カゲに

「よっすマスター」

俺はマスターに話しかける

「リョウか、というかなんじゃそのでかい置物は・・・」

「エリゴールというなのこけしです」

「エリゴール？あ、本当じゃ・・・顔ついとる・・・ないとるし」

「さっきのマスターの言葉に感動したようで」

とか何とか話していると突然ララバイから煙が出る

「なんだあれ気持ち悪ッ！」

俺は一旦木製フィギュアを置く

「すみませんこれどっかに飾っといってください。水にぬらさないように」

俺は蒼い天馬のマスターに言う

「あなたもかわいいわね、いいわよ？」

とりあえず礼を言う

そしてララバイの方を向くとでかい化け物になっていた

「怪物――――！！！！」

その場にいた妖精の尻尾メンバーが叫んだ

エリゴールをいじめよう（後書き）

V S エリゴールでした

生き字引の筆は P A P U W A に出てくるミヤギの使う武器（？）です

主人公は神からいろんな武器を貰ってるので結構いろいろ出てきます

最早めだかボックス関係なくなりそうですが大丈夫だと思う

大丈夫だ・・・完成も使ってるし

大嘘憑きも使ってるし

受信感度も使ってるし

うん大丈夫

と言う訳で色々不安も残りますが今後もよろしくおねがいします

ララバイやらS級やらいろいろ(前書き)

ララバイ〜S級クエストの説明まで

それじゃどうぞ

ララバイやらS級やらいろいろ

『腹が減ってたまらん・・・貴様らの魂食わせてもらっぞ』

ララバイは気持ち悪い声を発しながらしゃべる

「魂って食えるのか!？」

ナツは相変わらずのアホだった

どうやらララバイはゼレフとかいう奴の生きた魔法だとか何とか

ふむ

『さあて・・・どいつの魂から頂こうかな・・・決めたぞ』

決めんな

『全員まとめてだ』

それは決めたというのだろうか

ってこれヤバいんじゃない？

ララバイが口を開ける

「憎武器・・・バズーカー・デッド」

俺は呟く

その瞬間ララバイの身体に亀裂が入る

『ぐぬう！！』

ララバイがうめき声を上げる

まああの異常は他も巻き添えにしてしまうので

「なんだこれは！？身体に傷が・・・！」

「いつてええええええええええ」

「なんだなんだ！？これがララバイの力か！？」

「でもララバイにも亀裂が走ってるぞ！？」

てな感じで他の人の古傷を開いてしまった

あちゃあ

しかも定例会の会場も半壊しとるし

地面は地割れやらなにやらでガツタガタである

まあとりあえず無視

俺はララバイに攻撃するためにRPG、7、メタルイーター改などの重火器を出す

「喰らえ」

いくつもの砲弾がララバイに撃ち込まれる

「まだまだあああああ」

ついでに凍る火柱でララバイの足を凍らせる

さらに顔面付近まで行って数千度まで体温を上げた足でララバイの顔面を蹴る

『ぐあああああああああ』

「なんじゃあの小娘は!？」

「一人でララバイを圧倒しとる」

マスターたちが目を丸くしている

『があああ・・・!』

ララバイがうめき声を上げる

『調子に乗りやがって・・・』

ララバイは呪歌を歌おうとする

が

「跪け」

俺の言葉の重みで歌う間もなく地に伏せる

『なっ・・・!?!?』

「はっ！無様に地面にキスしてなあ！！」

ちよつとテンション上がってます

んなことをしているとエルザやナツ、グレイも参戦してきた

「デメエだけかっこつけてんじゃねえ！！」

「俺たちにもやらせろ！！」

あーあーナツとグレイは目立ちたがりやだなオイ

「んじゃ後は任せた」

俺はひく

そのまま3人はララバイを剣で切ったり氷で破壊したり炎で爆破させたりとそのままララバイは倒れた

「見事」

マスターがほめる

「やっと終わったか」

他のマスターも関心しているようで

マスターは高笑いしている

誰かが言った

「これが・・・妖精の尻尾最強チーム！」

マスターがなんか調子に乗ってる

ルーシィお前なんかしろよ

んでなんか色々やっている

マスターが突然ビビって逃げ出す

見てみると定例会の会場が粉々になっていた

「・・・・・・・・・・」

マスターたちは目を丸くして口を開き啞然としている

「ははっ！見事にぶっ壊れちまったなア」

ナツ・・・笑ってる場合じゃねえぞ」

「捕まえろー！！」

誰かがこちらを指差して叫ぶ

ナツが任せるとか言っている

お前は捕まる側だろう

とりあえず皆一目散に逃げていった

やべ逃げ遅れた

「お前は逃げんのか」

「こつちに非は無いと思ってるんで」

「いや壊したのあんた等でしょ・・・」

「まあ最初に半壊させたのは俺・・・やべ」

「お前が犯人かーっ!!」

あっはっはー

自白しちゃったよ

「直すんで勘弁してくれ」

俺は大嘘憑きで会場を直す

「」「」「早ッ!」「」「」

まあ驚くわなあ・・・

瞬きしたら直ってますってぐらい早く直っちゃうもの

「それじゃこれで」

俺もみんなを追って逃げる

これでとりあえずララバイ編は終わった

ちなみに古毛^{エリゴール}四は蒼い天馬のギルド内に飾っているようだ

翌日

ギルドの前が随分と騒がしかった

なんだっけ・・・

そついやナツがエルザと戦う約束してたな

なんか賭けやってるし

俺はエルザに賭ける

まだナツよりエルザの方が強いだろうし

エルザは炎帝の鎧を換装している

そして

「始めい!!」

というマスターの合図で戦いが始まった

最初にナツが炎のパンチを放つ

エルザは軽々避け剣を振る

だがナツも避ける

そのまま蹴りを放つが紙一重で避けられた

エルザは再び剣を振るナツは逆立ちして避ける

だが手を蹴られ体制を崩す

それでも負けじと体制を崩したまま炎を吐く

だがエルザにはあたらない

炎がこつちへ飛んできたので凍る火柱で防ぐ

「うわー凄いね」

と呟いていると変な蛙が割り込んできた

「全員その場を動くな！私は評議員の使者である」

うわー・・・気持ち悪い蛙

一瞬、藻哀にしてやろうかと思ったがやめておく

「先日の鉄の森テロ事件において、器物損壊罪ほか11件の罪の容疑で・・・エルザスカーレットを逮捕する」

ギルドの中は暗い風陰気に包まれていた

その中で小さいトカゲになったナツが出せと暴れている

ルーシィが証言をしにいくと言い出した

それをマスターが止める

ナツはまだ騒いでいる

すると

「本当に出してもよいのか？」

「あ、おとなしくなった」

つい口に出してしまった

「かつ！」

とマスターが魔法を放つ

すると中から出てきたのは

マカオだった

「「ええええええええええ」」

どうやらナツに見せかけるためにトカゲに変身したらしい

「じゃあ本物のナツは！？」

「まさかエルザを追って・・・」

「ああそれなら・・・」

俺は自分の座っていたイスに水をかける

すると

イスがナツになった

「うわっ!!」

「ナツ!？」

「オイイイ!!俺がせつかくトカゲになってやったのに何捕まってんだアアアアアアアア!!」

「やるのう、リョウ」

ちなみに生き字引の筆使いました

「これ以外と使えるな」

俺は生き字引の筆を出す

「デメエ!!なんでジャマしたんだ!!」

ナツが俺に掴みかかってくる

「どうせ今日中に帰ってくるさ・・・でしょ?マスター」

「うむ」

「むしろお前が暴れたら余計に帰りが遅くなるっての」

「『『『『『『『？』『』『』『』『』」

マスターと俺以外の全員が頭に？マークを浮かべる

んでなんやかんやで夕方には帰ってきた

「結局『形式だけの逮捕』だったなんてね・・・心配して損した」
ルーシーがぐったりしながら呟く

「というかお前は最初から分かってたのか？」

「いやそもそも罰せられる理由が無いしな」

それで評議院の使いの考えてる事を受信感度で読み取ってみたところ

「形式だけの逮捕だったと」

「そゆこと」

「というか心を読む魔法まで使えるのね・・・」

「いやこれって意外とめんどくさいぞ？ちよつと加減間違えると頭の中が他人の思考でゴツチャゴツチャになるから」

加減が大事

ついでに魔法じゃない

とかやってるとナツが勝負の事を思い出したようでエルザに殴りかかる

ハンマーで秒殺

ギルドの奴らが爆笑する

すると突然静かになる

受信感度をオンにすると

なぜだか周りから眠いという思考が伝わってくる

（ミストガンか・・・）

どうやら予想通りのようで

ばたばたと人が眠ってゆく

「リヨウは寝ないのじゃな」

「頭の体温を調節して眠気を飛ばしてる」

凍る火柱の応用

「誰アレ」

「ミストガンじゃ、お前は初対面じゃったの」

「リヨウ・アオサキだヨロシク」

とりあえず依頼書をわたしに来たミストガンに適当に挨拶

「平行世界^{エドラス}からやってきたジェラールねえ・・・」

俺は誰にも聞こえないように呟く

だがミストガンには聞こえたようで

「貴様・・・ッ！」

やべ・・・怒らせた？

「・・・ッ！・・・行ってくる・・・」

どうやら落ち着いたのかそのまま仕事に行った

「これ！眠りの魔法を解かんか！！」

マスターが怒鳴る

伍・・・四・・・参・・・弐・・・壹

とミストガンが数える

そしてナツ以外が起きる

「この感じはミストガンか!？」

「あんにやるお!!」

「相変わらずすげえ強力な眠りの魔法だ!!!」

ギルド内がざわめく

「ミストガン？」

ルーシーは知らない

「妖精の尻尾最強の男候補の一人だよ」

ロキが説明する

そしてルーシーの姿を捉えるとそのまま後ずさる

「どういうわけか誰にも姿を見られたくないらしくて仕事を取るときはいつもこうやって全員を眠らせちゃうのさ」

グレイが説明

「なにそれ!?!怪しすぎ」

「だからマスター以外誰もミストガンの顔をしらねえんだ」

とグレイが言うと

「いんや・・・オレは知ってっぞ」

とラクサスが乱入

またギルド内がざわめく

「それとそこの新入りもな」

といって俺を指差す

「「「ええ!?」「」」」

またしてもギルドが（ry

もう一人の最強候補のラクサスが言うにはミストガンはシャイなんだそうだ

シャイ・・・とは少し違うような

「ラクサス!!!オレと勝負しろ!!!」

ナツがラクサスに喧嘩を売る

「エルザごときに勝てねえようじゃオレには勝てねえよ」

とラクサスが言うとエルザが黒いオーラを出す

ナツがラクサスのほうへ行こうとする

がマスターに止められる

「さっきマスターが言ってた2階には上がっちゃいけないってどういう意味？」

俺はルーシィの隣でミラさんに聞く

「リヨウなら結構早く上に行けるかもね」

「どーいう意味？」

知ってるが聞く

やっぱここは知らないフリ

「2階の依頼版にはS級のクエストの依頼書が貼ってあるの」

「いやすぐにいけるとは思えないんですけど・・・」

「さっきラクサスが言った事が本当ならミストガンの眠りの魔法が

効かなかったってことでしょ？十分上にいく資格はあると思うけど」
どーだろ

「S級の仕事はマスターに認められた魔道士しか受けられないの」
資格がるのはエルザ、ラクサス、ミストガンを含めてもまだ5人しか居ないそうだ

「って聞いている？」

俺はいつの間にやらルーシイの愛玩精霊ブルーを触っていた

「聞いている聞いている」

「聞いている態度には見えないんだけど・・・」

呆れられた

「ちゃんと聞いてますよ」

ちなみに俺は基本マスターとミラさんには敬語だ

マスターはまあともかくとして

なぜかミラさんってタメ口が聞き辛い雰囲気を持っているような

「分かる分かる」

ルーシイに賛同された

「えー？そんな雰囲気なんて持ってないよー」

ミラさんキャラ変わった？

なんかガールズトークみたいになりそうだったので先に退散

今は女とはいえ精神的にはまだ男なので辛い

最近女子の裸とか見てもなにも感じなくなってきたけども・・・

ハア・・・

なんか軽く死にたくなってきた

とりあえず帰って寝よう

ララバイやらS級やらいろいろ（後書き）

なんか一気に進んだな

次回はガルナ島です

と言いたいが主人公最初のほうは置いてけぼり喰らいます

エルザに知られざる英雄使っについて行ってみよう見たいなノリで行きます

それじゃまた次回

置いてかれた・・・（前書き）

主人公はガルナ島編には中盤あたりから（エルザが来たあたり）介入します

なぜかって

ナツやハッピー、グレイとの接点が薄いから

ルーシィは新人同士で女子同士ってことで結構話すけども

まあS級に誘われるかどうかは別である

なので参戦するのは3人を撃退したあとになるわけで

ぶっちゃけ介入させないなんていう案もあったんですけどねww

それじゃどーぞ

置いてかれた・・・

置いてかれた・・・

ガルナ島どうやって介入するか

俺は今、ギルドの酒場で昼食をとりながらガルナ島にどう介入するか悩んでいる

「はあゝ・・・」

「どうした？真昼間からため息ついて」

ちなみにまだグレイは居る

「つかナツたち居ねえなあ・・・」

グレイが不思議がつている

「お前らなんだかんだでなかいいのな」

俺がそういつとグレイが慌てて否定する

俺はそれを聞き流しながらニヤニヤ笑う

ナツたちが勝手にガルナ島に行ったということはまだ知られていない

「マスター!!!2階の依頼書が一枚なくなってます!!!」

おお・・・噂をすれば・・・

ギルド内がざわつく

するとラクサスが羽の生えた猫が持つていったという報告

今更過ぎる

ミラさんとラクサスが口げんか(?)を始める

消えた紙はガルナ島

原作どおり

「悪魔の島か!!!!」

マスターが叫ぶ

またギルド内がざわつく

マスターはラクサスに連れ戻すように言うがラクサスはあざ笑うように答える

「お前以外に誰がナツを連れ戻せる!!」

とマスターが叫ぶ

ハイ墓穴

「jeeさん・・・そりゃあ聞き捨てならねえなア・・・」

グレイがムキになった

んで

「結局連れ戻せなかったじゃん・・・」

俺は一人呟く

ちなみにすでに一晩明けた

結局エルザが行くらしい

「俺も行っていい？」

「駄目だ」

「一人でも多いほうがくだと思っけど？」

「・・・」

「いーじゃん別に。まあ駄目なら勝手についていくけども」

「・・・好きにしろ」

「よっしゃ」

許可もらえた

「ただし船は自分で調達しろ

「はいはい」

「返事は一回！」

やべ・・・なんか今日のエルザ怖い・・・

「ハイ」

と言う訳で知られざる英雄発動！

「!？」

エルザが驚く

そりゃあつい今までそこに居た人間が見えなくなれば驚くわな

それに気配もないし

「オイリヨウ、どこに行った」

「ここに居る」

とりあえず声だけ

「どこだ」

「ここだ」

俺は姿を現す

「なんだっ たんだ今のは」

「ちなみにギルドから出て数分もすれば存在も忘れてたでしょうよ」

「なんなんだお前は・・・」

「それエリゴールにも聞かれた」

「・・・」

エルザが嫌そうな顔をする

アホアホトークはここまでにしてエルザはガルナ島へ向かう

俺もついていく

ハルジオン

エルザは海賊船を乗っ取った

「うわー・・・」

まさか海賊船を奪うなんて思いもよらなかった

「原作でもあったけどエルザマジでこええ・・・」

俺は翼^{エーラ}でエルザの海賊船を追う

姿が見られないよう知られざる英雄を使いながら

でガルナ島

丁度ルーシィがエルザに縛られ 그레이が剣を突きつけられてるところだった

なんつーところで出くわしたんだ俺・・・

運がない・・・

「おいっすエルザ」

「リヨウ!？」

グレイが驚く

「そっいえば居たな・・・というかどうかやってきたんだ？」

「飛んできた」

「・・・お前なら出来そうだ」

「というか一体どこから・・・」

「あい」

誰が誰だかは口調で判断してください

誰と思ってくれても結構です

「なんだ今の地の文」

俺は突っ込む

ちなみにエルザvsグレイの喧嘩は終わっている

グレイは丁度出て行こうとするとこだった

だが俺が出たせいでタイミングを失ったらしい

エルザがルーシイの縄を切る

「行くぞ・・・これでは話にならん。まずは仕事を片付けてからだ」

その言葉にルーシーがうれしそうな顔をする

「罰は受けてもらっからな」

「俺は一応許可取ってるからないよな」

俺は恐る恐る聞く

「貴様もS級ではないだろう？ルール違反」

ちゃんと罰は受けてもらっ

そういつてグレイを追っ

既にグレイは遺跡に向かっていた

原作どおりなら罰は受けない原作どおりなら罰は受けない

俺はそう心に言い聞かせながらエルザたちを追った

遺跡にたどり着くと遺跡が斜めに傾いていた

「ナツだな」

「ああ、ナツだ」

俺の言葉に 그레이가賛同する

すると茂みから変な奴らが大量に出てきた

「見つけたぞ妖精の尻尾」

変な奴の一人がそういった

「行け、ここは私たちに任せろ」

「俺も？」

「当然」

しゃーない

「お前ら、探してたんなら死ぬ覚悟くらい出来てるよな」

俺は 그레이が行ったのを見送った後、変な奴らにそう言い放つ

「行け！！」

「オオオオオオオオオオ」

変な奴らが変な奴の一人の号令で一斉に襲い掛かる

「そうか・・・死にたいか」

俺は致死武器をオンにする

すると向かってきた奴らの体から一斉に血が噴き出す

「「「ぎゃああああああああああ「「「「

そのまま変な奴らは倒れた

「早っ!!」

ルーシーが突っ込む

「一分どころか十秒持たなかったな」

「意味分からんぞ」

今度はエルザに突っ込まれた

「コイツらどうする?」

「放っておけ。多分大丈夫だろう」

「そりゃ手加減したからな」

開いた古傷は全体の20%にも満たないだろう

それでもココまで血まみれになるんだな

生きている限りこの能力でダメージを負わないものは居ないだろう
蚊に刺されて痒いところを数回掻いた程度の傷とも呼べない傷でも
数十年積み重ねれば致命傷

それが動脈付近（手首、首）ならば尚更だ

「じゃあな」

俺は変な奴らにそういい残し、遺跡へ向かった

遺跡へ着くと同時にデリオラの咆哮が聞こえた

アレ？おかしいな・・・原作より数分以上早く終わらせたのに

そこでルーシィ、エルザ、ハッピーは月の雲の儀式場へ向かう
ムーン・ドロップ

俺はデリオラの所へ向かった

「いざとなったらまあ闘うか」

どうせ何も起こらんだろうけど俺のせいで若干原作が変わってデリオラが生きてたなんてことがあったらマズイ

実際さつき明らかに変わっていた

わずか数秒で足止めを排除したのにも関わらずデリオラの咆哮が聞こえたのは原作どおり

「つたく・・・面倒くせえ・・・」

俺は翼^{エーラ}でデリオラの所へ急ぐ

そこではナツと・・・えーと・・・なんだっけ

正体は知ってたんだけど

まあいいや

ナツとウルティアが闘っていた

ウルティアは時のアークで玉を操りナツを攻撃していた

「おいっすナツ」

「なっ!!!リヨウ!?なんでここに・・・グア!!!」

タイミング悪かったか

ナツにウルティアの操作する玉が当たる

「お仲間ですか？」

「妖精の尻尾の新人のリヨウだ」

「新人？ほほう、つまり新人のくせにS級クエストに参加している
と」

俺は無視して話す

「正体現したらどうだ？」

「・・・いつからですかの？」

「最初っから。しらばっくれるなら無理やり変身解いてもいいんだ
けど？」

「ほっほっほ！面白いことをおっしゃる」

「さっさと変身魔法を解け。ウルティア」

「まさか小娘ごときに正体まで突き止められるとわね」

オッサンが女性に変わった

「まあいいわ・・・とりあえず死んでもらおうかしら」

いきなり玉をこっちへ向かわせる

「俺は死なねえよ。不死身だもん」

実際冗談とかそういうのではない

本当に不死身である

大嘘憑き最強！

俺は飛んできた玉を掴む

「こつすりゃ動かせないか？」

「どうかしら」

「おお？」

突然玉が俺を引っ張りながら飛ぶ

「おおー」

俺はノリノリで飛んでいる玉を掴んだまま動く

「せい！！」

そして玉を壊した

「壊しても意味ないわ」

ウルティアが玉を再生させようとするが

「アレ？」

「どーした？玉が元に戻せないか？」

「な・・・なんで・・・！」

「お前と同じ時のアークを使ってるだけさ。お前より強い力だな」

「なら力を上げるまで！！・・・なんで！？？」

ウルティアは出力を上げるが俺も上げる

「意味無いさ。俺はお前が時のアークを十分に使いこなせるなら俺は十全に使いこなせる」

「そんなことが出来るわけ・・・！？？」

俺は一瞬でウルティアの前に行く

生前の俺なら多分殴れなかっただろう

何せ男だったし、高校生だったし

だが

今なら殴れる

なぜなら女だし、14ぐらいだし

「子供のパンチで気絶してろよ」

俺はウルティアの顔面を思いっきり殴る

ウルティアはそのまま何処かへ飛んでいった

「終わった」

「スゲエなあお前、後で勝負しろ！」

お前は戦闘^{バトル}ジャンキーか・・・

「別にいいけどさ、その前に・・・」

見るとデリオラが咆哮を上げる

原作どおりなら死んでるんだろうけど

同時にグレイがやってくる

ついでにぼろぼろのリオンもやってきた

「リオン！！！」

「おまえ・・・らには・・・無理だ・・・ウルを超える為に・・・俺が・・・」

お前の方が無理だ

「お前はなんでそんなに落ち着いて居られるんだ」

「だから顔に出ないだけだつて。多分前にも一度言つたと思つ」

「覚えてねえよそんなん」

まあ作者もいつ言つたかまでは覚えてないし

その後デリオラに挑もうとするリオンを気絶させて 그레이が止める

「もういいよりオン・・・デリオラは俺が封じる」

そういつて 그레이は絶対氷結を発動させようとする

だがナツが止める

そしてデリオラが腕を振り上げ殴りかかってきた

やっぱり原作変わつとるし・・・

なんで俺の勘はやなとこで当たるかね

「しゃーない」

俺は向かってくるデリオラの拳を受け止める

片手で

「んなあ!!」

그레이が声を上げて驚く

そのままもう片方の手でデリオラの腕を殴る

デリオラの片方の腕が砕けた

そのままデリオラは崩れ去った

どうやらさっきのは最後の最後の力を振り絞った一撃だったようだ

그레이が脱力する

俺は 그레이に言う

「デリオラはもうほとんど死んでたんだ」

「え？」

「さっきの一撃もほんのわずかに残っていた力を出したんだろうな。多分、氷に閉じ込められている間に生命力をどんどん削られていったんだろう」

そう言うのと納得したようで

그레이はウルに感謝し、リオンはウルに対しかないと悟る

しばらくその様子を見ていると突然頭に声が響く

『やほー、元気？』

この声・・・あの馬鹿神か・・・

（大事なシーンをジャマするな）

『おお、よくいきなり念話が使えるね』

（大抵は頭の中で考えるだけだ）

『それもそうか』

（最後の一撃・・・やっぱ原作が少し変わったか？）

『大抵二人以上の転生者を送った場合は狂うよ？』

（ふーん・・・ってちよつとまで、二人？）

『うん、まあ彼は原作介入の意思は無いけど』

（ナルホド・・・お前今までなんか居眠りした？）

神は答えない

つかどっか消えた

あんにやろう

『まああの時何もしなかったらいつか体力を回復させて来ただろうけどね』

消えたと思ったら最後にこんな一言を言ってまた消えた

あれ？

気付いたら誰も居ない

置いて行かれた・・・

またか・・・いい加減泣くぞ

置いてかれた・・・（後書き）

結局最初と最後に置いて行かれた主人公でした

なんか他の転生者登場フラグ？

次回でガルナ島完結（早ッ！！）

わずか2話

しかも多分次回の前半のみでしょう

さっさとファントムに入りたかったんで

まあ入りたいんだけど・・・

すみませんしばらく更新できません

マウスやらなにやらをつなげるUSBの部分故障しまして

とりあえずパソコンはできますがマウスがないと作者はマウス以外
慣れてないので使いづらいんです

と言う訳で今度修理に出してきます

なのでしばらく休みます

ホントすみません

禁書の小説のほうもしばらく更新できません

すみません

修理に出すのは土曜なのでそれまでに1〜2話更新しようと思います

それじゃまた次回

悪魔の宴（前書き）

とりあえずあと2話ぐらい更新したら多分1〜2週間は休みます

やっぱUSBが使えないのは痛い

そんなわけでどうぞ

悪魔の宴

俺は今、村へ向かっている

「見えてきた」

そこには村の門があつた

とりあえず入る

そして

落とし穴にそのまま落ちた

イテエ・・・

「落とし穴まで復活してたのか」

「大丈夫かりヨウ」

外からハッピーとエルザの声が聞こえる

とりあえず上る

「よくココに着けたな」

俺はそう聞いて来たグレイの顔を問答無用で殴る

「げぼあ!!」

グレイは短い悲鳴を上げそのまま数メートル飛び3回バウンドして止まった

「何すんだ!!」

すぐに復活

「置いていったお前らが悪い」

「だからって容赦なく殴るか? フツー・・・」

「村の場所探すの結構大変だったんだぞコノヤロー」

「どうやって見つけたんだ?」

「空から」

翼で飛んで探しましたぜ

「まあいいや・・・」

俺はとりあえずエルザたちの方へ行く

「エルザ、村人元に戻ってないけど、どうすんの?」

周りが光りとても幻想的だった

そして村人の姿は元に

戻らなかった

「けど・・・元に戻らねえのか・・・？」

「そんな・・・」

グレイとハッピーが悲しそうに呟く

だがエルザは言う

邪気の膜が犯していたのは姿ではなく記憶

つまり

この島の人間は・・・いやこの表現は間違えてるか

この島の住民は

元々悪魔だった

ナツが驚愕しルーシイが悲鳴を上げる

グレイは驚きを隠せず村人の一人に確認

肯定の言葉が来た

ちなみにこの記憶障害は人間には効果が無いようだ

随分なご都合主義だな・・・

まあこの小説もご都合主義だらけ・・・おっと

こういう話をするのはよくないな

すると背後から声が聞こえた

村長の息子、ボボだ

生きてたようだ

「ボボーーーーー!!!!!!」

村長が嬉し涙を浮かべながらボボに抱きついていく

「やっと正気に戻ったか親父」

村長もボボもうれしそうだ

他の悪魔たちも空へ飛んでいく

「みんなの顔見てつと、悪魔つてより天使みてーだな」

ナツが悪魔たちの楽しそうな顔を見てそう言った

「今夜は宴じゃーーーー!!!悪魔の宴じゃーーーー!!!!!!」

凄い響きだなそれ・・・

そして俺たちは一晩飲んで食って大騒ぎした
で

「勝負だ！リヨウーーーー！！」

なんかナツが勝負を挑んできた

「今から！？」

俺は突っ込む

ツツコミ役はルーシイじゃなかったのか！？

「いつ決めたのよそんなの！！」

ルーシイが突っ込む

「突っ込んでんじゃん」

「う・・・！」

俺とルーシイでアホコント

「いいから俺と勝負しろー！！」

ナツはまだ言ってる

すると

「いいゾー！」

「やれやれー！！」

「ヒュー」

村人・・・いや悪魔があおる

村の方々もノリノリなので

「じゃあどつか広い場所探して・・・」

「こっちに丁度いい場所あるぞー！！」

村の悪魔が指をさす

そこには広い空間があつた

「広いな」

「闘うんなら丁度いいだろ」

というわけで

ナツvs俺

なんてことになってしまった

で

「行くぞ!!」

ナツが叫び向かってくる

「火竜の鉄拳!!」

容赦なく顔面狙ってきやがった

俺は顔をそらし避ける

そしてカウンターで腹にパンチを入れた

「ぐあ!!」

そのまま3mほど飛ぶがすぐに体制を立て直す

「火竜の咆哮!!」

ナツが火を噴いた

俺は凍る火柱で炎を凍らせる

うわー凄い威力

「なにい!?!」

「炎を凍らせやがった!?!」

外野が騒ぐ

俺はナツに向かって手から炎を放つ

あ・・・しまった

ナツは炎を食って体力を回復してしまった

「そっぴや食うんだっけ」

「忘れてたのかよ!?!」

ナツに突っ込まれた

お前のポジションはボケじゃなかったのか!?!?

とりあえず一言言っ

「跪け」

その瞬間ナツが地面にひれ伏した

そのまま俺は以前ミストガンが来たときに覚えた睡眠魔法を使いナツを眠らせる

ナツは土下座の体制でいびきを掻き始めた

「勝者！リヨウ！」

エルザが判定を下す

というかアンタが審判やってたのかよ！！

「くかーくかー」

ナツはのんきにいびきを掻いていた

翌日

ギルドで正式に受理された依頼ではないということで報酬は受け取らなかった

村の悪魔たちはせめて友人として何か贈り物をしたいというので追加報酬の鍵だけ貰って島を出た

結局得したのはルーシイだけだった

「帰ってきたぞー！！！」

そう・・・俺たちは帰ってきた

マグノリアに

だが

まだ戦いは続くぜ！！

「なに現実逃避しているんだお前は」

エルザに頭を叩かれた

「何すんだよ・・・」

痛かった

「罰を受けたくないからといって現実から逃げるのはよくないぞ」

「俺はちゃんと許可を取ったと思うんだが」

「勝手にしろとは言ったが来ていいとは言っていない」

「それって酷くない？」

「勝手にしろというのは勝手にルールを破れという意味で・・・」

「説明すんな」

「まあお前の罰はナツたちほど厳しくは無いだろうから大丈夫だ」

「そうなの？」

「ちょっとな」

「ちょっとかよ」

またアホアホトークが始まりそうだったので避難した

「まあナツたちにはアレは確定だろうな」

アレってなんだ

「いやだああああアレだけは嫌だアアアアアアアア」

ナツが突然取り乱す

グレイとハッピーは肩を落として落ち込む

負のオーラがかなり出ている

そしてギルドに向かって歩いてみるとギルドの周りに人が集まっているのが見えた

なんだ？

近づいてみると

妖精の尻尾にいくつもの鉄柱が突き刺さり、ギルドが大破していた

「俺たちのギルドが！！！！」

ナツが叫ぶ

「誰が・・・！！！」

「何があったというのだ・・・」

するとミラさんがどこからか現れ

「ファントム」

そう呟いた

「悔しいけど・・・やられちゃったの・・・」

とりあえずみんなには地下へ行ってもらい俺はギルドの修復

まずは鉄柱を引き抜く

「どうしようこれ・・・」

全て引き抜いた後その鉄をどうするかで迷っていた

「とりあえずしまつとこう」

武器のストック（魔法）に入れておく

ストックの限界はまだまだ先だ

そして壊れたギルドを大嘘憑きで直す

そして一度鉄を取り出し

熱で溶かし

螺子、剣、槌などの武器に加工してみた

「おお・・・」

結構うまく出来た

ちょっとテンションあがる

「とりあえず分けるか」

俺は地下にいるみんなを呼ぶ

「もう直ったのか・・・」

マスターが半ば呆れ気味で聞いて来た

「刺さってた鉄柱はどうしたんじゃ？」

「全部加工して武器にした」

「恐ろしい奴じゃ・・・」

ほめ言葉として受け取ろう

皆完全にあきれ果てている

「エルザ。何本か居る？」

「ふむ・・・見せてみる」

俺は作ったものを見せる

結構でかい鉄柱だったので山みたいな量の武器がそこにでた

「ほう・・・これを造ったのか」

大変だったぜ

まあ凍る火柱で体温を上げて剣の形に加工した後、体温を下げて冷却して焼きいれして

まあ大変だったぜ

「そんな暇あったならさっさと上に呼んでほしかったな」

ちなみにみんなが地下へ行つて約2時間経っていた

修理が終わったのは1時間45分前

抜くの5分

そのあと鉄柱をどうするかに10分迷い

3秒でギルドを直し鉄柱を武器に加工

「いやほとんど時間かかって無いじゃん・・・」

ルーシイがいつものツツ

まあいいじゃん

とりあえずもう遅いので解散

エルザは俺が造った武器から槌を4個、剣を8本、槍を7本持っていた

残った武器

約134本

どうしようこれ

俺は3時間ほどそこに立ち尽くしていた

他にも貰ってくれる人は数人居ただけだね

なにせ造った武器の本数が324本

そのうち100本を俺の武器のストックにして

ギルドの人に武器を扱う人も数人いたのでその人らに渡したのが42本

エルザに19本

残り29本は？って？

武器屋の人が持ってた鎧に俺が改造して魔力を大量に注ぎ込んでエルザにやったよ

他に武器使っちゃほとんど居ない

やっぱ魔法の世界か

134本もいらねえよ

ストックにした分も含めて234本

仕方ないので134本の内34本をくつつけて丸めてまた加工しなおしたりして鑑賞用の大剣を作った

途中芸術家の人に来て買ってた

残りなんかの銅像でも造っとくか

2時間後

すっかり朝日が昇り

出来た

妖精の銅像

シンボルマーク

「ほおよく出来とるのお」

声が聞こえたので振り向くとマスターが居た

「早いですねマスター」

「うむ。しかし本当に（ry」

なんかめっちゃほめられた

とりあえず玄関口に飾ることにした

ちなみに魔法でさびないようにした

前に鉄の森の集団の中にそんな感じの魔法使う奴いたし

それから俺はギルドの中で少し寝た

起きる頃には結構人が来ていた

すると突然誰かが何かを聞いて外に出て行く

それについていきたくさんの人が外へ出る

俺もついて行く

やってきたのはマグノリアの街、南口公園

なんで人が集まっているのかは一目で分かった

レビイ、ジェット、ドロイの3人が木にぼろぼろの姿ではりつけられていた

身体にはファントムのマーク

すぐにファントムの仕業だと分かった

遅れてマスターがやってくる

レビイたちの姿を見てショックを受ける

そして

「ボロ酒場までなら我慢できたんじゃないがな・・・ガキの血を見て黙ってる親はいねえんだよ・・・」

突然声色が怒りに染まる

「戦争じゃ」

自分の持っている杖をへし折りそう宣言した

悪魔の宴（後書き）

ようやくファントム入った

なんか峻は今回遊びまくってますね

→

てか久々に漢字で名前書いたな

まあそれは置いといて

明日、後1〜2話更新したら何日か更新停止します

たぶん1〜2週間ぐらいだと思います

それではまた次回

もし妹、父からPCが借りられたら更新できるかも

ファントム（前書き）

モンハンほしい〜

今回はファントム編です

多分4〜5話ぐらいで終わると思う

それじゃどーぞ

ファントム

俺たちはファントムのギルドの前に来ている

中から妖精の尻尾を馬鹿にするような発現がいくつか聞こえた

ナツが扉を破壊して中に入る

「妖精の尻尾じゃああつ！！！」

マスターが叫ぶ

「「「なつ！！」「」」

ファントムが驚愕する

その隙にナツが敵を攻撃した

「誰でもいい！！かかってこいやあ！！！！」

ナツがそう叫ぶとファントムが切れて襲い掛かってくる

俺のほうにも１０人ほど

「調子にのんなあ！！」

と敵さん切れてます

「そおい！！」

顔面に凍る火柱で摂氏1000の蹴りと絶対零度のパンチ

「ぎゃあああああああああああ」

「凍るウウウウウウ」

「焼けるウウウウウウウウウウ」

ユカイな悲鳴だ

ちなみに俺は現在裸足

てか靴溶けた

俺は懷から5mのメイスを取り出し振り回す

「「「ぎゃあああああああああああああああ」」」

ファントムの悲鳴が聞こえた

他のところでは 그레이が敵の顔面を凍らせたり

エルフマンが漢漢漢漢と叫びながら魔物の腕で敵を殴っている

マスターは随分お怒りのよう

化け物といってくる者を容赦なく素手で潰している

文字通り潰している

でっかくなっちゃった

「エルザ！！！！ココはお前たちにまかせる」

マスターがエルザに言う

「ジョゼは恐らく最上階！ワシが息の根を止めてくる」

そついうとマスターは上の階へ行った

すると上から人が降りてきたそいつは鉄にした腕で仲間ごと俺たちを攻撃

俺は難なく回避

「来いいクズども！！鉄の滅竜魔道士ガジル様が相手だ」

「自分を様づけしてんじゃねーよ」

なんかイラッと来たので顔面に蹴り

「ぐあ！！テメエ！どこから・・・」

「ここから」

なんやかんやで俺vsガジル

「顔面ピアスってセンス悪っ！」

そういつたら切れて攻撃してきた

俺は受け止めたり飛んで来た鉄柱（多分ギルドを壊したものと同じ）をラフレシアで腐らせる

「ほう・・・なかなかやる」

「これが本気とでも？」

ニヤニヤしながらそういつたら癪に障ったのか足から鉄柱を大量に生やして攻撃

それはファントムの連中も巻き込んだ

丁度いいんで無視

全ての鉄柱を砕く

「なに！！」

「爆発の剣」

おなじみテン・コマンドメンツ第2の剣

「なっ！ぐあ！」

そのまま爆発で吹き飛ばされた

「まだまだあ！！」

T C Mをしまいゲタを履く

すると空から雲が一つ

知つての通りアレだ

「天変地異！ゲタ占いの術！！」

よーするにタダのあーしたてんきになあれ

ゲタには雷と出た

するとその雷はガジルとその周辺にいたファントムメンバーに直撃

「ぎゃあああああああああ」

「ぐあああああああ」

この悲鳴はガジルじゃないよ？

ガジルは多少ダメージは負っていたがまだ大丈夫そうだ

もう一回ゲタを投げる

今度は猛吹雪と書いてある

「寒いイイイイイイイイ」

次、雨

意味なし

次、日照

数人が熱中症で倒れた

「地味なのしかでねえ・・・」

選べないのが欠点です

仕方ないのでしまう

「どこ見てんだ？」

いつの間にかガジルが目の前に来ていた

腕を鉄にして殴りかかってくる

反射的に避ける

高千穂の異常の使いどころはこういうところ

カウンターを入れる

だがガジルは腹を鉄にしていた

なので凍る火柱で手の体温を鉄が溶けるほどの温度まで上げる

ガジルは危険を感じ取り避ける

だがわき腹にわずかに掠った

「アツツ!!」

火傷しただけだった

だがさすが鉄の溶ける温度

火傷はさせられた

「クソが・・・」

ガジルがこつちを睨む

するとギルド内が突然大きく揺れた

マスターか

この揺れで周りのテンションがあがる

だがそれも一瞬だった

上から何かが落ちてきた

それはマスターだった

「マスター!!!!」

どうやら魔力を奪われたようだ

これじゃただのじーさんだ

今の内にとファントムがこっちへ攻めてくる

エルザは撤退を命じた

そして俺たちはマスターを抱え撤退することになった

全員が出て行く

せめてこの建物だけでも壊してみるか

そう思ったので知られざる英雄で姿を隠しながら柱を砕く

調整して5分後に崩れるようにして逃げた

ナツはルーシイの奪還に向かったようだ

ファントム（後書き）

一旦ここで終わります

また次回

今更主人公紹介（前書き）

タイトル通りです

修理？

平日じゃないと店が開いてないのでいけませんでした（ちなみに使ってるPCはEPSONのやつです）

冬休みになったら直せるのでそれまでマウス無しで頑張ろうと思いました

と言う訳で12月下旬までは更新できそうです

それじゃどーぞ

今更主人公紹介

主人公紹介

名前：青崎峻

年齢：大体14

性別：女（前世：男）

身長：152

体重：42

髪の色：黒

目の色：黒

能力：完成^{ジエンド}とその他の異常^{アフノーマル}、それから暗鬼使いを使う為にいろんな漫画の武器

主に使う武器：メイス（5m）、アスカロン（3m）、生き字引の筆、能天気雲（武器じゃない？細かい事は気にしない）、曲弦系^{ラクリマ}、魔水晶入りスーパーボール、なんかヤバそうな薬品の入った注射器

説明

武器と言ってもいいのかどうか分からない武器を大量に持っている
多少扱いが難しい武器でも完成があるので数分の練習で十分に使い
こなす

スーパーボールには中心部に魔水晶が入っており任意で爆発したり
凍ったりする

基本フエイントに使う

異常より貰った武器の方がチートな気がするが気にしないようにし
ようと思ってる

エルザの魔法『騎士^{ザナイト}』を覚えたので暗鬼使いはあまり使わない

ノリのいい性格

芸術センスがありガジルが妖精の尻尾を破壊するときに残していっ
た鉄の塊を溶かして鑑賞用武器や妖精を模した銅像を作った

未だに100kgほど鉄塊が残っている

鑑賞武器はどっかの芸術家に買われた

普通の武器も作った

使い切れないので何人かにあげた

鉄の森以降使える魔法がかなり増えたらしい

最近の悩みは女体化が進んでいること（精神的な意味で）

それと異常と過負荷の影が薄くなってきた事

ついでに言う武器もほとんど使っておらず格闘が主になって来ているので少し他の能力も使わないとなーとか思っている

最近不老不死になった（安心院のスキルのせい）

今更主人公紹介（後書き）

大体こんな感じ

ジュピター（前書き）

やっぱ能天気雲は武器に入らないかなー

そんな不安を抱えております

そのうち編集しようか

それじゃ本編どーぞ

ジュピター

ファントムから撤退してきた俺たちは今、けが人の治療を行っている

マスターはポーリュシカとかいう人の居る所に行っている

無くなった魔力を回復させるためらしい

マスターが居ないせいか周りの雰囲気は暗い

さっきまでさらわれていたルーシィはナツが取り戻してきた

なんだか随分と落ち込んでいるようで

今日の妖精の尻尾の雰囲気は最悪だった

少し離れたところでは通信用魔水晶でミラさんがラクサスと連絡を取っている

ラクサスは興味ないらしく口汚い言葉でミラさんを罵りながら断る

ミラさんは悔しいのか涙を流す

んで俺は

やる事も無いので座りながらギルドを見回していた

本当にやる事ないんだよねコレが

ルーシィはグレイやナツのおかげで少しは元気になったみたいだし
とりあえずジユピターに備えて盾を選ぶ

いやーやつぱエルザが戦線離脱するのは痛いかなーと

てか最早、^{アブノーマル}異常よりも暗鬼を使うために貰った武器の方がチート性
高い気がしてきたよ

『ソレは私のミスです。ハイ』

いきなり話しかけてくんな

『まあまあ・・・とりあえずカーテナとかその辺のとんでもないの
は入れなかったんだからいいじゃん』

能天気雲が武器なのかどうか検討させてもらいたい

『確かに言われて見れば』

（アレと比べればカーテナのほうがまだ武器らしいし）

『そこは私のミスですハイ』

（なんかジユピターを相殺出来る盾とか鎧とか無い？）

『魔法使いながらアンタが無理やりかき消せばいいじゃん』

（死ぬわ）

『大嘘憑きあるから死なないよ。まあ一度私のところに来てから戻る仕組みになってるけど』

（安心院には会えないの？）

『そりゃその世界に安心院は居ないからね。代わりに私が出るわけ』

（じゃあたまってた恨み（？）をお前を殴って解消しようか）

『ええっ！？』

（冗談冗談）

『全然冗談に聞こえない』

神と念話で話していたら突然、大きな振動が伝わってくる

「な！何だ！？」

ギルド内が騒ぎ出す

「外だーーーーー！！」

やっぱファントムか

ギルドの人等が一斉に外へ様子を見に行く

エルザもいつの間にか

そこには六本の足を動かしてこちらへ向かっている巨大な建物があ

った

センス悪い

そいつは大きな音を立てて停止する

ギルドの全員の表情が驚愕と恐怖に染まる

「想定外だ・・・こんな方法で攻めて来るとは・・・」

「エルザ・・・服を着たほうがいいと思う」

俺はファントムを見て啞然としているエルザに突っ込む

「突っ込むところはソコなのか・・・」

他の奴に突っ込まれた

「いやタオル一枚で外に出るってのはどうかと思う」

せめてバスローブぐらいは着よう

タオル一枚ってのは色々まずい

そんな馬鹿なことを考えているとファントムのギルドから砲台が出てきた

魔道収束砲だ

「まずい！全員伏せろオオオオオ！！」

エルザが叫ぶ

そしてファントムのほうへ走り出した

換装しながら

「ギルドはやらせん!!」

纏ったのは金鋼の鎧

そしてジュピターが放たれた

そこで俺は解決策を思いつく

すぐさま実行

ジュピターはエルザに直撃する寸前に止まった

「は？」

「な・・・何が」

ギルドが騒ぎ出す

ファントムのほうはファントムのほうで随分騒がしいようで

いやー時のアークって便利だねえ・・・

俺は時のアークでジュピターの時を止めた

ジエンド
完成で完成させた分オリジナルより力は上なのでジューピターを止めるのは朝飯前だ

さてこの後どうするか・・・

「どうすればいいと思う？」

俺はエルザに聞く

戻したところでまた放たれるだけ

だからといって解除するわけにも行かない

「いや・・・私に聞かれても・・・」

エルザはかなり呆れているようで

原作ではココでジョゼが15分後に特大のジューピターを放つと言ってくるところなんだけど

あっちはあっちで言葉に出来ない状況らしい

もう何を言っているのやらって状況

もしかしてこのジューピターから放たれた弾丸(?) 操れんのかな

ためしにやってみた

出来ちゃった

・・・・・・・・・・・・・・・・え？

馬鹿なの？

ここは降参する場面じゃないのかね？

周りも呆れる

原作とは随分違う反応で

そりゃそうだ

ジユピターが通用しないのにそんな要求をしたところで意味はない

『渡さないか・・・ならば15分後にさっきよりでかい特大のジユピターを喰らわせてやる』

あっちもヤケクソか

声色に哀愁が若干漂っている

途端に敵のギルドから大量の兵が飛び出してきた

『シエイド
幽兵』

よし

覚えた

コレで俺も幽兵が使える

『地獄を見る妖精の尻尾・・・貴様等に残された選択肢は二つだけだ。我が兵に殺されるかジュピターで死ぬかだ』

「ありえねえ・・・仲間ごとやるきかよ」

「脅しさ・・・撃つはずねえ・・・撃たれてもリヨウがいるし・・・」

「いや・・・撃つよ。アレはジョゼの魔法『幽兵』、人間じゃない」

「なに!?!」

「おばけ!?!」

最後の奴

アホだろ

「リヨウの魔力も無限じゃない。ジュピターみたいな物を何度も撃たれては魔力が持たん」

そう言ったのはエルザ

「ジュピターを何とかしないとね」

そんなわけでファントムに乗り込むのはナツ、グレイ、エルフマン、エルザの4人

俺はまたジュピターが撃たれたときの為に留守番

ナツはハッピーと一緒に飛んで行ったので一番乗り

グレイ、エルフマン、エルザはナツがジュピターを破壊した後

ジュピターが壊れたので俺も行く事になった

ジュピター（後書き）

短くてすみません

最後のほうなんか投げやりですすみません

煉獄碎破（前書き）

とりあえず兎兎丸を倒した辺りからスタートします

煉獄碎破

ジュピターが壊れた

その後、突然ファントムが変形した

「おお・・・」

俺は今、幽兵撃退中

コイツら生き物じゃないから致死武器効かないんだよね

仕方ないんでアスカロンを左手、5mメイスを右手にもってぶん回しています

どんな腕力？とさつき突っ込まれた

巨人は魔方阵を描き始める

アヒスブレイク
煉獄碎破

発動されれば完成させられるんだけども

発動させるわけにもいかんしな

行くか

「ちよつと行ってくる」

「はあ!？」

これ→カナね

「多分あれエレメント4が動力源だよ。行くのは一人でも多いほうがいいし」

「アンタねえ・・・こっちも人手が要るんだけど」

「がんばれ」

親指をサムズアップして言い放った

「・・・」

(。□。) ↑こんな顔してた

「それじゃ」

「ちよつ!」

俺は翼^{エーラ}を展開

そのまま飛び立つ

「まったくあいつは・・・しゃーない、絶対止めてきなさい!」

そんな言葉が後ろから聞こえた

「あれ？ハッピー？」

「あ！なんでリヨウがいるの！？」

「あまりに幽兵相手は退屈だったんで」

本当はこっちが理由

ちなみにちゃっかりこっちも10体ぐらい幽兵出しておきました

あ・・・2体やられた

「といつかなんて翼^{エーラ}使えるの？」

「特技」

「理由になってないです」

とりあえず戻る

そっぴやこの魔法ってハッピーの一族だけが使える魔法だっけ

「大変だー！！ギルドが巨人になって魔法を唱えてるんだ！！」

ハッピーがナツとグレイに向かって叫ぶ

エルザもいた

「嘘つけ！！というかなんでリョウがいるんだ！？」

「なんとなく」

「馬鹿者オ！！」

エルザが殴りかかる

一回転して回避

「なにすんだよエルザ」

「幽兵はどうした！！」

「俺の幽兵置いてきた」

俺はさっきやられた分の幽兵を5体（増やした）出して言う

「なぜジョゼの魔法が使える・・・いや・・・言い方を変えよう」

エルザは問う

「なぜ他人の魔法が使える」

「ちょっとした特技」

完成って魔法じゃないし

どっちかって言うと体質とか技とか

特技とかの部類に入と思う

反射神経しかり受信感度しかり

ラフレッシュしかり殺人衝動しかり

大嘘憑きしかり知られざる英雄しかりe t e

全部魔法というよりも特技や体質って言うほうがあってる

「どんな特技だよ・・・」

グレイが呆れる

「俺の魔法も使えんのかー!？」

ナツが大声で聞く

「使えるんじゃない？」

凍る火柱があるからグレイとナツのはあまり使わないな

あつちは魔力を使うから疲れるんだよ

精度はあがるけど

「そんな出鱈目な・・・」

「というかナツには前に説明しなかったっけ？」

性格にはウルティアに

「覚えてねえ」

相変わらずしょぼい記憶力だ

つとこんな事してる場合じゃないな

「あの巨人の使おうとしてる魔法はカルディア大聖堂まで消える魔法だってさ」

文末メチャクチャ

「いきなり話題を変えるな・・・ってなんだと!？」

エルザが時間差で驚く

「街の半分じゃねーか・・・」

「んな魔法ありえねーだろ!!」

全員が顔を見合わせ・・・

「止めるぞー!!」

「手分けしてこの動くギルドの動力源を探すんだ」

「動力源はエレメント4らしいよ」

「よし!探すぞー!」

なんで知ってるのかとかは誰も突っ込まない

皆混乱しているようだ

さて、俺も行きますか

で

「迷った・・・」

見事に道に迷った

とりあえずフラフラ

迷子になったときはその場を動かない方がいいらしいが今回の目的はエレメント4の撃退

動かないと意味が無い

でも

「また同じところかよ・・・」

コレじゃ探すどころじゃない

合流も出来ないしなー

「悲しい」

突然風が吹き声が聞こえた

アリアか・・・

なんか言ってるが無視

「我が名はアリア・・・エレメント4の頂点なり 妖精狩りに推参

しボベア!!」

最後まで言う前にRPG-7を顔面めがけて射撃

「個人的にその喋り方がムカつくんで喋らないでください。というか酸素がもつたいないんで呼吸もするな」

我ながら酷い事いったと思う

アリアが喋る前に連射

「ちょ、ま、アボオ!ベ、tぬjがえ・iくあwse d r f t g yふじこ1p!!」

カチッ!カチッ!

弾切れのようだ

煙が消える

そこには誰もいなかった

「アレ?もしかして跡形も無く吹き飛ばしちゃったとかじゃないよな・・・」

少し不安になった

その瞬間背後に悪寒を感じた

だがもう遅い

「空域『滅』」

俺の魔力は空になった

「終りだ妖精」

俺はそのまま地面に膝を着き

手を着き

そのまま足を上げ

アリアの顎に蹴りを入れ

「そおい!!」

その回転の勢いで俺は懷から螺子を取り出しアリアに投げる

「ぐぬう!!」

さらにこいつのでかい腹に手をふれラフレシアを発動

「くっ! 空域『絶』!!」

服一枚まで腐らせたとこで攻撃があたり吹き飛ばされる

「ちい!」

「なぜ魔力無しで魔法が使える! 私の空域『滅』は完全に成功した

筈！」

「確かに『魔法』は使えないわ。こりゃ困った。あつちに置いた幽兵も消えちゃったろうしな。・・・困った困った」

俺は全然困ってない風に言う

「魔法は使えないけど異常は使えんだよ」

そう言つて凍る火柱で氷の槍を形成

アリアに向かって突く

アリアは間一髪で避けた

「クッ！」

そしてそのまま一気に距離をとった

「中々やりますね・・・ならば私も本気を出さねばなりません」

アリアが目隠しを取った

「死の空域、零、発動。この空域は全ての命をぶあ@v；f」

全部言う前に顔面、胸、腹、肩、その他もろもろの部位に計10本の螺子を突き刺す

グシャと血を撒き散らしながらアリアは倒れた

「さすがに跡形も無くなっちゃうと元に戻せないかもしれないからさあ。あの時お前が生きてて本当によかったと思うよ?」

ちなみにあの時と言うのはRPG-7を乱射したときのことである

「『同じ人間同士なんだからもつと仲良くしたかったな・・・』」

球磨川風に言ってみる

「やべ・・・本気で言ったつもり無いのに吐き気が・・・」

自分の台詞で気持ち悪くなった

球磨川はよくもまああんな臭い台詞を平然と言えるもんだ

嘘っぽく

「さて、とりあえず直したほうがいいんかね」

『ナオ』すの字が違うような気がしたが気にしない

大嘘憑きである程度まで治した

上半身だけ（腕を除く）

下半身はズタズタでもう動かないだろう

まだ全員倒したわけでは無い様で

巨人はまだ動いている

「とはいえずぐに崩れるだろーな」

その途端巨人が崩れる

どうやら全員倒したようだ

するとエルザがやってきた

「まさか・・・倒したのか？」

恐る恐る聞かれた

そんなに驚くことが

まあエレメント4最強とか言ってたし

そいつ相手に無傷つてのはそりゃ驚くか

俺は平然と答える

「『うん』」

球磨川つぼく

なんか気に入ったわw

その後ナツがやってきた

「そいつエルザが倒したのか？」

ナツが聞いてくる

「いや、こいつは・・・」

「そうだよ?」

俺はエルザが倒した事にする

新人が無傷で倒したなんて信じてくれそうにもないし

いや他人の魔法コピーってのも信じるとは思えんのだが

信じたけども

「お前・・・」

エルザがこっちを見る

「いいじゃん別に」

俺は平然と答える

その途端ジョゼの声が放送で流れる

ぶっっちゃけイライラする声だ

『妖精の尻尾の皆さん。我々はルーシィを捕獲しました』

マジか・・・

「うそ・・・」

『一つ目の目的は達成されたのです』

ジヨゼが言った後殴ったような音と共にルーシイの悲鳴が聞こえた

『我々に残された目的はあと一つ・・・貴様らの皆殺しだ。クソガキども』

「あいつら・・・」

ナツが怒る

「ナツ、ちょっとルーシイ救出してきて」

俺はナツに言う

おつかい行つて来て見たいなノリで

「は？」

ナツは何を言ったのか分からないみたいな顔をしている

「どーせジヨゼかガシルのどっちかはこっちに来るさ」

「なんで俺？」

「やっぱ主人公だし？」

「いや意味わかんねえぞ・・・まあいいや、分かった」

そう言ったあと叫びながらルーシィの救出に行った

さて

「ジョゼ殴りに行こう」

京都行こう見たいなノリで

「エルザー！！リヨウー！！」

グレイとエルフマン、あとなぜかミラさんが走ってきた

「こいつはエルザが倒したのか？」

「そ・・・」

俺が答えようとしたら

「いやリヨウだ」

エルザが先に答えた

「凄いじゃないリヨウ！」

ミラさんは真っ先にそう言った

ちなみに他二人は呆れている

そりゃそうか

エレメント4と戦って無傷は普通ありえない
するとなぜか突然寒気がした

他の4人も同じ感じた

「いやいや見事でしたよ皆さん」

拍手の音と共に顎^{シヨゼ}がやってきた

ハッ！今、何か変な当て字をしたような

「まさかここまで楽しませてくれるとは正直思っていませんでした
よ」

「さっきの寒気は加齢臭？」

アホ力全開で俺は言う

「こんなときにふざけている場合か・・・」

シリアスな雰囲気壊されたといいたいような目線がこっちへ突き
刺さる

ジヨゼは額に青筋を浮かべている

今にもプツンとかいうユカイな音を聞かせてくれそうだ

「さあて・・・楽しませていただいたお礼をおタアツプリしません
となあ・・・」

声に怒りが混じりまくっている

「そんなに気に障ったか顎^{ジョゼ}」

つい言っちゃった

ぶつちんというユカイな音が聞こえた

ジョゼが雷のようなものを3つ放つ

グレイ、エルフマンに直撃した

俺のほうにも飛んできたが普通に避ける

反射神経の前にそんなものは通用せんわ！

「エルフマン！グレイ！」

ミラさんが叫ぶ

ジョゼは二人に追い討ちをかけるように手を横なぎに振るう

衝撃波で床が砕け二人は吹き飛ばされた

「まさか避けられるとはね・・・貴様か？ジュピターを防いだのは」

「うつさいハゲ。その顎砕いて整形するぞ。あ、ごめん、そんなこ

としたら二枚目になっちゃわないね!」

けなしまくる

反応が面白いんだもの

ジョゼの頭からプチっと言う音と共に血が出る

どんだけ切れてんだよ

原作でもやらなかったとんでもない攻撃（破壊光線みたいな）を放ってきた

「うおっと」

側転で避ける

んで同じ攻撃をジョゼに放つ

だが放てなかった

「そっぴゃアリアに魔力奪われてたっけ」

忘れてた

まさか大嘘憑きでも戻せないとは思わなかった

仕方ない

俺は螺子を5本投げる

ジヨゼは軽くあしらった

「ハッ」

そっぴやエルザいたっけ

いつの間にか背後から剣を振りかざしていた

だがジヨゼにはあたらない

ジヨゼは避けた勢いで俺に攻撃してくる

接近戦も出来るんか

手が光っている

受け止める

すると爆発した

俺の腕が吹き飛んだ

「イってえええ」

「リヨウー!!」

「くっくっく、それではロクな攻撃が出来ないでしょう」

「いってーじゃねーかこらー」

軽い

「なっ！！」

ジヨゼの顔が驚愕に染まった

既に俺の腕は元に戻っている

袖も含めて

「まったく・・・こっちはアリアに魔力奪われたせいでロクな攻撃出来ないんだぜ？」

「魔力が無いのに魔法を使えるお前はなんなんだ・・・」

エルザが呆れ気味に突っ込む

「大嘘憑きは魔法じゃねーよ」

マイナス
過負荷だ

俺はニヤリと笑いながら言う

瞬間

ジヨゼの体のあちこちから血が吹き出る

「があ・・・！何が・・・」

致死武器

他人の生まれてから今までの古傷を開く

「蚊に刺されたとかも古傷に入るところが恐ろしい」

そんな異常わん

「・・・な・・・たら目・・・な」

のどもつぶれたようだ

こりゃーマスター出番無いかない

妖精の法律覚えたかったんだけど

俺のそんな願望もむなくジョゼはぱったりと倒れた

あっけねえ・・・

「・・・」

エルザも呆れている

エルザも結構攻撃を喰らっていたので無傷とまでは行っていない

この場で無傷なのは俺だけ

大嘘憑きで治した分も含めると腕が吹き飛んでいるので無傷とまでは行かなかった

「さて、ナツの助っ人に行ってみますか」

とりあえずこないだのガジルの残していったあまりの鉄槐を2kgほど取り出し食べる

「おまえガジルの滅竜魔法までコピーしたのか」

「ふえんふいふふいふあふふいーふあふあいふえふおふえ」

厳密にはコピーじゃないけどね

そう言った

さて、魔力も回復したことだし

「ジョゼが復活しないように魔力をなくしよう・・・って」

「どうした」

「心臓止まってるわ」

ついでに脈も

「ええ!？」

エルザがエルザらしからぬ声をあげる

「あーあ。死んでしまうとは何事じゃ」

「大事だ！」

「犯人はこの中にいる」

「リヨウしかいないわー!!」

戲言再現

まさかここまでエルザが乗ってくれるとは

「乗ってねえよー!!」

「まてまて、今生き返らせるから」

「そんなこと出来るかー!!」

「完了！」

「出来ちゃった!？」

大嘘憑きでハイ無かったことに

ジョゼが意識を取り戻す寸前に空域「滅」で魔力を完全に消した

魔力はこの世界の住人にとっては生命力にも等しいのでそのまま意識を失った

「あとは死ななければ大丈夫・・・っとエルザ、どうした？」

エルザがこっちを変な目でみていたので聞く

「いや・・・お前って規格外だなと・・・」

「まあな」

チート転生オリ主だし

にしても今日のエルザは随分キャラ違うな

何かいいことでもあったのかい

「さて、ナツの助っ人に行きますか」

言った瞬間ギルドが真つ二つに割れた

決着ついちゃったっぽい

それからしばらくした後

マスターが戻ってきた

「一体どういう状況じゃ・・・」

マスターはつぶれた妖精の尻尾のギルド

真っ二つになったファントムのギルド

さっきまでのマスターと同じ状況、魔力が空になっている（実際はギリギリ生きていられる程度の魔力は残してある）ジョゼと

その近くでぶっ倒れているグレイ、エルフマン

そしてその二人を介抱している俺とエルザを見て呟いた

「説明を求められると長くなるんですけど・・・」

俺は困った風に言う

まあ本当は内心気楽なもんですよ

エルザも説明に困って苦笑してるし

「まあ全て終わったと言う事で」

戦争しかけられたから返り討ちにしただけだし

さて、外は随分騒がしくなっているようで

ジヨゼが倒れたから幽兵も消えてるし

ファントムも真っ二つになっただけでも

それでも勝ったと理解するには多少時間がかかったようで

今になってだんだん歡喜が満ち溢れてきた

「マスター、とりあえず帰りましょうか」

「ふむ」

後日談というか今回のオチ

まあ一日経ってないんだけども

言ってみただけ

俺たちはギルドの前に呆然と立っていた

ルーシイはなんだか責任を感じているようで暗い顔をしていた

「そーんな顔しないのルーちゃん」

すると後ろから声が聞こえた

レビイ、リーダー、ジェット、ドロイが戻ってきた

「心配かけてごめんね、ルーちゃん」

「違・・・う・・・それはあたしの・・・」

それはあたしのせいとでも言いたかったのだろうか

誰もルーシイのせいなんて思っていない

「ルーシイ」

マスターがルーシイにやさしく声をかける

「楽しい事も、悲しい事も、全てとまではいかないが、ある程度は共有できる。それがギルドじゃ。一人の幸せはみんなの幸せ、一人の怒りはみんなの怒り・・・そして一人の涙はみんなの涙。自責の念にかられる必要はない。君にはみんなの心が届いているハズじゃ」

ん？

少し離れたところにミストガンが壁に寄りかかっていた

「顔を上げなさい。君は妖精の尻尾の一員なんだから」

マスターはにこりと微笑みながらルーシィに言った

ルーシィはその言葉を聞き

今まで溜め込んでいた物を全てだした

まあつまり泣いた

これでファントム編は終了・・・

おや？マスターの様子が

（それにしてもちとハデにやりすぎたかのう・・・こりやあ評議院も相当お怒りに・・・いや待て・・・下手したら・・・禁固刑！？）

そんな不安を一通り考えた後

泣いた

「マスター泣くな、落ち着けー大丈夫大丈夫、仕掛けてきたのあっちだし」

とりあえず慰める

「うう・・・リョウ」

抱きついてきたんで頭を抑えて離す

まあとりあえずオチはついたという事で

ファントム編は終了した

煉獄碎破（後書き）

終わったー

せつかなのでいくつか西尾維新ネタを入れてみました

どうでしょうか

とりあえず次回からいくつか日常編、番外編を入れて楽園の塔に入ろうと思っています

今回メツチャ長かったですね

2分割すればよかった・・・

それじゃまた次回

とりあえず1週間後（前書き）

まあ原作通りですよk

それじゃどーぞ

とりあえず1週間後

疲れた・・・

今日言いたいののはただコレだけ

ファントムから一週間がたった

なんかルーンナイトとか言う奴等が来て取調べを延々と受けさせられて・・・

1週間ずっと毎日取り調べってなんの拷問？

まあようやく落ち着いてきたわけで

ちなみに壊れたギルドに関してはせつかくの機会だし改築してしまおうとのことだ

あれ？前にも言ったっけ

覚えてねえわ

まあいいや

とりあえずもう一つ

S級になりました

ハイ

エレメント4の一人とジョゼ

コイツ等を倒せるだけの实力があれば十分だとのこと

さらにもう一つ

コレは予想外にも程がある

いやありえねえって

俺もね？夢だと思いましたよ

ルーンナイトが来て取調べが終わって

そんでやっと開放されたーとか思ってたらいきなり連行されて

評議院で言われた事

なんだと思うよ？

はい考えてー

2

1

0

正解は・・・

聖十大魔道に認定されました

まあまだ決定じゃないんだけども

ジヨゼの称号が剥奪されるのはもう決定済みらしく

あとは妖精の尻尾の処罰を決めるだけらしい

なのでそれが終わったら改めて称号を与えとか何とか

恐らく最年少

まあ原作にまだ全員出てない上にその辺の情報も聞いてなかったからよく分からない

とりあえずここ一週間にあった事はこんなもん

で、今は

「やっぱ改築しなくてもよかった様な・・・」

壊れた妖精の尻尾の改築工事中

てか設計図どんだけ適当・・・

よくこんなんで皆やろうと思ったな

つかなんで進んでるんだこの工事

普通ここまでですすまねえよこの設計図じゃ・・・

「おお～もお～てえ～」

ナツが大量の木材を背負いくなっている

「いや馬鹿だろお前」

一度にそんなもってどうすんだ

俺はナツに突っ込む

「お前だって同じぐらい持ってんじゃねえか・・・」

グレイは一本づつ運んでいる

俺は大体十本ぐらい

「まあそれを軽々運ぶお前はかなり化け物じみてるな・・・」

「誰が化けモンだ」

俺は角材の一本を 그레이 に投げる

片手で

「うおおおおおおおお」

그레이 が悲鳴をあげながら避けた

「あぶねえだろーがコラ!!」

「チツ! 外したか・・・」

「デメエ・・・」

とか何とかやっているとなんだか悪寒を感じた

冷たい視線

なんだかこっちに怨念を送ってるような・・・

俺は視線の飛んでくる方向を見る

そこには誰もいなかった

一体誰が・・・

なんて

まあ正体は丸分かりなんだけども

「グレイ」

「ん？」

「ちよいとコレ持ってて」

俺は持っていた十本の角材をグレイに放り投げる

「ちょ！まっ・・・」

パリーン・・・という音が最後に聞こえた

明らかに人のつぶれる音ではない

恐らくアイスメイクで防いだのだろう

まあそれはほっというて

俺はさっきの視線を感じた方へ向かう

気配を殺しながら

知られざる英雄は使っていない

そこまで使う必要は無い

ちょっとしたことで気配なんて十分消せる

先ほどの視線の主の背後に回り

「オッス」

ためらい無く話しかける

「~~~~~ツ!!」

おゝギリギリ

もう少しでギルド中に響き渡る悲鳴を上げるところだったな

ジュビア

「なななななぜあなたがここに・・・」

「いやいやばれないとでも？」

ニイと笑いながら俺はジュビアを見る

「何々？グレイにほれちゃった？」

「ななななぜそれ才・・・」

カッチカチ

言葉遣いが乱れに乱れまくってる

「あわわわわわわわわ」

やべw面白い

（うちのマスターを倒したような奴に勝てるわけ無い！というかジユビアは（ry・・・）

「大丈夫大丈夫、バラすような真似しないから」

「ふえ？」

ジユビアが間の抜けた声を上げる

「ホレ、その弁当頑張ってグレイに渡してきな」

「え・・・え・・・」

あっはっはー

面白いなこいつw

「そいじゃな」

俺はみんなの所へ戻り作業を再開する

「ういつすグレイ、角材サンキュ」

俺はどうか脱出出来たらしいグレイに近づき

「そうだグレイ。あつちにグレイが好きとかいう娘^こが来てるよ?」

はうああ!!--という声が聞こえた気がした

「あん?」

「行ってみ?あと今はもう敵じゃないから行ってやんなさい」

「ええゝつと・・・まったく心当たりが無いんだが・・・というか敵?」

俺は周りの誰にも言うなということだけ言ってグレイをジュビアのところへ向かわせてみた

数分後

「誰もいなかったぞ？」

グレイが戻ってきた

「あつれー？逃げちゃった？」

どうやらジュビアは逃げたようだ

まあしょうがないか

後で追ってみよう

「でもなんかこんなのが置いてあつたんだが・・・」

グレイが見せたのは弁当箱

・・・と手紙？

内容は

『グレイ様よかったです食べてください
R 'J』

と書いてある

「食べてやったら？」

「え？でもなんかヤバそうじゃね？」

「だいじょーぶだいじょーぶ」

「うーん・・・」

グレイは数分迷った後結局食べた

おや？

少し離れたところからなんだか妙にふわふわしたオーラを感じた

なんかジュビアがとんでもなくいい笑顔をしながら物陰から見つめてた

あゝ・・・まあうん

よかったじゃん？

弁当食べてもらえて

原作じゃナツに食われたし

とか思っているとロキが話しかけてきた

ルーシイの落とした鍵を渡しといて欲しいのだそうだ

「お前・・・その顔！しばらく見ねえと思っただらずっと鍵探^{コレ}してたのか！？」

見るとロキの顔はものすごくやつれている

一週間水しか飲んでいませんと言われたら信じそうだ

「一言声かけてくれば手伝ったのに」

「ああ」

ハッピーとナツが言う

「そ．．．それよりルーシィはどうしてるかな．．．？」

「家にいるんじゃないか？」

「そっか」

なんやかんやでルーシィの家に行こうという話になった

んで行こうとしたら

「貴様等！．．．！どこに行くつもりだ！．．．！働けエ！．．．！」

とエルザが凄い形相で追ってきた

ハンマーをもって

「ハッピー飛ぶぞ！．．．！」

「あいさ！．．．！」

「オйнаツテメエ！ズリイぞ！．．．！」

「そいじゃ俺も行くわ」

俺は翼^{エーラ}を展開する

「リヨウー！乗せてくれー！！」

「お前・・・女子に乗せてくれってどーなんよ」

「ななななそ、そうじゃなくて・・・」

グレイがあたふたしているうちに

「じゃな」

飛ぶ

「あ！ちょ待っ！」

するとグレイが慌てて俺の脚を掴む

恐らくそれだけエルザに追いつかれるのが恐いのだろう

「え？おわあ！！」

だが人間いきなり掴まれてはバランスを崩すのも仕方無い事

落ちた

「「へぶッ！！」」

顔面から

「いつてえ・・・ハッ！」

すると背後から悪寒を感じる

そこには鬼の形相をしたエルザがいた

なんだかんだ言ってエルザもついて来た

エルザもルーシイが気がかりだとか

「ルーシイ元気がー!!」

「元気があ」

ナツとハッピーが勢いよく扉を開けてルーシイの部屋に上がりこむ

だが部屋には誰もいなかった

「アレ？いないのかな」

ハッピーがあたりを見渡す

「風呂か！！？お約束の展開が待っていていそつで申し訳ないが・・・」

とか何とか言つて 그레이가風呂を見に行こうとする

すると

「居ねえ」

ナツが調べていた

二人とも若干顔が赤くなっている辺り男なのだろう

てかはええよ・・・

どうやら出かけているようだ

「ルーシィどこ？」

ハッピーが壁についている戸棚をあける

いやそこにはおらんだろう・・・

「わー！わわわー！！」

すると戸棚の中から何かが出てきてハッピーを巻き込む

ハッピーは地面に落っこちて落ちてきたものに埋まってしまった

どうやら手紙のようだ

ママへ

ママへ

どうやら全部母親への手紙のようだ

するとエルザが机の上を見つめている

書置きだ

『家に帰る』

と書いてある

・・・はい？

「「「何イイイ!!?」「」「」

4人の絶叫が響いた

ちなみに俺はノリです

とりあえず1週間後（後書き）

主人公聖十大魔道に認定されちゃいました

多分次回かその次辺りには正式に認定されていることでしょう

まあまさかルーシイが実家に帰るあの話に2話使うことになるとは思いませんでした

最初の辺りふざけすぎたかw

まあ後悔はしていない

楽園の塔へ行くのはまだまだ先にしようと思っています

あと5〜6話ぐらい後・・・？

それじゃまた次回

ハートフィリア家（前書き）

学校が早く終わったんで更新です

まさかこの話が2話構成になるなんて思わなかったよ・・・

そいじゃどーぞ

ハートフィリア家

こんにちはー

青崎です

てか久々に苗字出たな・・・

えー現在俺はハートフィリア家の敷地内にいます

ナツたちは汽車に乗っているので着くのはもうちょい先だと思う

ちなみに俺は翼^{エーラ}でひとつ飛びでした

え？ルーシイ連れ戻さないのだった？

いやいや

こんなタイミングでなんか言っても何の意味もないし

そもそもルーシイは父親とのけじめをつけるために来たんだから俺が介入する必要も無いしね

まあ見物ですよ見物

それじゃ行つてきまつす

どこで見物してるかは一目で分かるでしょ

わかんない人の為にヒント、大金持ちなら大抵持つてる
と思う

あと秋葉とかで見る

今回はちょっと語り部休ませてもらいまーっす

S I D E O U T

ルーシー side

私は家に帰ってきた

本当はあの人になんか会いたくない

屋敷に近づくと庭掃除をしているスペットさんと目が合った

「お・・・おお・・・お嬢様ーーーー!!!!」

私を見るなり大声を上げて驚いた

そして泣きながら近づいてきた

「お嬢様・・・よくご無事で・・・私お嬢様が帰ってらして本当に・・・」

ずっと心配してくれていたようだ

「スペットさん心配かけてごめんなさい」

一応心配かけちゃったし謝った

すると大声を上げて泣きながら抱きついてくる

他の使用人の人たちも私が帰ってきたのを知って集まってきた

「お帰りなさいませお嬢様」

なんだかとても無感情な声が聞こえた

振り向くと見慣れないメイドさんがいた

「新人のメイドのノアです」

新人さん？

「えつとよろしく」

とりあえず挨拶する

なんだかこのメイドさん好きになれないな・・・

まるで感情が無いみたい・・・

「お嬢様、東方からの新書が届いておりますですぞ」

「魔法学をおこたつてはいませんか？精霊魔法は信頼と愛の魔法
ムニヤムニヤ・・・」

気付くと私はたくさんの使用人さんに囲まれていた

みんな変わってないな

「お嬢も年頃なんじゃない。駆け落ちの一つや二つ・・・のう？」

「駆け落ちじゃないですよ」

私は呆れてツツコンでしまった

「ルーシイ様魔法学をおこたつてはいませんか？」

「はい！それは大丈夫です！」

皆・・・本当に変わらない

スペットさんはまだ泣いてるし

ペロ爺は同じことを繰り返し聞くし

アレ？愚痴みたいになってる

愚痴じゃないよ

「お嬢様、旦那様が本宅の書斎まで来るようにと」

使用人のエイさん（作者が勝手に命名）・・・アレ、なんか地の文に変な文字が・・・

ゴホン、使用人のエイさんがあの人からの伝言を伝えに来た

家出した娘が帰ってきたのに「部屋で待ってるから来なさい」か・

あの人が変わらない

「さあさあ旦那様にお会いするのにそんな御古物じゃいけませんよ」

メイドさんが背中をぐいぐいと押してくる

別にこのままでもいいのに

私は着替えてあの人 of 書斎へ向かう

「失礼します」

ノックして部屋に入る

「よく帰ってきたな。ルーシィ」

SIDE OUT

SIDEノア

さて、お嬢様のいる書斎はつと・・・

あそこか・・・って

もう皆集まってるし

扉の近くまで行き中の話を盗み聞き

中からルーシィ・・・いや

一応お嬢様って言ったほうがいいか

お嬢様とルーシィの父・・・ここではだんな様の方がいいのかな？

だんな様の話し声が聞こえる

あのままお嬢様がギルドにいたなら金と権力で潰すと言っている

それは困る

どうやらお嬢様を連れ戻したのは縁談がまとまったからだそうだ

政略結婚

しかも相手は随分な変態やローみただいだ・・・

しまった

つい素が出てしまった

せつかく感情を殺してたのに

お嬢様はそれが恐いって思ったみたいだけれど

だんな様は勝手に話を進めていく

ジュレネール家との結婚

いや玉の輿かもしれないけど親が結婚の相手を決めるって最悪だな

そのまま原作どおりに話は進んでいく

お嬢様は家を出る事

妖精の尻尾に手出しをすれば敵とみなす事を宣言し自分の着ているドレスを破り捨てる

あーあもつたいない

あのドレスいくらすんだろ・・・

お嬢様はだんな様に別れを告げ部屋を出た

SIDE OUT

SIDE ルーシィ

「さよなら、パパ」

私は最後にお父様をパパと呼んで別れを告げた

そのまま着替え、敷地内にあるママのお墓へ向かう

この家を出る事をママに告げる

「お嬢様」

後ろから声が聞こえた

ノアさんだ

でもさつきみたいに感情が無い声ではない

「さつきはかつこよかったですよ？ルーシィ」

なんだか意外と軽い性格だった

「えーっと・・・」

つい呆然としてしまう

「ああ、この姿じゃ分かんないか」

ハイ？

突然口調と声色が変わった

するとゴキツという骨の外れるような音がする

ノアさんの肩が外れている

他の部分もゴキゴキと変わる

そして原型をとどめていないんじゃないかというぐらい変わった後

元に戻っていく

正確には元に戻っていくのではなく

姿も何もかもが変わっていた

一瞬ノアさん（？）が光り服装も変わる

とても見覚えのあるその姿

「やほールーシィ」

見覚えのある声で彼女は私に話しかけた

「リヨ・・・リヨウ？」

リヨウだった

えー・・・？ナニコレ

なんでリヨウがここに？

ノアさんは？

というか見てたの？

「他の使用人も見てたぞ？扉に張り付いて盗み聞きしてた」

話が終わった頃に全員持ち場に戻ったけど

そうリヨウは付け加えた

「いやなんでリヨウがここにいるの？」

「俺だけじゃないよ？ナツやハッピー、 그레이にエルザもそろそろ来るんじゃない？」

「えええー！ーッ！？」

「いやー今日ルーシィが家に居なかったからみんな心配してたぜ？家に帰るなんて書置きが置いてあったし」

リヨウは今日あったことを坦々と説明していく

すると

「ルウシイイイ」

後ろから聞きなれた声が聞こえてきた

ナツたちだ

ハッピーが泣きながら抱きついてきた

スペットさんみたい

なんで妖精の尻尾を出て行くんだみたいなこと聞かれた

いやいや出て行かないよと説明

みんな目を丸くしてた

リヨウ以外

そりやずっとみてたんだもんね・・・

エルザは笑っている

グレイは安心したみたいに脱力

ナツは心配させやがって！と騒ぎながら私を説教してきた

とりあえず平謝り

ハッピーは相変わらず泣いている

皆私を心配して来てくれたみたいだ

なんだかとてもうれしかった

S I D E O U T

S I D E ノア改めリヨウ

ノア改めっていらなくね？

「母ちゃんの墓参り!？」

ナツが驚き叫ぶ

「え・・・ルーシィのお母さんってムゲツ」

ハッピーが余計なことを言おうとしたので口をふさぐ

「結局とりこし苦労だったわけか」

그레이が上半身裸で呟く

いつの間に脱いだんだよ・・・

ルーシィが謝り

そして

「てかどうやってメイドに変装したの？」

と聞かれた

なぜ今聞くんだったかスルー

「骨格変化と声帯変化」

「なんじゃそりや・・・」

グレイが呆れて突っ込む

「えつと骨格はまあ骨の形を変形させて、声帯変化は声帯の形を変えたり人工的にポリウムグッ」

「いや、もういい」

グレイが俺の口をふさぐ

ナツはちんぷんかんぷんという顔をしている

エルザは軽く呆れ

ルーシィはなんか青ざめている

ちよつとグロかったかこの話

「まあいろいろやったんさ」

「メイド服なんてなんで持ってたの？」

痛いところを突かれた

まあ神から貰ったわけだが（初日に降ってきたバッグの中にちゃっかり入ってた）

まさか着る機会が訪れるなんて思っても居なかった

「ルーシイが一度家に戻るであろう事をこの私あらかじめ予測していました」

戯言シリーズの木賀峰約風に言ってみた

「なんだそりゃ」

「モノマネ」

「誰のだよ・・・」

よし

メイド服に関しての質問からは反れたわけで

助かった

「それにしてもでけー街だな」

グレイが辺りを見回して言う

すると

「あ、ううん　ここは庭だよ。あの山の向こうまでがあたしん家」

3人が固まる

俺もちよつと驚く

原作で見たよりもでかいんだもん

現実の方が

多分そう見えるだけなんだろうけども

「あれ・・・どーしたのみんな」

ルーシイがキョトンとして聞く

「お嬢様キタ　（。　。）　！！」

「さり気自慢キタ　（。　。）　！！」

ナツとグレイが壊れた

ハードディスクが大破した

「ナツと 그레이 がやられました！！エルザ隊長！リヨウ軍曹！！一言お願いします！！」

ハッピーも壊れたのだろうか

いやこいつは常にこんなんか

「空が・・・蒼いな・・・」

エルザが故障した

ふむ

「修理工場に運んでください」

ちょっとふざけよう

「エルザ隊長とリヨウ軍曹が故障したぞー！！！！」

「俺は軍曹じゃないぞ・・・」

「あ、直った」

こんなアホアホトークをしながら俺たちはギルドに帰った

ハートフィリア家（後書き）

今回ちょっと今までと違う事やってみた

ルーシー視点

やっぱり難しいね

あとリヨウの変装（むしろ変身）したノア

名前は適当です

いやーまさかルーシーが家に帰る話にまさか2話つかうなんて思わなかったよ

とりあえず樂園の塔入りはまだまだ先になりそうです

それじゃまた次回！

最強チーム結成（前書き）

禁書11話が今日放送です

なぜこんなテンション高いのかというと姫神の出番（かなり久々）だから

まあそんな好きなわけでもないんだけど（笑）

んでなぜ禁書話をここでやるのかというと禁書のほうはあと数日ほど休載するので更新しないからです

まあ読めば分かる

FTの方はまだ持つか

あれだ、色々あるからやりたい事

主に

レーサー虐めたい（笑）

あとオリジナルの魔物的なものを色々出してみたい

そろそろ本編はいります

そいじゃどーぞ

最強チーム結成

俺は現在、評議院にいる

理由はまあ聖十大魔道の称号貰うため

こないだ説明したと思うが

今日の裁判でジョゼの称号剥奪とかそういうのが決まるらしいんでついでにさっさと済ませたいとの事

まあそれ言ったのは俺なんだけど

めんどいからさっさと済ませたい

てことでもう済ませました

なんか賞状っぽいものとなんか聖十のマークが入ったバッヂ(?)っぽいもの

称号のほうか正しいのか?

分かん

まあついでにそろそろ裁判も終わったであろうマスターにでも挨拶に行こうかと思っている

ちなみに他の聖十にも会った

えーっと・・・まあほんの数人しか来てなかったんだけども

マスターは裁判で欠席

ジークとえーっと確かラミアスケイルのマスターのジュラだ、確かコレであつてたっけ

多分あつてさきつと

うん

まあこんなもんか

ちよつとジツクーは軽く弄つてきたよ

すれ違いざまに

『よう思念体』

つて言つてみたら面白い反応見せてくれたよ

知られざる英雄ですぐに姿を隠したさ

なんか最近Sに目覚めてきてるような気がするのはいきつと気のせいさ

主人公の性格、口調がもう一個のほうと設定が同じつてのは問題あるだろう

あ、すみません

まあ違うところといえば頭の出来？

それは完成と黒い包帯のおかげだし

後、解析？

つともうこんなに行数が

そろそろマスターに会っておかないとまたどうでもいい話に2話も
つき込んでしまいそうだ

ってこういう話は劇中でしていいのか

てかこれ以上行数つか

長くなりそうなので中略

「ちわっすマスター」

俺は評議院のヤジマさんと話していたマスターに声をかける

「リヨウ！？お前なぜここにいるんじゃ・・・」

「いやまあ個人的（？）な用事で」

「用事？」

「これこれ」

俺は聖十の認定書（こっちが正解か）をマスターに見せる

「つーことはこないだ話題になったジョゼに変わる聖十と言っ
んわ譲ちゃんかい」

ヤジマが俺に言う

マスター？

なんか白くなって固まってる

「おーいマスター、大丈夫かー」

石みたいになってるので頭をこんこんと叩くと崩れ去った

すぐさま大嘘憑きで元に戻る

「ハッ！今何が起きたんじゃー！！」

なにやってんだかこのジーさんは・・・

「聖十の称号をそんとスでとっちゃまうとは末おそろしいわ」

ヤジマさんがなんか呆れてる感じで話す

「イマイチ実感わかないんですけどね・・・」

いやーそりゃそうだよ

たまたま乗り込んできたファントムのマスターを撃退しただけでまさか認定されるなんて思わんさ

マスターも呆れて喋らんし

まあいいか

「それじゃ俺は帰ります。また縁が『合ったら』合いましょう」

狐さんのな

最近作者が（今更）戯言シリーズにハマったんだそうだ

俺はヤジマさんに一礼したあと翼^{エーラ}でギルドへ向かう

マスター置いてっちゃったけどまあいいか

大体30分後

ギルドに着いた

ハッピーからコピー（？）した俺の翼^{エーラ}のスピードはとんでもなく早い

「着いた」

俺はそのまま適当な位置に着地してとりあえずなんか飲みたいので
カウンターに座る

隣にルーシィが座ってるので話しかける

なんか元気が無いような・・・

どうやら昨日鍵を落としたせいで精霊（主にアクエアラス）にかなり怒られたらしい

メツチャ叩かれて尻が痛いらしい

・・・そつとしとこつ

なんだかギルドボードの周りに人が集まっている

「なんかあったの？」

俺はそつとしとこつと思つたそばから隣にいるルーシィに聞く

「今日から仕事の受注を再開するらしいわよ」

「ふーん」

まあ今は近づける状態じゃないので仕事を請けるのは後でいいか

「そっぴゃロキいないのかなあ」

「「とうとうルーシィもロキの魔手に・・・」」

「違います!!」

たまたまハモッて俺とミラさんがルーシィを同時にからかう（多分ミラさんは素）と最後まで言う前に反論が来た

「なんか鍵見つけてくれたみたいで一言お礼したいなって」

「うん・・・見かけたら伝えとくわ」

と俺とミラさん、ルーシィが話していると後ろからエルザの怒声が聞こえ机が飛んで来た

机はたまたま近くに居たナツに当たった

見るとエルザとラクサスが口げんかをしているようだ

「もうーぺんいつてみる!!」

ギルドがざわつく

騒がしい

「この際だハッキリ言ってやるよ。弱エ奴はこのギルドに必要なねえ」

「貴様……」

エルザが怒る

だがラクサスはお構い無しにエルザを……いやこの場合ここにいる全員を挑発してるな

「ファントムごときになめられやがって……恥ずかしくて外も歩けねえよ」

なんとなく

なんか言いたくなかったので

「ファントムにビビってほとぼり冷めるまで戻ってこなかった奴がなに言ってるやら……」

と俺は聞こえないように呟いた

近くに居たから聞こえてたグレイ、ルーシィ、ミラさん、ハッピー達が「お前なに言ってるのー!？」

というのを顔に思いつきり出してこっちを見る

俺はその視線を完全にスルー

カウンターでジュース（酒はまだ飲めん。飲めても昔、前世で親にイタズラで飲まされたときに禁酒令を一方的に出されて以来飲んで

ないから飲まん。俺何したんだろつな……。を飲みながら我、閑せずを貫く

だがラクサスにも一応聞こえてた様で（声小さくした意味ねえ……。こつちにおつそろしい形相しながら向かってくる

エルザは「よく言った！」みたいな顔とハッピーたちみたいな顔が混ざったような顔でこつちを見る

「デメエ今なんつった」

ラクサスがこつちをにらむ

「なんか言つたつけ？記憶喪失なんで」

ちなみにこの世界ではそういうことにしてある

ラクサスが俺の頭を掴んでカウンターにたたきつけた

カウンターが砕け散る

「リヨウー!!」

たぶんエルザがルーシィ辺りが叫ぶ

「なになめた口聞いてんだ……。ア？」

どうやら鶏^{チキン}発言がよつぽど気にさわったようだ

だからといって顔をカウンターに叩きつけること無いだろう

木片目に刺さったじゃんか

「イッテな」

俺はなんら躊躇無く螺子をラクサスの顔面めがけて投げる

「・・・ッ!」

ラクサスはギリギリでよけ俺から距離をとる

ちなみにあと1秒でも俺の近くにいれば全身の古傷、トラウマ全部開いてるところだった

トラウマあるんかなあ・・・あいつ

「目に木片刺さったじゃん。失明したらどうすんだよ」

俺は目から5cmほどの木片を引き抜き大嘘憑きで無かった事にする

ついでにカウンターも大嘘憑きで

「お前の目も潰してやろうか・・・?」

俺は思いつきり殺気を込める

ラクサスも負けじと殺気を放ってくる

すると

「ラクサス！リヨウ！」

ミラサンが直ったカウンターを思いっきりたたきながら怒鳴る

「喧嘩はやめなさい！もう全部終わったのよ！戦闘に参加しなかったラクサスにもお咎め無しってマスターも言ってるんだから！リヨウも挑発しない！！」

「すみませんミラさん」

（（あっさり））

周りからそんな心情が思いっきり流れてきた

元々ちょっとラクサスからかいたくなっただけだしね

ラクサスは怒りながらこつちを睨むが俺が人身支配の応用で全力の殺気をラクサスのみに放つと舌打ちしながら何処かへ行った

だれかが安心したようにため息をつく

「お前、よくラクサスにあんな口聞けたな・・・」

그레이が呆れ顔で聞いてくる

「別にそんな出来ないことでもないでしょ」

「・・・」

ポカーンとしていた

「あんのヤロオ・・・」

ナツがラクサスが居なくなっただけを見て怒る

それをエルザがなだめ

そして

「それよりどうだろう、仕事にでも行かないか？」

と続けた

ナツもポカーンとなった

「もちろんグレイとルーシィ、リョウも一緒だ」

「はい！？」

「え！？」

「グレイ・・・服・・・」

俺はリアクションしないでそのままツッコミ

「鉄の森の件から常に一緒にいる気がするしな、この際チームを組まないか？ 私たち5人で」

ハッピーも入れたら6人か

と付け加え

リアクションはそれぞれでナツとグレイはちょっと嫌そうだったが
エルザに聞かれるとうれしいですと答えた

周りがさわぐ

「妖精の尻尾最強チーム正式結成だー！！」

「いいぞー！！！」

「てかルーシィ最強か？」

「俺はアクエリアス出されたら勝てる気がしない」

「リヨウは？」

「あいつは明らかに規格外」

「さっきもラクサスめっちゃ挑発してたしな」

「目に木片刺さっても平然としてたぞ・・・」

「化け物？」

「お前らが最強だー！！」

なんかすこし聞捨てならない言葉が聞こえた気がするがまあいいや

「早速仕事だ！ルビナス城下町で暗躍している魔法教団をたたく」

エルザの見せた依頼書には500000と書かれている

「いくぞ」

「「「「「おおおおおおおっ!!」「」「」

てなわけでチームを組む事になった

最初の仕事は魔法教団退治

最強チーム結成（後書き）

もうしばらくは楽園の塔に入るつもりはありません

実は作者・・・

まだ六魔將軍までしか見たことないんですよ

しかもコミックスは13巻までしか持っていないというw

なんで小説があまり早く進むのも困るんですよ

まあこんどコミックス買うつもりでいるんですが

本編でも言ったように最近戯言シリーズに（今更）ハマって

ようやく戯言が読み終わったんですが

まだ人間シリーズ見てないしモンハン3rdも欲しいし

それに傾物語もそろそろでるんで中々買えそうにないなーと

まあ2月ぐらいまでには全部揃えようと思ってます

ちゃんと更新はしますよ

それじゃまた次回～

魔法教団って何？（前書き）

魔法教団って何？

ネクロマンサーでも使わせればいい？

前回書き終わって気付いたこと

魔法教団って何？

仕方ないので敵さんにはネクロマンサーでも使わせます

とりあえず目的はゼレフの魂を操るとかそんなんでいいか

という訳でどーぞ

魔法教団って何？

今回の依頼はゼレフの魂を操るとかそんなが目的の魔法教団の討伐で

「アレがアジト？」

「そうだ」

俺たちは建物のカゲに隠れながら奴らのアジトである黒い教会を見る
扉は大きく結構な重さがありそうだ

魔法が施されておりどんな力が強い人間でもそれに合わせた重さになる

なんか分かりづらいので適当に

例えば

100kgまでしか持ち上げられない人間の前では50kg

1000kgまで持ち上げられる人間の前では500kgになると
いう感じらしい

なので誰が開けようが同じ時間がかかる訳で

どうやら気配だけでその辺のステータスが分かるらしい

しかも魔法は使えないそうだ

なぜなら扉の前に対魔法の結解が張られており

魔法にしか効果がない分効果は強いらしい

さらに扉の前には見張りが二人居てどちらも結構な腕前の魔道士らしい

まあこの人数なら倒すのは簡単

だが恐らく中にもたくさんの魔道士がいるので半開きの時にいきなり槍でも突いてきたらまず避けられない

開けたらすぐに閉じるというめんどくささ

気配に反応して重さが変わるねえ・・・

「それなら気配を消せば重さは元に戻るんじゃない？」

「それには気配を完全に絶たなければならぬからな」

そう簡単に出来ることではない

とエルザは言う

となると

「俺が行くしかないわけか」

「気配を消すなんて出来るのか？」

「前にやったじゃん」

「確かに・・・」

ルーシーが呟く

さつきから俺とエルザしか喋ってねえなあ・・・

まあナツとグレイはいないから喋るのは必然的に俺とエルザとルーシーだけなんだけど

ナツはついさつきまで乗っていた魔道四輪が効いた際エルザに殴られノックダウン

鉄の森の時と同じ理由

グレイはとある理由からエルザにぶん殴られノックダウン

理由は聞かないで・・・

グレイだって悪気があったわけじゃないんだから

まあナツと喧嘩してぶん殴られただけなんだけど

エルザが加減を間違えたらしく今日ずっと気絶したままだ

どんなパンチ・・・

ギルドを出発する時に起こった事件です

「そんじゃ行つて来るわ」

知られざる英雄で姿を消す

そして見張りの二人を眠りの魔法で眠らせ

「RPG - 7」

別に言う必要はなかったろうが一応

カゲで腕を作り4つ持つ

そして

撃つ

扉が大破した

放った弾は4発

そのうち2発が扉を破壊し

残り2発が中にいる教団メンバーの一部を吹き飛ばす

「な、なんだあ!？」

「あの扉が破壊されるなんて!」

教団の奴らが騒ぐ

そのままエルザとルーシィも来る

ナツとグレイはホテルにいます

エルザが叫ぶ

「妖精の尻尾だ！白の教団だな」

なんで白！？

協会黒いのに

もうホントに黒い

窓以外全部黒だし

「な！なんでギルドが！！」

「くそ！やれえ！ゾンビども！！」

どうやらコイツらは失われた魔法である死霊魔法ネクロマンサーを使っているらしい

大量の骨が襲ってくる

「ヒイヒイ！！骸骨うう！！」

ルーシィがビビる

「ビビってないでなんか精霊だしてよ・・・」

「じじじじ人馬宮の扉！！サジタリウス！！」

「お呼びでありますかーもしもし」

変なマスクをつけ、弓矢を持った20代後半ぐらいの男が出てくる

「サジタリウス！あの骸骨どもやっちゃってー！！」

「了解でありますからしてーもしもし」

そういつてサジタリウスは弓矢を構え放つ

いつの間にあんなに放ったのか十本ほどの矢が骸骨の頭蓋骨を貫いた

俺は妖刀・心渡&祢々切丸を出し骸骨を切り刻む

やっぱ妖怪退治にはコレでしょう

「何だコイツらー！！」

「やべえぞー！！逃げろー！！」

教団のメンバー数人が外へ逃げる

が

外には巨大な風の壁があった

「あれは・・・魔風壁!？」

エルザが驚愕する

「ああアレ俺」

「は・・・？」

「俺が他人の魔法コピーできるの忘れたか」

既にネクロマンサーも完成済みさ

さて

「ボスはどこだ？」

俺は残った教団の奴の首に祢々切丸と心渡を突きつける

「ひ・・・ひいい!」

「早く言え」

首に軽く突き刺す

死なないので別に問題はないが触れる事は出来る

切っても死なないというだけで切ったという感触はあるらしい

「わ、分かった!!--二階の奥のへ、部屋!!--」

「そうか、サンキュ」

そついい残し俺は祢々切丸で首を切る

「ぎゃああああああああああああああああああああ」

「殺したー!?!」

ルーシイがこっちを見て叫ぶ

「ってアレ?」

だが首は刎ねていない

傷一つついていない

恐怖に負けて気絶したようだが

「コレさ、妖怪とか幽霊とかの類を切る刀なんだよね、ついでに魔力、妖力なんかも全部放出させちゃうからこういう相手にはもってこいなんだ」

俺は祢々切丸の説明をルーシイにした

「なんでそんなん持ってたのよ」

「さあ?」

記憶喪失だからわかんねえ

と嘘を言ってごまかす

「さて、このボス捕まえに行くよ。どーせ魔風壁あるから逃げられないし」

ちなみに一階の魔道士たちはエルザが殲滅済み

死んでないけどね

でボスの部屋

「妖精の尻尾だ」

俺は扉を蹴り開ける

そこに居たのはスーツにオールバックの黒い長髪という外見の男だった

「外の扉と同じ魔法がかけてあったのだがな」

男は余裕そうに呟く

「気配を消せばただの扉」

「フン、面白い奴だ。気配を消すなどと簡単に言えるとは」

「特技の一つだしね」

「他にもあると?」

「骨格変化、声帯模写、錠開け、暗殺、催眠術、魔法完成、空間作成、曲弦系、あと・・・」

「もういい」

俺は覚えているだけ使える技能を言う

空間作成というのは戯言の一里塚木の実のアレだ

完成って異常だけじゃなくて技能もいろいろ使えるから

「で、私を捕まえに来たと」

「そういうこと。おとなしくつかまれば何もしないさ」

原作通りなら街が半壊しちゃうわ

だから何も考えないですぐにでも行こうというエルザを止めて作戦会議やらなにやらして準備整えてきたんだから

「そういうわけにも行かないな・・・ぶつぶつ」

男は何かの詠唱を始める

瞬間

地面にあった魔方陣（今まで気づかなかった俺って馬鹿？）から巨大な鎌を持った5mほどの骸骨が現れた

「何だコレは！？」

「今度はなにー！？」

今になってエルザとルーシィがやってくる

「おせーよ・・・仕方ない」

ちょっと痛い目に遭ってもらう

俺はそう呟き武器を換装

出したのはテンコマンドメンツ（剣）

「スターレイヴアー」

第十の剣シバver

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

骸骨が鎌を振り上げる

地面そして鎌が地面に刺さる

途端に地面は陥没した

10mほどの穴があき

「嘘でしょお!!」

ルーシイが叫びながら落ちた

俺とエルザはとっさに飛び落ちずにすんだ

「ほう・・・アレを避けるとは」

「うつせーないからおとなしく捕まってくれよ」

骸骨が鎌を横なぎに振るった

すげー速さ

俺は鎌を剣で受け止め破壊する

「おお・・・」

RAVE原作でも未登場で設定すらも絵以外出なかったがここまで
の力とは

まだ底はあるっぽいし

『オオオオ』

骸骨が呻く

外見からして死神っぽい

そろそろ決着つけないといい加減エルザが街の破壊行為に出そうだな
なんかこいつを倒すにはコレしかないのと言って大量の武器を
浮かせてる

この部屋広いから100、200くらい出しても余裕ありそうだ

「とりあえずさっさと決着つけないとな」

俺は剣を居合いの形に構える

骸骨がこっちへ向かってきた

剣が届く範囲に入った瞬間

俺は踏み込み一気に剣を振るう

その衝撃波は骸骨を跡形もなく吹き飛ばし部屋を埋め尽くす

もちろん奥の男もタダではすまない

そのまま気絶した

よく生きてたな・・・

まあ死んでたら大嘘憑きで治したか

「エルザ、終わったぞ」

「え？あ、ああ」

いつの間にか大量の武器が宙に浮いていた

その武器は出番無くそのまま消えた

一発思いつきり決めたかったのかなんか少し残念そうだ

「さて、帰るか」

見たところ街は無事だ

魔風壁は既に解いてある

さて、帰るか

魔法教団って何？（後書き）

なんかかなりむずかった

バトル描写は難しい

次回は原作どおり演劇手伝いです

まあ主人公が参加するかどうかは決めてません

それじゃまた次回！

旅館で一泊（前書き）

今回は原作とおりです

フレデリックとヤンデリカは主人公の役が思いつかないので飛ばします

原作に絡まないいいじゃん

と言う訳で原作の精霊王の前の話です

それじゃとぞー

旅館で一泊

「トドメ!!」

俺は盗賊の最後の一人に蹴りを入れる

「ゲボア!!」

そのまま盗賊は4mほど飛んでいき意識を失った

「おわったあ」

「齒ごたえのねえやつらだな」

「弱えくせにぞくなんかやってんじゃねーよ」

俺、ナツ、 그레이の順

今回の仕事はマグノリアから少し西へ行った鳳仙花村というところからの依頼だった

近くの砦後に住み着いた盗賊団の殲滅……討ば……捕獲という仕事だった

なんだか物騒なこといいそうだったけども

思ったより早く終わったな

「ルーシィ見てーこの宝石ー」

ハッピーがルーシーに盗賊が盗んだものだろうと思われる宝石をどこから持ってきた

「だーッ！！勝手に持ってきてちゃ駄目でしょ……！」

「ハッピー置いてきなさい」

とりあえず注意

「あい」

「なんでリヨウの言うことはちゃんと訊くのよ」

さあ？

本能的に怯えてるんじゃない？

動物避けのスキルが付いてるから

とりあえずオンオフは可能だけでも

「宿はあと1日とつてあるしな。のんびりした村だ、一泊して帰ろう」

エルザがそういうとナツが早く帰って次の仕事行きたいとダダをこねる

「まあまあ落ち着け」

ナツをなだめていると視界の端に人影がうつる

「アレ？ロキ？」

言つとロキも気付いたようでこっちから近づくとあっちも近づいてきた

「偶然だなあ」

「お前もこの辺で仕事かー？」

グレイとナツが話しかける

「丁度よかった。この前は鍵あ」・・・」

「ルーシイ！！！！！」

ルーシイが最後まで言つ前にロキは仕事の途中だからと言って逃げた

「何よアレ」

ルーシイが少し怒りを交えた声で言つ

「お前あいつに何したの？」

俺はルーシイに聞く

まあ知ってるけどね

「何もしてない」！」

とこんなやりとりをしながら俺たちは宿に向かう

「うあゝ」

俺は宿の温泉につかりながら呻く

ルーシィはさっきのロキの態度にまだ釈然としていないようで

俺はボケーンと浮いている

すると

「ぶあー!!」

顔面にお湯がかかった

「あ、すまん」

どうやらエルザが近づいてきたトンボを追いかかおうとしたようだ

「なにすんだよエルザ」

俺は顔を拭いながら言う

「ハハ、まあまあ」

「まあいいや」

と呟き

お湯をエルザの顔面目掛けて放つ

「お返し」

俺はニヤニヤと笑みを浮かべながら言う

「フッフッフ」

エルザが不敵な笑みを浮かべ

そのままなぜかお湯かけ合戦に突入した

で

現在部屋

俺とエルザは遊んでて長湯した結果のぼせてぐったりとしている

「うぁー」

本日何度目になるか分からないうめき声

エルザも似たような状況

まあ楽しかったからいいか

「始めんぞーッ！！！」

「ぞー！！！」

ナツとハッピーが枕を持って叫ぶ

枕投げねえ

いやー中学の修学旅行を思い出したよ

ぐったりしていた俺とエルザは瞬時に復活し枕を持つ

「質のいい枕は私が全て抑えた、貴様らに勝ち目は無いぞ」

「さっきの続きといこうか」

俺とエルザはかなり乗り気

ナツがエルザに向け枕を放つ

エルザは飛んで避けた

そしてその枕はすぐ後ろにいた 그레이 の顔面に当たる

「ぐべぼッ！！！」

그레이 はうめき声を上げ

「ナツ テメエエエ！！」

と枕を持って立ち上がる

瞬間

「あぼッ！！！」

俺が 그레이 の真横からわき腹に枕を放つ

「よっしゃ 命中！！うわっ！」

すると横からエルザが投げた枕が足に当たり転んだ

「うっ！」

しりもちをつき呻く

だがすぐに立ち上がりエルザに枕を3つ同時に投げる

「おっと！やるな・・・」

そしてルーシイも参戦

した瞬間

誰が投げたかは分からないが2発（1発は俺）の枕がルーシイに直撃

そのままルーシイは襖を貫き悲鳴を上げながら外へ飛んでいった

「ルーシイリタイア」

で

「ういっす」

俺はプルーを連れ歩いているルーシイに後ろから話しかける

「リヨウ？枕投げは？」

「あのままいたら旅館が台無しになってお上に叱られそうだからその前脱出」

「お上の字が違うような・・・」

「意味としては似たようなもんさ」

女将じゃなくてお上、警察ね

「あいつら本当に人間なのかしら」

「さあ」

「プーン」

「ハッピーは猫か。プルーも犬だしね」

「プーン」

と話していると

「オイラ本当は人間なんだプーン」

とプルーがしゃべった

「へえ・・・えええ！？」

ルーシィが吃驚して後ずさり

「アンタしゃべれるの!？」

とルーシィが訊くと

「あい」

という返答が帰ってきた

「あい？」

「オイラは聖なる石を持つ勇者の使いブーン」

見ると茂みの影にハッピーがいる

てかハッピーが言った事あながち間違いじゃねえ・・・

聖なる石を持つ勇者の使いつて・・・

やっぱ前作のセルフパロディ多いよねー

ジークやらなにやら

ブルーは真島作品のほとんどに登場してんだっけ

「はいはいもういいからしょーも無い事しないで出てきなさい」

ルーシィが隠れているハッピーに話しかける

「ちえールーシイの頭の悪さならリヨウが黙ってくれば1週間は騙せると思ったのに」

「俺が気付いてた事よく分かったな」

「あい」

「随分ありがたい計算ね・・・」

「ルーシイ、リヨウどこ行くの？」

「あのままだとお上が来て叱られそうだからそうなる前に避難したの」

「あんな奴らと枕投げしてたら身が持たないわよ」

と返答すると後ろから誰かに声をかけられる

「ハ～イお嬢さんたち」

振り向くと頭を異常なくらいに振っている男とニット帽を被ったチヤラ男が居た

「浴衣に合うじゃん。観光？」

「俺たちオシバナから来てんだけどサ。どう？一緒にのみにいかない？」

うわーなんつー古典的なナンパ

「悪いけどツレ居るから」

「俺未成年だし」

と返答

「えーちよっとくらいいいじゃんいいじゃん?」

「ごめんね」

「ツレってその猫と・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんだろね

ブルーって

「ならそのファンキーなツレも一緒にイイからサ」

「行こうじゃん?」

「強引だなー」

「そういえばそっちの君、俺っていったけどもしかして男?」

「んにゃ女」

とりあえず否定

精神的には男だけど最近女性の裸見ても何も感じなくなった

まあだからといって男見てもなんも感じないんだけども

二人の男は俺とルーシイの腕を掴む

ルーシイはなんかまんざらでもなさそうだ

ナンパされてうれしいのか？

ルーシイはハッピーに助けを求めた

「にゃー」

という返答

「にゃーってアンタ！！！」

「猫に話しかけるなんてかわいいじゃん」

「違う！！」

ルーシイが否定する

アレ

「ちょっとおにーさん」

俺は男の一人に話しかける

「なに？」

「この魔法解いてくれない？」

「・・・!!」

ルーシィも自身が動けない事に気付いたようだ

「勘弁してくんない？そろそろ・・・」

俺は続ける

「ツレが来る頃だし」

瞬間

首を振ってたほうの男が吹きとぶ

「な、なんだてめ・・・」

最後まで言う前に蹴りが放たれもう一人も吹き飛んだ

おっぱらってくれたのは

「怪我は無い？」

「ロキ！」

ルーシィが意外そうに名前を呼ぶ

途端

「ごめんなさい」

隠れた

「何が!？」

どうやらコイツらは女性を食い物にしてるころつきだそうで

てか俺にまで手を出すって

かなりのロリコンだよな・・・

見た目的にはまだ俺ウェンディよりちょっと大きいぐらいだし

ロキはこいつ等を捕まえるのが今回の仕事だったようだ

ロキがその場を立ち去ろうとする

するとルーシイが引き止めた

「え？」

ロキが驚いたように口を開ける

「こここの展開は!?!」

「ププ!?!」

ハッピーとブルーがなんか反応した

「それじゃ俺はお邪魔みたいなんで退散しまーす」

「違・・・!!」

最後まで言う前に知られざる英雄で消えた

で

翌日

ナツと 그레이 がにらみ合っている

身体には包帯が巻かれている

先日の枕投げでした怪我だそうだ

あの後旅館に戻ってみるとひどい有様で仕方なく俺が大嘘憑きで全
て治した

그레이 と ナツ の怪我は罰つてことで軽く仕置きして放置

なので原作よりもずっとひどい怪我

どうやら二人は枕投げの勝敗で争っているようだ

「ルーシイ!!! 勝ったのは俺だよな!!!!!!」

二人はルーシイに話を振る

「うるさい」

という返答が帰ってきた

そのあまりの迫力にナツと 그레이が頭を下げる

周りはエルザ意外に二人を止められる奴が居るとは!

とか何とかさわいでいる

「機嫌悪いなルーシイ」

俺は隣でコーラ飲みながらルーシイに話しかける

「そう?」

「昨日口キとなんかあったん?」

「・・・」

「まあ無理には聞かないけどね」

「ありがと・・・」

と話していると

「ねえロキ来てる？」

という声が聞こえた

どうやらロキが付き合っていた女性たちらしい

てか多ッ！

10人近く居る

ハッピーによると自称ロキの彼女だそうだ

本命じゃないんか

ビビった・・・

するとミラさんがルーシィに助けを求めた

自称ロキの彼女たちが一斉にルーシィを睨む

ルーシィはその視線に耐え切れず逃げた

「ハッピーいこーぜ」

「あい」

俺とハッピーはルーシについて試してみる事にした

旅館で一泊（後書き）

疲れたんで一旦終了です

なんか今回うまく書けなかった・・・

次回は今回の続き

と見せかけて番外編です

で番外編の内容ですが

アンケートでもとってみよう

なんかやって欲しい事感想に書いてくれるとうれしいです

できればクリスマス関連

もしくは正月、大晦日関連

なにも来なければサンタのクリスマス以外の仕事をFTメンバーと禁書2次小説主人公を連れてきて話してみようという最悪にくだらない内容になるでしょうがそれはそれでうまく面白くしようと思っています（なんでこんなん思いついたんだろう）

それがいいという人はサンタのクリスマス以外の仕事を考えて書いてください（例・鹿の肉を捌いて売っている）

更新日は25日

短いですがそれまでに

難しいこと言っでごめんなさい

それじゃまた次回く

もしかすると今日か明日に本編更新するかもしれんです

星霊王（前書き）

もうすぐ冬休みだあああああああ

やつほおおおおおおおおおおおおおおい

騒いすんません

ちょっとテンション上がってます

さらに謝る事がもう一つ（まあ→やらなけりや謝らんでも良かったんだが）

今回の前半、主人公の出番ほとんどありません

すいません

ほぼ原作どおりです

それでもいい方どーぞ

星霊王

ルーシィの家でクル爺の話を聞いているとグレイがルーシィの部屋に突入して来た

ロキが妖精の尻尾を出てってしまったそうだ

で

「ロキ」

現在搜索中

空から

たしかカレンの墓の前ってことは分かってんだけど

カレンの墓ってどこだああああああ

と探して居ると

「あそこか」

ルーシィとロキが話しているのを見つけた

とりあえず木の影に隠れ知られざる英雄で姿を消す

さて、今回は俺には何も出来ないし

傍観と行きますかね

「僕は裏切り者の星霊だ。所有者であるカレンをこの手で殺した」

随分中途半端なところからスタートだった

「あなたがカレンを・・・所有者を殺した？」

滝の音が響く

何とか聞き取れるけども

「所有者を殺した星霊は星霊界には戻れない。このまま僕は消えていく」

「そんな・・・」

「三年前の話だ・・・カレンは青い天馬の魔道士だった」

木製フィギュア《エリゴール》預けたところか・・・

ロキが自分の過去を話していく

タクロウって・・・この世界に東洋人いたんか・・・

ってそこじゃない

どうやらカレンが星霊を道具のように扱うのを見て見てられなくなったロキが代わりに人間界に出てきてそのままとどまり続けた結果

カレンは仕事先で星霊を使えずに六魔將軍のエンジェルに殺されたと
いやエンジェルが殺したとは話してないけどさ

そし所有者が死んだのは間接的とは言えロキの命令違反が原因なの
でロキは星霊界に戻る事を禁じられたと

なるほど

まあ一言言わせて貰おう

カレンの自業自得

さすがにそれによるロキへの処罰は納得できないな

だがそれを言ったところで俺には何も出来ない

この場をどうにかするのは今回はルーシイの仕事だろう

「まあ一言ぐらい星霊王になんか言ってやってもいいかもな」

俺は聞こえないように呟く

話し終えたロキが急に倒れた

「ロキ！」

ルーシイがロキの名を呼ぶ

「時間か・・・」

「な、何言ってるのよ!」

「カレンは僕のせいではかの星霊を呼び出せなかった・・・そんな状態で仕事に行って命を落とした・・・僕が殺したのと変わらない」

ロキはルーシィを見る

「最後に君のようなすばらしい星霊魔道士に会えてよかった・・・ありがとうルーシィ」

「待つて!!!!絶対助ける!諦めないで!!!!」

ルーシィが叫ぶ

ロキの身体はどんどん消えてゆく

「アンタは星霊界にさえ帰れたら生命力を回復出来るのよ!!絶対帰らせてあげるから!!!!」

「そんなことは出来ないよ・・・」

「だっておかしいじゃない!!!!そんなのカレンを殺した事にはならないよ!!!!事故じゃない!!!!」

ルーシィがロキを抱き叫ぶ

「開け!!!獅子宮の扉!!!ロキを星霊界に帰して!!!」

「ルーシィ・・・」

ロキがルーシイを止める

だがルーシイは止めようとしな

大量の魔力を使い星霊界の扉を開けようとする

ルーシイの体が星霊と同化し始めた

「やめてくれ！！これ以上僕に罪を与えないでくれ！！！！！！」

ロキが叫ぶ

「何が罪よ！！！！そんなのが星霊界のルールならあたしが変えてやるんだから！！！！」

ルーシイが叫んだ瞬間

滝の水、それだけじゃない

辺りの水全てが空へ上る

そして水が一箇所に集まり人の形を造る

そして

星霊王が現れた

「古き友、人間との盟約において我ら・・・鍵を持つ物ヲ殺める事を禁ズル」

星霊王は冷たく言い放つ

「直接でないにせよ間接的にこれを行ったレオ。貴様は星霊界に帰ることを禁ズル」

「ちよつと！！！そりゃあんまりでしょ！！！」

そつ星霊王に抗議したルーシィをロキが止めようとする

そついえば星霊王の鍵つて何色なんだろう

そして何宮・・・何座？まあなんだろう

『黒』

ふーん・・・つてまたか神

「古き友よ その法だけは変えられぬ」

「仲間の為に！アリエスの為に仕方なかった事じゃないの！！！」

「余も古き友の願いには胸を痛めるが・・・」

「古い友達なんかじゃない！！！！今日の前に居る友達のこと言ってるのよ！！！！ちゃんと聞きなさいヒゲオヤジ！！！！コレは不幸な事故でしょ！！！！無罪意外は認めないんだからね！！！！」

「もういいルーシィ！！僕は罪を償いたいんだ！！！！このまま消えていきたいんだ！！！！」

ロキが叫ぶ

ルーシイも叫ぶ

そして

「罪なんかじゃない！！仲間を思う気持ちは罪なんかじゃない！！」

自分の星霊を複数同時に出した

しかもその内5体が黄道十二門

スゲー・・・

俺は鍵もってねえから使えねえんだよ

だが星霊はすぐに消えた

一瞬とはいえ死ぬ危険もあるらしい

ロキがルーシイに駆け寄る

すると

「古き友にそこまで言われては、間違っているのは法かもしれぬな」と星霊王は呟く

そして

「同胞アリエスの為に罪を犯したレオ。そのレオを救おうとする古き友たち。その美しき絆に免じ、この件を例外とし。レオ・・・貴様に星霊界への帰還を許可スル」

ロキを免罪とした

「いいところあるじゃないヒゲオヤジ」

とルーシイが言つと星霊王は二カつと笑いロキに

罪を償いたいならルーシイの力になれ

と言ひ残し消えた

ロキもルーシイに礼を言い鍵を残して星霊界に帰つた

さて、俺もギルドに帰りますか・・・

・・・アレ

たち？

・・・気付かれてたか

さすが精霊王

「やるね・・・」

俺は小さな笑みを浮かべながらギルドへ帰る

翌日

「星霊だあ！！？」

とロキをじろじろ見渡しているナツが言う

「しかし気がつかんかったなあ」

「ちょっと待て！お前牛でも馬でもねえじゃねーか」

「ナツの知ってるバルゴだって人の姿だろ？」

「いやあいつはゴリラにもなれるんだぞ」

「そつえばそうだね」

「でもさナツ。サジタリウスって馬っぽいけど実際馬の被り物した

人だよな」

と俺が言つとナツが衝撃的という顔をしてそのあと納得した

「ロキは獅子宮の星霊よ」

とルーシイが言つとナツが獅子ー！ー！と言つて驚く

ハッピーは

「獅子つてアレ！？大人になった猫！ー！ー！」

といっている

「そうだね」

ロキイイイ！ー！肯定してどうするウウウウー！

まあ人間にとつては別でもライオンとかにとつては猫も同じ猫科で
同じ物つて思つてんのかね

ルーシイは違ーう！ー！って叫んでる

ハッピーは同じ猫科つてことで尊敬のまなざしを送っている

「つーかお前今までどおりで大丈夫なのか？」

「これからはそうは行かないね。ルーシイが所有者になってくれた
からね。ルーシイのピンチに颯爽と現れる白馬の王子さま役つてと
こかな」

そういつてルーシーを抱きかかえ

「そういうわけで二人の今後について話し合おうか」

とどこかへ行こうとする

まあルーシーに止められたが

ロキがルーシーに迫りルーシーは強制閉門をしようとする

するとロキがそれを静止しながらポケットから何かを取り出す

リゾートのチケット

どうやらくれるらしい

「エルザにもさつき渡しておいた。楽しんでおいで」

といって星霊界に戻った

まあ一件落着かねえ・・・

「貴様ら何をもたもたしている。置いていかれたいのか」

エルザは既に行く準備万端のようだった

「「「「気イ早エよ！！！」」」」

俺、ルーシー、グレイの3人で同時に突っ込む

で

やってきましたー海

アカネビーチというらしい

エルザとルーシィは普通にビキニ

俺はワンピース型の水着

精神的にちょっと辛いがコレしか無いようで

まあもう諦めついてんですけどね

神め・・・今度死んだら顔面に愚神礼賛叩き込んでやる・・・
シームレスパイアス

一瞬恐いよ！！という声が聞こえた気がするが多分気のせいだ

もう今日中か明日には楽園の塔に入るだろうしエーテリオン一回ジ
ヤマして死んで神ボコッてこよう

大嘘憑きがあれば死なんはずさ！！

グレイとナツが海に入ってメツチャ興奮している

「見るよこの水！！めっちゃ透明だぞ！！」

とナツ

「うおおっ！！スゲー！！」

といったグレイは海パンをはいていなかった

「海パンをはけええええええええええええ！！」

全力ツツコミ

グレイの後頭部に蹴り

「ぐばあ！！」

全裸で数メートル吹き飛び海に沈む

「海の藻屑になっちまえ」

と最後に言い残す

ナツは爆笑している

やっぱ海といえばスイカ割り

と言う訳で

「右右！」

「左！」

現在ルーシイが挑戦中

ちなみに俺、ナツ、グレイは3人とも同じことを考えているようで

「そこ！！」

ナツの声にルーシイが反応し棒を勢いよく振り下ろす

そして

「きゃあああああああごめんなさああああああああい」

ルーシイは見知らぬマツチヨなオッサンの頭に棒を叩きつけ切れた
オッサンに追い回されていた

数分後

「ヤッホー!!」

ノリノリでバナナボートに乗るルーシー

その後ろには

「じゅんじゅんめんなさい……」

瀕死のナツ

グレイも先ほど制裁を受け砂に埋められ気絶中

俺も先ほど制裁を受けたが別に問題ではない

ビーチバレー

玉が飛んで来たので思いつきりスパイクを決める

ナツが吹き飛んだ

玉は飛びそれをエルザが放つ

グレイが取りルーシーがトス

でスパイク

「へふばー!!」

またしてもナツに直撃

とこんな感じで遊びまくった

星霊王（後書き）

まあ一旦終了

次回は楽園の塔

じゃなくて番外編です

アンケートの期間はあと2日ありますんでよろしく願います
詳しくは前回）

番外編 クリスマスなんで禁書の2次小説の主人公交えてサンタのクリスマス

なんだコレ

なんとなく書いたものですがマジで駄文です

マジで批判覚悟で書きましたけど書いてめっちゃ損した気分

ただ書くと言った以上書かないとマズイかなと

まあとりあえずどーぞ

番外編 クリスマスなんで禁書の2次小説の主人公交えてサンタのクリスマス

妖精の尻尾のギルドにて

まだギルドは完成していない

そんな中一つの机に俺たちは集まっていた

ナツ、グレイ、エルザ、ルーシィ、なぜかミラさんとマスター

で

「誰だこいつ・・・」

と呟いたのはグレイ

「作者のもう一個の方の小説の主人公らしいよ？」

といったのは俺

「ふーん」

ルーシィ

で今一番騒いでいるのは

「何処だココはアアアアアアアアアアアア」

柴葉葉

作者が書いているもう一個の方の小説の主人公で俺を殺した神が俺を殺すちよつと前にやっちゃった奴らしい

『番外編なんで今回は思いっきりハツチャけちゃって』

というのが神とばふんが言った事

てなわけで

「クリスマスなんで禁書の2次小説の主人公交えてサンタのクリスマス以外の時の仕事でも考えてみよう大会」

「「なにそれ」「」

と言う訳で

「じゃあそれぞれっていこうか・・・まず俺ね」

俺は自分の意見を言う

「トナカイの肉をさばいて売っている」

「グロッ!」

柴葉が突っ込んだ

「この後まだやりたい事（というかそっちがメインらしい）あるらしいからどんどん行くよー」

んでルーシ

「えーっと・・・フィンランドにサンタクロース村があるらしいしそこで写真撮影してるんじゃない？有料で」

「そうやって生活費とプレゼント代を稼いでいると」

そしてそのままナツ

「サントって強えのか！？戦いテエ！！」

力子

俺は手元のスイッチを押す

すなわち

「アツ――――！！」

ナツが落とし穴に落ちていった

「じゃ次」

此木葉

「宝くじが当たるまで宝くじを買いあさってる」

「うわあ……嫌なサンタ」

「トナカイの肉捌くほうがよっぽど嫌だよ……」

次

グレイ

「営業マン？」

次

「多分大金持ちなんじゃないかな」

ミラさんの意見地味

「ひどくない！？」

次

「お尻が好きじゃあああああ」

マスターべろんべろんに酔っております

「『カチ』」

「アツ――――！！」

次

「あい」

カチ

ボシユウウ（ハッピーの背中にいつの間にかついていた垂進エンジンが発射する音）

じゃあなハッピー

「ひどいよー」

たんこぶ作って戻ってきた

番外編のギャグ補正はギルドが吹っ飛んでも死なないぜ

次

エルザ

「ギルドのマスターでもやってるんじゃないか？」

ふーん

赤い人とか？
サンタクロース

人類最強と被るな

さて

「これで全員言った事だしメインに入るぞー」

まあメインといってもくだらないことなんだけど

てかこれ正月にやるべきなんじゃ・・・

「第一回、ファルケン大会」

「『『『ファルケンってなんだああああああああ』』』」

柴葉以外の全員のツッコミ

「ファルケンというのは・・・」

柴葉が説明を始める

ファルケンは日本のカルタ遊びの起源となっていて中国発祥の遊戯である

その始まりは（長いので省略）

「絶対嘘だ・・・」

ルーシイがなぜかふてくされたように言う

「まあとりあえずやってみよう」

俺は懷に手をいれあるものを取り出す

「これみんなつけて」

出したのはバード

てか付け髭

それじゃ始めよう

「グリーセン」

俺と柴葉が同時に言う

やっぱり柴葉いなくても良かったかもな

「そりゃあんまりだ・・・」

「ぐ・・・グリーセン」

他のメンバーも言う

札をバラバラにして互いのバードを褒め合い

始まった

「とりあえず札読む・・・あ、いやによむのはミラさんお願いします」

「は・・・い？」

ミラさんが固まる

「によむってなに？」

「ファルケンでは札を読む事によむといいます」

ミラさんが札をにょんだらそれに相当する絵札をとって

という指示を出し

始まる

「春來たりて、響く、浮かれた、笑い声、全員、死ねばいいって
なにコレ!？」

ミラさんのツッコミとは珍しい

「ファルケンのリズムは六・三・四・五・四・五です」

「それ以前に歌アアアアアア」

このツッコミはルーシ

「なにこの歌!？」

「まあ細かい事は気にしない。ファルケン!!!!!」

俺は既に札を取った

「なっ!!!!いつの間に!!!!」

「クソ!話してると思って油断してた!!!!」

グレイとエルザはかなり本気でやっていたようで俺がいつの間にか
札を持っていたことに驚愕していた

「え、えーつと・・・とりあえず次読むね?」

「誰かが正解の札取つたら」A^ヤって言うてくださいね?」

「意味わかんないし・・・わかった」

やるんだ・・・

「とりあえず次読むね? 君の為に、書いた、手紙を、菜箸で、持たれた、辻ヒデキってだれええええええ!？」

ミラさんまたしてもツツコミ

珍しいこともあるもんだ

俺が呆れていると

「ファルケン!!!!」

誰かが札を取つたようだ

柴葉かと思ったら

「コレだな!？」

とエルザが一枚の札を見せる

セーラー服の女子が菜箸で手紙を持っているのとその後ろで落ち込んでいる男子の絵が描かれている

「J^ァA!!」

「やった!!」

「えーつと次」

ミラさん完全に呆れてる

エルザとグレイが予想外に本気であることに驚いているのだろうか

エルザ、グレイのところにオーラが見えた

「強くなるう、俺の、全てが、燃えている」

「意外といい歌もあるんだね」

と言ったのはルーシィ

「自宅が、燃えている」

「ってオイ!!」

突っ込んだのもルーシィ

「家家事じゃない!!」

「ファルケン!!!!!!!!!!」

取ったのは柴葉

「JA」

柴葉がガッツポーズをする

次

「力尽きた、虎が、最後に、守ったのは、小さな、兎の子」

瞬間ルーシーが感動したのか少しなみだ目になっている

「ファルゲン！！」

涙声で取った

「JA」

次

「その毛皮は、黒と、黄色の、縞模様、私は、悪兎」

「虎ああああああああああああ」

ルーシーが叫ぶ

「ファルケEEEEEEEEEEEE」

ショックだったのか札を一瞬で取り去った

早ッ！

しかも合ってるし

「次、告白して、やった、成功、付き合おう、カップル、死ねばいい」

「うわぁ・・・」

最早ルーシーは呆れている

ミラさんはもう慣れてきたのか楽しそうだ

まあ順応すれば楽しいからな

今度はヒュペリオンでも持ってこよう

「ファルケン！」

取ったのは俺

その後もファルケンは続けられた

「やればできる、今は、本気を、出していない、ただだ、辻ヒデキ」

「また辻ヒデキ!？」

とルーシーがツツコんだと同時に

「「ファルケン」」

エルザと柴葉が同時に札を叩く

同じ札だ

だが

「ナイン！！」

「何て！？」

「違っつていったの」

ちなみにエルザたちが取ったのは生徒指導室で怒られている辻ヒデキ

「ファルケン！！」

ルーシイがとった

そして

最後の一枚

「クソツタレ、今日で、終わる、夏休み、宿題、終わってない」

「「「「ファルケン！！！！！！」」」」

全員が一斉に札を取りにかかった

ルーシイが最初に札に触れそうだった

だが誰かの手によって弾かれる

次にエルザ

しかし全員が一斉に取りにかかったためグレイと頭をぶつけグレイ
気絶

エルザはのけぞった

後は俺と柴葉だけだったと思う

一気に取りにかかった

そして

「あい、ふあるけん」

取ったのは俺でもなく、柴葉でもない

「やっと一枚とれたー」

と喜んでいるのは

ハッピー

結局最後に取ったのはハッピーでした

ちなみに

結果

1位：柴葉、峻（同率）

3位：エルザ

4位：グレイ

5位：ルーシィ

6位：ハッピー

により手：ミラ

参加不能：ナツ、マスター（落とし穴に落とされた）

これで番外編終了

柴葉は終わったんで帰った

もう登場する事は無いだろう

グレイは結局次の日の朝まで気絶していた

まあみんな楽しそうだったし良かったでしょう

番外編 クリスマスなんで禁書の2次小説の主人公交えてサンタのクリスマスに

なんか色々すみません

書いててサンタの仕事なんて思いつかん

と言う訳で仕方ないので一部ネットで情報収集

そしてなんか短かったのでファルケン

スケートダンスに出てきたクソゲーシリーズの一つです

一部やはりネット収集で見つけたものもあります

勝手に使ってすみません

落とし穴の元ネタは多分かなりマイナー『藤村君メイツ』という漫画に出てくる氷室の・・・なんだろう

まあ必殺技？

とりあえず次回は本編『楽園の塔』に入ります

それじゃまた次回！

カジノで無双（前書き）

メリークリスマス

前回言い忘れてたのでココで

あと傾物語買いましたゝ

めっちゃテンションあがってるんでそのテンションに身を任せて書きました

それじゃどーぞ

カジノで無双

「ツモ！ 天和、四暗刻単騎、字一色、大四喜！！」

という俺が出したとんでもねえ役に

『オオオオオオオオオ』

と周りにいるギャラリーから歓声上がる

近くにいるグレイもあきれ果てて声が出ないようだ

俺たちは今地下にあるカジノにいる

ナツはルーレット、エルザとルーシィはトランプをやっているらしい

グレイはさっきまでスロットをやっていたのだがジュビアにたまたま出会いバーに行く途中ここの騒ぎを聞きつけてやってきたようだ

「オイオイ、あいつさっきから何回もやってんのに負けなしだぜ！
？」

「イカサマしてんじゃないやねえよな！！」

「こんなギャラリーがいんだぞ！？出来るわけがねえ」

「どんな運してんのよ・・・」

という声があちこちから聞こえる

俺の横には勝ち取った大金が詰まれ

俺と打っている3人は真っ白な灰となりトランクス1枚まで身包みを剥がされている

「まだやる？」

と3人に聞く

ちなみにコレで3回目

だが

「ざけんなあ！！勝ち逃げなんてさせつかよ！」

「次こそは勝ってテメエのみぐるみも剥いたらアアアアアアアアアアア」

などという返答のせいで中々ここから立ち去れない

これ以上やるとコイツラの人生が台無しになりそうだ

なのでさっきから何度もいい加減やめるか？と聞いてやってるのだが

先ほどのような勝ち逃げすんなー！！という発現が幾度と無く返されてくるので出るに出れないという

だが

「オイ・・・もういい加減やめようぜ？ぜってえ勝てねえよ・・・コレ・・・」

「ああ！？勝ち逃げを許すのかよ！？」

「これ以上やったらもう生きていけなくなっちまうよ・・・」

「うつ・・・そうだな・・・」

とさつき暴言吐いた二人以外のもう一人が説得してくれたおかげでなんとか終われそうだ

「そいじゃこれで終わりな」

「「「ああ・・・」」」

真っ白な灰になった3人は何処かへ消えていった

「ういつすグレイ、ジュビア」

「お前どんな運してんだよ・・・どういうイカサマやったんだ？」

「イカサマなんてしてねえよ。俺はサイコロ投げただけで全部同じ面向いたピラミッド造れるほど運がいいぞ？」

そう言っただけ俺はサイコロを6つ地面に投げる

全部同じ面を向いたピラミッドが出来た

これが異常の力です

自分でやって自分で吃驚

「・・・うわぁ・・・」

グレイとジュビアが呆れてる

まあイカサマはしたんだけどね

受信感度で相手の牌見たりして

あと普通にイカサマしたり

ギャラリーがいる中でイカサマなんて出来ない？馬鹿を言うな

俺に掛ければ楽勝だ

「そんでなんでこんなところにいるんだ？」

「ああ、こいつがなんか話しあるみてえだからさ」

といってジュビアを指差す

「ハイ！こんにちわ・・・」

とジュビアは挨拶した後

「あの、この間ありがとうございます」

と近くまでよってお礼を言ってきた

この間・・・

ああ

弁当か

「どいたしまして。そんじゃ俺行くわ」

「ああ」

グレイはまだ微妙に口が引きつっている

俺はとりあえずエルザたちのいる方へ行くことにした

「やほーエルザ、ルーシィ」

俺はポーカールをやっているエルザとルーシィに話しかける

「リョウ」

「どうだった？」

するとルーシィに麻雀の結果を聞かれた

「見りゃわかんだろ？」

というとルーシィの顔がグレイ同様引きつる

「どんな勝ち方したらそんななるの・・・」

「10戦連勝でツモ 天和、四暗刻単騎、字一色、大四喜とか言う役とか色々出したら」

「かわいそうに・・・」

恐らく俺と打っていた3人のことだろう

「エルザは？」

「フッフッフ、今日はついている」

と言ったので見てみると

『ロイヤルストレートフラッシュ』

すげ・・・

「ディーラー、チェンジだ」

するとディーラーの後ろから日焼けした褐色の肌の少年が出てきた

「今なら誰が相手でも負ける気はせんぞ」

「だね」

と言っているのだ

「俺となら？」

と聞いてみたら

エルザは俺の手元を見て

「勝てる気がせんぞ・・・」

「だね・・・」

という返答を帰した

「だったら特別なゲームを楽しまないか？賭けるものはコインじゃない」

すると褐色の少年がそう言ってトランプを5枚出す

見ると

『D』『E』『A』『T』『H』

という文字が書いてある

挑発してんのかこのクソ餓鬼

・・・って今は俺のほうガキじゃん！！

・・・なんだかコナン君になった気分だ・・・

エルザがトランプを投げた少年のほうを見る

「命、賭けてあそぼ。エルザ姉さん」

少年が禍々しい笑みを浮かべエルザに言う

「・・・シヨウ・・・」

エルザの顔が驚愕に染まった

「久しぶりだね、姉さん」

シヨウがエルザに言う

ルーシィは状況がまったくつかめていないようだ

そっぴや居たな～こんな奴

楽園の塔編はあまり見てなかったから

よく覚えてねえわ

「無事・・・だったのか？」

エルザがシヨウに問う

「無事？」

「あ、いや・・・」

とエルザが黙る

途端に辺りが一瞬で暗くなった

「なにコレ！？暗ッ！！」

「何が起きた！！！！」

「誰かが魔法使ったみたいだねえ・・・コレは闇刹那？」
するとだんだん辺りが明るくなってくる

「光が戻ってきた」

辺りが完全に明るくなる

そして見ると

シヨウがいた場所には誰もいなかった

「こっちだよ姉さん」

声が聞こえるほうを見る

そこにはシヨウが立っていてトランプが舞っていた

中に人が閉じ込められている

「不思議？」

エルザの様子を見てシヨウが問う

「俺も魔法が使えるようになったんだよ」

「魔法！？・・・お前一体・・・」

シヨウが笑う

するとまた背後から声が聞こえる

「みゃあ」

猫？

ああ、ミリアーナか

って確かこの後・・・

気付いたときにはもう遅い

後ろから何かに引っ張られたと思ったらロープに拘束されてた

「ルーシィー！リヨウー！！」

エルザが叫ぶ

「みゃあ。元氣最強？」

「最悪」

「答えるの！？」

返答したらルーシイに突っ込まれた

「みゃあ」

「ミリアーナ！？」

エルザがミリアーナの名を呼ぶ

「お前も魔法・・・を！？」

「久しぶり〜エルちゃん」

「何をしている！？ルーシイとリヨウは私の仲間だ！！」

「みゃあ？仲間？」

「僕たちだって仲間だったでしょ？姉さん」

エルザが困惑する

「姉さんが僕たちを裏切るまではね」

なんか疲れた

ロープ切れるかなー

少し力を入れる

すると

「みゃあ」

余計にきつく絞められた

「き、緊縛女子中学生！」

つい人間シリーズネタ

「アンタなんでそんな平然としてるのよ」

くだらないことしているとなんか四角いのが現れた

ああ六魔將軍のホットアイの弟

ウォーリーだっけ？

ネタバレとかそんなん知らん

「その声はウォーリー？」

受信感度でエルザの思考を読む

「ぶっ!!」

つい吹いてしまった

だってエルザの頭に浮かんでるウォーリーの顔ぜんぜん四角くないんだもの

なにがあつたらここまで変われるのだろうか

「気付かねえのも無理はねえ。狂犬ウォーリーと呼ばれてたあの頃に比べて俺も‘まる’になったしな」

「むしろ四角くなってんじゃねえかああああ」

つい突っ込んでしまった

「みゃあ」

さらに絞めがつよくなった

って

「痛たたたたたたたた!! ナイフ刺さった!! ナイフ刺さった!!」

服に仕込んでいるナイフと剣が刺さった

痛っ!!

「ちょ! 解いて!! ほどいてください!!」

俺はちょっと本気で頼む

「みゃあ」

といってミリアーナは首を振る

「ナイフ刺さったって・・・」

ルーシイがこっちを見て呆れる

「あと剣と狼牙棒のハリと鎖鎌が・・・」

「どこにそんなもん入ってんのよ!!」

「服」

とふざけているとゴツイのがやってきた

シモンだと

するとルーシイがバランスを崩したのか地面に倒れる

「エルザ・・・こいつら何なの!? 姉さんってどういうこと!?!」

「本当の弟じゃない・・・かつての仲間たちだ」

「仲間って・・・エルザは幼い頃から妖精の尻尾にいたんでしょ!」
「?」

「それ以前ということだ」

エルザはシヨウたちの方を見る

「お前たちがなぜここに・・・ルーシィとリヨウを解放してくれ」

「あんたを連れ戻しにサ」

「みゃあ」

「・・・」

「帰ろう姉さん」

「いう事聞いてくれねえとヨオ」

とウォーリーが俺とルーシィに銃を向ける

「ひいいい!!」

ルーシィが悲鳴を上げる

「よ、よせ!!頼む!やめてくれ!!」

とエルザが叫んだ瞬間

エルザの背後に銃が現れエルザが撃たれた

「睡眠弾だぜ」

倒れたエルザをシモンが支える

「目標確保。帰還しよう」

「ちょっと！エルザをどこに連れてくのよ！」

「みゃあ」

暴れるルーシイをミリアーナが縄をさらに強くする事で黙らせる

「あと5分くらいで死んじやうよゝ君いゝ」

「そっぴゃミリアーナ。君にプレゼントだぜ」

とウォーリーが差し出したのは

ハッピーだ

「姉さん・・・帰ってきてくれるんだね・・・楽園の塔へ。きつと
ジェラルルも喜ぶよ」

シヨウが呟く

そのまま奴らは去って行った

縄どーしよ

意外と固い

引きちぎるにはキッツイかなゝ

「だか・・・ら・・・アンタなんでそんな平然としてんのよ・・・」

「ルーシイ無理してしゃべんないほうがいいよ？」

あ、そーだ

ラフレシアでなんとか出来んじゃないね？

あーでも全力だしや触れんでも腐らせられるけど周りも巻き込むからな

そうだ

「ルーシイ。ちょっとそっち行つて縄とくな？」

「は？」

「よつと」

俺は無理に壁を蹴る

今ので足を捻挫した

大嘘憑きで治す

そしてルーシイのところにたどり着き

ルーシイの縄に手を触れる

するとルーシイの縄が腐って落ちた

「やった！解放された！！」

「ルーシイこつちも頼んだ。ポケットにナイフ入ってっから」

「分かった」

ルーシイが俺のスカートのポケットからナイフを取り出す

そしてそのままロープを切って解放する

「あー痛かった・・・」

「そういえばずっとナイフ刺さってたんだっけ・・・」

「死ぬかと思った」

とりあえずトランプに閉じ込められた人を解放する

「助かったー！」

「ありがとう！」

トランプになった人の中にはさっきトランクス一枚にされた奴もいた

「助かったぜ・・・だが次は負けん！」

「次は絶対勝ってやる！！」

など言ってきたあとどこかへ走り去っていった

「さて、グレイたちでも探してきますか」

俺とルーシィはグレイたちを探しにその場を後にした

カジノで無双（後書き）

一旦しゅーりょー

カジノで無双つつつても無双したのは最初の数行だけですけどね

ツモ 天和、四暗刻単騎、字一色、大四喜ってオイ

普通にありえない役だそうです

まあやったことない俺には分かんんですが

やりたかっただけです

それじゃまた次回！

楽園の塔（前書き）

コンビニにジャンプ買いに行ったら先週合併号だった・・・

うん。ショック

まあ悩んでも仕方ない。ポジティブに考えよう

今月250円浮いたぜ！と考えるんだ

この250円何に使うかね

と言う訳でこういうことに関してはポジティブです

それじゃどーぞ

峻「何がしたかったんだ・・・」

傾物語読了

峻「なぜここで言う・・・」

楽園の塔

グレイとナツを探しているとなんか死んでいるグレイが見つかった

「グレイ！・・・嘘でしょ！」

ルーシイが倒れているグレイを抱きかかえる

すると

パリーンという音を立ててグレイが崩れた

氷像だったようだ

てか色とかどーやってつけんだろ・・・

ルーシイが悲鳴を上げる

「安心してください」

声が聞こえた

見るとジュビアがいた

「あ・・・あんたは！？」

「あ、ジュビア」

ルーシイが驚いたような声を上げる

俺はやっぱり冷静だった

「 그레이様はジュビアの中にいました」

「な・・・中・・・」

ルーシーがドン引きしている

「あなたではなく私の中です」

「う、うん、そうだね・・・」

ジュビアがルーシーに詰め寄る

完全にライバル視されてんなールーシー

まあ 그레이にとつちや結構好みとか言ってたし

「言ってねえよ・・・」

地の文を読むんじゃない

言っでなくとも思ってるくせに

「オイ・・・誰だ語り部やってんの・・・」

『バレたか』

いつの間にか神がやっていた

「た・く・」

「そっぴやナツやエルザは？」

グレイがルーシーに聞く

「ナツは分かんない．．．エルザは．．．」

ルーシイが質問に答えようとするとルーレットのあるところから炎が上がる

驚いてそつちを向くとナツがいた

「痛工——！！！！！」

「ナツ!!!」

ルーシがナツを呼ぶ

「普通口の中に鉛玉なんかぶち込むかよ!!!ア!？」

俺ならばち込むな（笑）

(だから語り部やんなって)

またしても神がやっていた

「イテエだろ！！下手すりゃ大怪我だぞ！！」

「普通はアウトだけだな」

俺は冷静に突っ込む

ナツは切れてどっかへ走り去っていった

「追うぞ!!」

グレイが叫ぶ

「追うって言っても何処にいるのか」

「あいつの鼻のよさは獣以上なんだよ!!!!」

となんだかんだでナツを追うことになった

で

「どこだよここはよぉ!!!!」

グレイが叫ぶ

あの後ナツを追って捕まえて船に乗ってナツの鼻を頼りに船を漕いでいるのだが

どうやら迷ったらしい

「ねえ・・・ナツ、本当にこっちであってるの？」

ルーシイがナツに聞くがナツは乗り物酔いで既に当てにならない

「いつそナツを海に落として泳がせながら道案内させるか・・・」

俺は小さく呟く

でもさすがにナツが可哀想（笑）なんで却下

「くそっ！！俺たちがのされてる間にエルザとハッピーが連れてかれたなんてよオ！！」

グレイは随分怒っているようで

「落ちて着けグレイ。船が余計に揺れる。ナツの鼻が余計に駄目になるぞ」

とりあえず落ち着ける

するとグレイはその場に座った

そのまま船を漕ぐ

すると遠くに塔が見えた

「あ、塔だ」

アレが樂園の塔か・・・

「よし」

俺はロケットランチャーを構え・・・

「よしじゃねえよ何してんだお前は」

グレイに頭を叩かれる

「てかどこからそんなもん出したんだよ・・・換装した様子も無かったし」

「服の中に隠してる」

俺は袖から大量の武器を出し見せる

「どこにそんな隠すスペースがあるんだよ・・・」

「暗鬼使いを馬鹿にしちゃいけないよ」

「あつそ・・・」

グレイは完全に呆れている

とりあえずロケットランチャーをしまう

「まあ見えたことだしさっさと上陸しよう」

と云って取り出したのは竹とんぼ

スクリー
竹とんぼに蹴流と書き船の後ろにつける

もちろん字が消えないように書いた部分にカバーを取り付けた

カバーって何？という質問は一切受け付けない

スクリーンが回り船のスピードが上がる

「おええええええええええええええええ」

ナツがついに海へ向かって吐いた

「うわっ！汚ッ！！」

そしてそのまま

[illegible]

「ぎゃあああああああああああ」

陸に思いつきり乗り上げた

数人の見張りがこっちへ近づいてくる

「隠れるぞ!!」

ナツが動けない状況で戦うのは多少分が悪いので近くの岩影に隠れた

「なんだこのボートは」

「侵入者か？」

「流れ着いたんじゃない？」

「念の為此の辺探すか」

と見張りが騒ぐ

見張りが俺たちを探そうと散り散りになるが運良くこっちへは来なかった

「まあ時間の問題か・・・」

「お前が余計なことするからだろうが!!」

「いつそ見張り全部やっちゃわない？」

俺がそういうと

「駄目。エルザとハッピーが捕まってるし・・・下手したらエルザたちが危険になるのよ？」

とルーシィに止められた

「うーむ・・・」

俺が唸っていると海からジュビアが顔を出す

「水中から塔の地下への抜け道を見つけました」

だそうだ

「水中を十分ほど進みますが息は平気でしょうか」

「十分ぐれえなんともねえよ」

「だな」

「時間単位で止められる」

とナツ、グレイ、俺の順で言うと

「無理に決まってんでしょ!!」

とルーシィのツツコミが入る

「コレを被ってください」

といってジュビアが出したのは頭より一回り大きい水球

中に酸素が閉じ込められているらしい

と言う訳でそれを被っていくことにした

十分後

まずはルーシィと俺、ジュビアがあがる

それに続いてグレイとナツも上がって来た

「便利ねコレ、マヌケだけど」

ルーシィが水球を手元に浮かせて言う

間抜けは余計じゃね？

「ルーシィさんだけちょっと小さめに作ったのによく息が続きましたね」

とジュビア

てかルーシィはいつの間に服を脱いだのだろう

まあいいか

「ここがああ塔の地下か？」

グレイが聞く

「いやんなこと聞かれても・・・ねえ？」

ジュビアに振る

「ハイ」

おお

まさかの即答

すると

「なんだ貴様らはー！！」

と上から叫び声が聞こえる

見張りが居たか

俺は左右の手に皮手袋をはめる

そして左手を少し振った

「105人つてどこか・・・」

「一瞬で数えたのかお前・・・」

「『キョクゲンシ』って技ね」

「極限？」

「まあ話してる場合じゃないな」

「だな」

ナツが炎を灯した拳で柱を一本殴る

「妖精の尻尾だバカヤロウ」

敵の一人がルーシィに切りかかる

ルーシィはうまくかわしキャンサーを呼び出した

「久しぶりエビ!!!」

久しぶりってかこの小説内じゃ初めてな気がする

気のせいかな？

俺は右手を振る

すると敵の数人が動きを止める

「なっ!!!なんだコレは!!!」

「一歩でも動けばその場で輪切りだ」

もう一度右手を振りさらに数十人の動きを止めた

「殺しはしないけどちょっと寝ててもらう」

俺は右手を軽く動かす

1分ほどで動きを止めていた敵が一斉に倒れた

他もどんどん倒しているようで

10分もしないうちに全滅させた

「さて、ここは終わったか」

105人

あっという間だったな

「やっぱ1対多数には曲弦系が使えるわ」

完成の副産物

みんなは勘違いしているかもしれないが完成というのは何も他人の魔法や異常を十全に使いこなす事が出来るだけではない

何でも出来るのだ

やり方さえ知っていれば

なので神に曲弦系やら操想術やら空間製作やらなにやらのやり方の知識も貰った

意図せず

神のサービスだそうで

「まあそれでも次あったら殴るけど」

決定事項

とかなんとか考えていると天井が開きはしごが降りてきた

「上へ来いつてか？」

俺たちははしごを上る

「四角――――！！！！どこだ――――
――！！！！」

上り終わるなりナツが騒ぐ

四角というのはナツの口に鉛玉をぶち込んだやつらしい

「騒ぐなつるさい」

ナツの後頭部を蹴る

「阿部氏！！なにすんだー！！」

「誰だよ阿部氏って・・・」

どうやら作者の誤字のようだ

あべしっ！ってやらせたつもりなのだろうか

さっきの扉は誰かが開けたのではなく魔法での遠隔操作だったようで

とつくに俺たちの存在は気付かれている

つまり

「爆弾設置しとこつ」

いくら暴れてももう問題ないと・・・

「だから何してんだお前は」

그레이に頭を蹴られた

「いざというときに吹っ飛ばそうかと」

「いざってなんだいざって・・・」

とかやっていると

「まあまあ」

とルーシィが割って入ってくる

「てかお前なんだその服」

ルーシィに聞く

「星霊界の服！ぬれたままの服着てんのも気持ち悪いしさつきついでにキャンサーに頼んだの」

似合ってんのは分かってんのよと付け加えてそう答えるルーシィ

「水になれるジュビアはおいといて、あんたらよくぬれたままの服着てられるわね」

「こうすりやすぐ乾く」

ナツは自分で炎を纏い

グレイはその炎の熱で乾かす

俺は大嘘憑き

「そんな近くに乾燥機が」

なんてやり取りをしていると奥から大量の人がこっちへ向かってきた

「居たぞー！！侵入者だー！！」

するとナツが臨戦態勢に入る

俺も手袋をはめると

敵の一人が悲鳴を上げて倒れた

「「!?!」」

他の奴らもどんどん倒れていく

立っていたのは

「エルザ!?!」

「良かった!?!無事だったんだね!?!」

「か・・・かつこいい」

グレイ、ルーシィ、ジュビアの順

「お・・・お前たちがなぜここに!」

エルザがこっちを見て動揺しながら問う

「なぜもなくそめえんだよ!?!なめられたままひっこんでたら妖精の尻尾の名折れだろ!?!あんの四角だけは許しておけね!?!」

ナツが騒ぐ

するとエルザがジュビアに気付いたようだ

ジュビアが一歩後ずさる

「あの・・・ジュビアはその・・・」

「帰れ」

エルザがジュビアの言葉を遮って言い放つ

「ここはお前たちの来る場所ではない」

エルザは俺たちを巻き込ませたくないようだ

「ハッピーまで捕まってるんだ！！このまま戻るわけにはいかなー
！」

「ハッピーが？まさかミリアーナ・・・」

「そいつはどこだー！！」

ナツがエルザに詰め寄る

「さ・・・さあな」

しらばつくれたのか本当に知らないのか

まあいいや

「よし分かったー！！」

ナツが叫ぶ

「何がわかったんだよー！！」

グレイが困惑している

「ハッピーが待ってるってことだ!!」

何もわかってなくね？

ナツはそのまま走り去って行つた

「オイオイ・・・」

「あの馬鹿！また勝手に・・・」

「私たちも追いかけてよ!!」

「駄目だ。帰れ」

俺たちがナツを追おうとするとエルザが剣で前をふさぐ

「ミリアーナは無類の愛猫家だ。ハッピーに危害を加えるとは思えん。ナツとハッピーは私が責任を持って連れ帰る。お前たちはすぐにここを離れる」

エルザはどうしても俺たちを帰らせたいうた

「そんなの出来るわけない！エルザも一緒じゃなきゃ嫌だよ！」

ルーシーが叫ぶ

「コレは私の問題だ。お前たちを巻き込みたくない」

「もう十分巻き込まれてんだけど」

俺はエルザに言う

「エルザ・・・この塔は何？ジェラールって誰なの？」

ルーシイが聞くがエルザは答えない

「あいつらエルザの昔の仲間って言うってたよね。でもあたしたちは今の仲間。どんな時でもエルザの味方なんだよ？」

「帰れ・・・」

「らしくねーなエルザさんよお。いつも見てーに四の五の言わずついて来いって言えばいいじゃんよ。オレたちは力を貸す。お前にだつてたまにはこええと思うときがあってもいいじゃないか」

エルザの恐いものか・・・想像できねえ

エルザがこつちを向く

左目が涙に濡れていた

グレイがなぜかときめく

エルザが涙を拭いて言った

「この戦い・・・勝とうが負けようが私は表の世界から姿を消す事になる」

「え？」

「どういうこと？」

「コレは抗う事の出来ない未来。だから・・・わたしが存在しているうちに話しておこう」

エルザが自分の過去を話し始めた

Rシステムのこと

幼い頃、自分が昔これの建設にあたっていたこと

その時脱走しようとして捕まり左目を失った事

ジェラルルのこと

そして自由の為に、ジェラルルの為に戦ったこと

「私たちは自由のため・・・ジェラルルを救うために立ち上がった・
・あの頃のジェラルルはみんなのリーダーで正義感が強くて、私の憧れだった・
・しかしあるときを境にジェラルルは別人のように変わってしまった・
・もし人を悪と呼べるなら、私はジェラルルをそう呼ぶだろう」

その後も続きが語られる

反乱の最中、敵のほうから魔法兵が出てきてシモンが大怪我をし、世話になった元妖精の尻尾のロブおじいちゃんという人がやられた

こと

妖精の尻尾に入ったのもロブおじいちゃんがいたからだそうだ

魔法を覚えたのもその時

そしてジェラルルを助け出すことは出来たがそのときのジェラルルはゼレフによって完全に変わってしまったらしい

その時にジェラルルはエルザだけを外の世界に出し二度と楽園の塔に近づくなという事を言われた

シヨウたちを人質にされているので今まで近づけなかったようだ

ハイ過去話終了

「私は・・・ジェラルルと戦うんだ」

エルザは涙を流しながら最後にそう呟いた

楽園の塔（後書き）

どうしてこうなった

後半主人公完全に空気

ほとんど原作どおり

ほんとすみません

次回は出番あります

いや今回もしゃべんなかったただけであっただけでも

とりあえずすみません

今週中に楽園の塔編終わらせられたらいいなと思ってます

そしたらしばらく休みます

年末くらい休ませてー

それじゃまた次回

三羽鴉（前書き）

更新しましたゝ

つか前回のあの終わらせ方はよくなかったような

この話は基本主人公視点でそれ以外の視点はやりません

特に原作の過去編などは主人公を介入させる事が出来ないので

なので前回の最後に少し追加しました

すみません

それじゃどーぞ

三羽鴉

エルザが自分の過去を話し終え最初に口を開いたのはグレイだった

「ちょっと待てよエルザ・・・話の中に出てきたゼレフって・・・」

「ああ・・・魔法界の歴史上最凶最悪と言われた伝説の黒魔道士」

「そーいやララバイもそいつが造ったんだっけ」

ゼレフ書の悪魔とか言ってたな

久々に喋った気がする

「それだけじゃない・・・恐らくあのデリオラもゼレフ書の悪魔の一体だ」

その言葉にグレイが動揺する

「ゼレフとはあれほどの恐ろしい魔物を造り出すことが出来るほどの魔力を持っていた」

魔法ってそんなものまで造れんのか

・・・俺でも出来るか・・・？

まあやらんけども

「ジェラールはそのゼレフを復活させようとしてるってことですか」

「動機は分からんがな・・・シヨウ・・・かつての仲間の話ではゼレフ復活の暁には樂園にて支配者になれるとかどうとか・・・」

「ゼレフ復活させたら樂園どころか地獄になるんじゃない・・・」

俺が半ば呆れ気味に呟く

「確かに・・・」

グレイが頷く

「そういえばかつての仲間たちのことってどうしても腑に落ちないんだけど・・・あいつらはエルザを裏切り者って言ってたけど裏切ったのはジェラルルじゃないの？」

「私が樂園の塔を追い出された後ジェラルルに何かを吹き込まれたんだろうな・・・しかし私は8年も彼らを放置した。裏切った事には変わりはない」

「でもそれはジェラルルに仲間の命を脅されてたから近づけなかったんじゃない！！それなのにあいつら・・・」

「もういいんだルーシィ。私がジェラルルを倒せば全てが終わる」

エルザはいつの間にか何かを決心したような表情になっていた

というか最初からそのつもりだったんだろう

一緒に死ぬつもりだったんだろう

・・・違うか

でなきゃナツとハッピーは自分が責任をもって連れ帰るとか言うはずないし

でもえーつと

畜生・・・受信感度でも何も読めねえ・・・

エルザめ・・・完全に心を固めてやがる

俺に心中を読ませないように

心配をかけさせないように

すると後ろから足音が聞こえた

振り向くとそこにはショウがこっちへ向かって来ていた

「姉さん」

ショウが立ち止まり

「その話・・・どういうことだよ・・・？」

とエルザに問う

「ショウ・・・」

「そんな与太話で仲間の同情をひくつもりなのか！！ふざけるな！！真実は全然違う！！八年前、姉さんは俺たちの船に爆弾を仕掛けて一人で逃げたんじゃないか！！ジェラルが姉さんの裏切りに気付かなかつたら全員爆発で死んでたんだぞ！！ジェラルは言った！！コレが魔法を正しい形で習得できなかったものの末路だ！！姉さんは魔法の力によってしまつて俺たちのような過去を全て捨て去ろうとしてるんだと！！」

「船を壊してどうやってエルザは逃げたんだ？船はそれ一隻だけじゃないのか？」

俺はショウに聞く

「ジェラル드가……言った？」

グレイが聞く

「あなたの知ってるエルザはそんなことする人だったのかな？」

ルーシィが問う

ショウは動揺を隠せないでいる

だが俺たちに向かって叫んだ

「お前たちに何が分かる！！俺たちのこと何も知らないくせに！！俺にはジェラルの言葉だけだ救いだっただから！！だから8年もかけてこの塔を完成させた！！ジェラルの為に！！」

叫
び

そして

「その全てが・・・嘘だった？」

小さく呟いた

「正しいのは姉さんで、間違ってるのはジェラルルだと言っのか！
！！？」

「そうだ」

シヨウが叫ぶと声が聞こえた

そこに居たのは

「シモン！？」

グレイがシモンに向かっていこうとする

それをジュビアが止めた

どうやらシモンはグレイを氷の身代わりだと知っていて攻撃したよ
うだ

暗闇の術者があたりを見えてない訳が無い

「ジュビアがここに来たのはその真意を確かめるためでもあったんです」

「さすがは噂に名高いファントムのエレメント4」

シモンがジュービアの言葉を肯定する

「だれも殺す気はなかった。ショウたちの目を欺くために気絶させるつもりだったが凍りならもつと派手に死体を演出できると思ったんだ」

「俺たちの目を欺くだと!？」

ショウが動揺する

「おまえもウォーリーもミリアーナもみんなジェラルに騙されているんだ。機が熟すまで・・・俺も騙されているフリをした」

「シモン・・・お前・・・」

「俺は初めからエルザを信じてる。8年間ずっとな」

シモンがテレながら言う

「会えて嬉しいよエルザ。心から」

「シモン」

そう言って二人が抱き合う

アツアツじゃないですか

できてるw

ルーシーは微笑ましそうに笑ってる

ちなみに俺は腹を抱えて堪えてる

「なんで・・・みんなそこまで姉さんを信じられる・・・なんで・・・
なんで俺は姉さんを信じられなかったんだ」

シヨウが叫びながら地面を叩く

「何が真実なんだ！！俺はなにを信じればいいんだ！！！！」

エルザがそれを見てしゃがみシヨウに話しかける

「今すぐに全てを受け入れるのは難しいだろう。だがコレだけは言わせてくれ。私は8年間お前たちのことを忘れたことは一度もない」

エルザがシヨウの頭を抱く

「何もできなかった・・・私は・・・とても弱くて・・・すまなかった・・・」

「だが今なら出来る。そうだろう？」

シモンの問いにエルザは力強くうなづく

「ずっとこのときを待っていたんだ。強大な魔道士がここに集うこの時を」

「強大な魔道士？」

あたしもかしら・・・とルーシィは呟く

「ジェラールと戦うんだ。俺たちの力を合わせて。まずは火竜とウオーリーたちが激突するのを防がねば。ジェラールと戦うにはあの男の力が絶対に必要なのだ。火竜のナツ」

てなわけで

現在ナツを追って階段を全力疾走中

シモンがウオーリーたちと連絡を取ろうとする

だがどうやら通信を遮断されているらしくつながらないようだ

「なああいつ本当に信用していいのか？確かに俺たちを殺そうとしなかったのは認めるが・・・あの時ナツとルーシィは死んでもおかしくねえ状況だった」

「俺は!？」

「お前は殺しても死なないような気がする・・・」

「バレたか」

「マジで死なねえのかよ!!」

「大嘘憑きという能力は現実を嘘で完全に塗りつぶします」

どんなことでもなかった事にする

さっきのが聞こえていたのかシモンが呟く

「言い訳をするつもりは無い・・・あの程度で死んでしまうような魔道士ならば到底ジェラルとは戦えない。それに俺には確信があった。ナツは死なない」

「あの・・・あたしは？」

「お前たちはナツの本当の力に気付いてないんだ。ナツに真のドラゴンの力が宿るとき、邪悪は滅びゆく」

「てかRシステム止めるならいつそ塔ごと吹き飛ばせばいいんじゃない？爆弾ならいくらでもあるぞ」

といって俺は爆弾魔水晶を出す

「楽園の塔を吹き飛ばしたところでジェラルは止まらないだろう・・・また他の方法でゼレフを蘇らせようとする」

俺とか体よく利用されそうだ

大嘘憑きならゼレフを蘇らせることも不可能じゃないだろうし

「ふーん・・・じゃあお前はジェラルを殺せと言ってるのか？」

「ああ」

俺の問いにシモンはまったく迷わずに返答した

「却下」

俺は言う

「なっ！！無理だ！！ジェラルルを止めるにはもうそうするしか・・」

「お前は昔の仲間を殺せんのかよ。ジェラルルがああなったのはゼレフが原因だろ？ならまだ間に合う」

「間に合うわけが無い！！」

「ばっきやるー、俺には某学園の生徒会長バケモノの能力がついてんだぞ？他人を改心させるくらいじゃないっつーの」

「・・・ぼ・・・某生徒会長？」

黒神めだかの真骨頂だっけ？

なんとかなるさ

やってやるっじゃん

あいつも昔は仲間思いのやさしい少年だったのだろう

なにか重大な理由があって道を踏み外したに違いない

安心しろ俺が更正させてやる

昔の仲間思いの人格をさらに強化して仲間の事しか考えられないようにしてやる

矯正してやる、強制してやる、改善してやる、改造してやる

二度とゼレフなんてものを考えられないようにしてやる

・・・こんな感じだろうか・・・

なんか違うなー

「出来るとは思えないな」

「やってやるつての。理解して分解して再構築してやるよ」

悪意を対価に善意を入れてやる

等価交換だ

つてこれ錬金術じゃん

まあ似たようなもんか

他人の人格を構築するようなものだし

ネウロがジュニユインにしたみたいなのもいけるか・・・

手段を奪って調教

あーどーしよっかねー

またアンケートみたいな取るか・・・

いやそんなことしてもアンケートに票が入るわけないし

余計に困るわ

「うーむ・・・あいつの幻想をぶち壊してみるのもいいか・・・？」

「なにを悩んでるんだお前は・・・」

シモンが話しかけてきた

「いやどーやって更正させっかねーと」

ネウ口流の調教、上条さん流の説教、めだか流の説得

上条さんだけさん付け

「どれがいいと思う」

「いや上条さんもネウ口もめだかも俺は知らん」

「ハッハッハ」

「いやハッハッハじゃなくて・・・」

とかやっている壁やら天井やらに突然口が出てきた

『ようこそ皆さん。楽園の塔へ』

「うわ・・・気持ち悪!!」

「なんだこの口は!!」

「しゃ、しゃべりましたよ!!」

俺とグレイとジュビアがビビる

「ジェラルルだ。塔全体に聞こえるように話している」

「塔全体にこの口が・・・」

想像したのかルーシイが気持ち悪そうな顔をしている

唇が喋る

この口はジェラルルと繋がってるのだろうか

この中に食べ物入れたらどうなるのだろう

俺は懐からブレイズ・16ミリオン・リザーブという細かい粒の入った瓶を取り出す

世界一辛い調味料(?)

唐辛子の辛さを測る基準にスコヴィル値と言うものがある

確かハバネロが10万から35万

さらに辛いジヨロキアが100万

ブレアズ16ミリオンリザーブ（以下ブレアズ）が

1600万

「やってみよう」

ジェラルルの話なんてすでにこれっぽっちも聞いていない

ぶち込もうとすると突然シヨウがトランプの中にエルザを閉じ込めた

「エルザ！！」

「シヨウ！！お前何を！！！」

俺はぶち込もうとするのをやめてブレアズをしまう

コレをやるのは梟かヴァリタスにしよう（笑）

「姉さんには誰にも指一本触れさせない・・・ジェラルルはこの俺が倒す！」

そう宣言してシヨウが何処かへ走り去ろうとするので

「待てーーーー！！！」

催涙スプレー

さっきのブレアスだと失明の可能性が高いのでやめる

ちなみに食べただけでショック死する事もあるらしい

怖い・・・

まあそれをジェラルルの口にぶち込もうとしてたわけだが・・・

さっき更正させると言った傍から

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あああ」

シヨウが悲鳴を上げる

シヨウが落としたトランプからエルザを引っ張り出し

「勝手な行動は許さん」

と一言言う

ったく

あのまま行ったらジェラルルに殺されてたかも知れないぜ？

「デメエ・・・何すんだ・・・」

シヨウがこつちを睨む

「お前な、自分がジェラルルに勝てると思ってんのか？思い上がる

な、頭を冷やせ。さっきのことでもいつまでも混乱してん
じゃねえよ」

俺はシヨウに言い放つ

「リヨウの言うとおりだ。少し頭を冷やせ」

シモンが横から言い放つ

「さて、とりあえずナツを探しに行こう。ジュビアとルーシイ、グ
レイとシモンは二手に別れてナツを探しに行ってくれ、シヨウは少
し頭を冷やせ。俺とエルザで待っててやるから」

「なんでお前が仕切ってたんだよ・・・」

グレイが呆れ気味に言う

この組み合わせだとさっきのブレアズが使えないけど（まあ斑鳩に
使えばいいんだけど女性に使うのもなー）

原作どおりに進めるなら一番いい組み合わせだ

「まあいいか・・・分かった。俺とシモンはあっちでナツを探す」

と言う訳で一回ここで別れることにした

ジュビアはグレイと行きたかったのか不満そうだ

グレイ組とルーシイ組を見送った後、俺は少し考える

どうやってジェラルルを改心させるか

「エルザ、ジェラルルをどうやって改心させるか迷ってたんだけどどーすりゃいいと思う？」

「・・・はい？」

エルザが目点を点にして口を丸くして呆れている

「いやいや、いつそ異常使って洗脳するか・・・そーいや記憶消すクスリがあつたような・・・」

やり方がどんどん凶悪になっていく

「待て、お前はジェラルルを改心させられるとも思っているのか」

「思ってるから言ってるじゃん。お前は聞いてなかったかもしれないが俺は某学園の生徒会長バケモノの能力持ってた。他人を改心させるくらいわけねえっての」

それにと続ける

「お前だつてジェラルルをまだ救うつもりでいたんだろ？手伝つてやんよ」

「・・・ああ」

エルザがうなずく

「さて、そろそろ行きますか、ジェラルルの所へ。シヨウ、頭冷や

したか？」

「ああ」

シヨウの返事にはさっきのようなブレは無く力強い返事だった

すでに催涙スプレ－の痛みからは脱している

「うん、いい返事だ」

さて、反撃開始と行きますか

三羽鴉（後書き）

次回VS斑鳩

出来たらVSジェラルとなります

多分、明日か明後日には更新出来るかと思っています

あと以前やった番外編ですが

またスケツトダンスネタで思いついてしまいました

二回連続でスケツトダンスネタってどうなんだろうと思ったんですがその内やるとしています

タイトルはリトルフェアリーはご機嫌ナナメ（仮）みたいな感じだと思っています

まあ大体予想つくでしょう

それじゃまた次回！

エーテリオン

「迷った・・・」

ハイ、いつも通り見事に迷いました

前回のファントムの時も見事に道に迷ったけども・・・

「エルザ、俺ってもしかして方向音痴？」

「だろうな」

「うん」

シヨウまで頷きやがった・・・

「いつそ壁ぶつ壊して翼で上まで行きますか」
エーラ

「それじゃ私とシヨウがここに残る事になる」

「二人持ち上げるぐらい問題ないっての」

「よし、じゃあそうしよう」

というわけで

「ぎゃあああああああああああああああああああ」

「

現在、翼^{エーラ}でマツハ近い速度を出しております

一瞬でついた

「チエストオオオオオオオオオオオ」

外から壁に蹴りを放つ

特大の穴があき入り口完成

そのまま着地

「ふう・・・」

「ふうじゃない！！なんて速度出してるんだお前は！！！！！！」

「・・・うう・・・」

エルザが俺に向かって叫ぶ

シヨウは既にしゃべる事も出来ない状況

「ほんの一瞬じゃん」

「いや確かに一瞬だったけども・・・」

ちなみに冒頭の会話から現在に至るまで10秒たっていない

あそこからここに来るのには1秒程度もかかったかどうか

「とりあえずジェラルの居るところまであと少しだし、ちょっと休んだらさっさと行こう」

本当は早く行ったほうがいいのだがシヨウがコレでは進めない

「シヨウ、大丈夫か？」

「・・・」

返事が無い

ただの屍のようだ

マジで死にそうだわ

大嘘憑きで肉体の損傷を直す

「大丈夫か？」

「・・・ふあい」

まだ舌が回らないっぽいな

「すこし休んだほうがいいか・・・」

すると奥から三味線の音が聞こえてきた

見ると刀を持って着物を着た長髪の女がこっちへ向かって歩いている

「誰？」

「うちは斑鳩ともうしますう、よしなに」

えっと

京都弁？

「すまん。京都弁はよく分からん」

よしなにつてなに？

アゲハくんに何か御用で？

「とりあえず邪魔なんでそこどいてください」

「あらあ・・・無粋な方やわあゝ」

「それはかろうじて分かった」

とかやっていると突然こっちへ向かって斬撃を繰り出してきた

「あぶなッ!!」

直撃

「いやあぶなッ! って当たってるよ・・・」

シヨウが突っ込む

「いや当たってないから。俺無傷」

大嘘憑きで

「あらあ・・・おかしいどすなあゝ確かに当たったはずなんやけど・・・」

「だあゝかゝらあゝ当たってねえっての!!!!」

同じ斬撃を今度はこっちから繰り出す

「ッ!!」

斑鳩は慌ててその斬撃を避ける

「あんた何者どす?」

「さあてね。某学園の生徒会長バケモノの能力を持つ女?」

とか?

「某学園の生徒会長? へえ・・・」

「ニイ」

一瞬沈黙が走る

そして

大量の斬撃がこっちに飛んで来た

「アイスメイク・・・盾^{シールド}！！！！」

目の前に氷の盾を出し全て防ぐ

そのまま氷を滑らせ突っ込んだ

アスカロンを換装

「氷の盾ぐらい破ろうぜ？」

「っ！！」

こっちから自分の盾を破壊し斑鳩に切りかかる

「くっ！！」

慌てて刀で防ぐが威力も重さもあっちの刀の方が下だ

刀は粉々に砕けた

「なっ！！」

アスカロンをしまいナイフを取り出す

そして鵜の首筋に突きつけた

「まだやるか？」

「・・・参りましたぞ。ジェラルルはんはあっちの奥の部屋にいるぞすえ」

「知ってるよ」

「・・・」

「そんじゃ」

とりあえずネ拘束ロープで拘束して先へ進む

最後に変な詩を詠っていたがまあ無視

だが進もうとするとエルザに止められた

「今すぐシモンや私たちの仲間たちをつれてこの塔を離れろ」

「「は？」」

俺とショウが間の抜けた声を上げる

「私はジェラルルと決着をつけてくる」

「お前一人で勝てるか？」

「勝たなきゃならないジェラルを救うには・・・」

「ならその鎧は脱いでいったほうがいい」

「なぜだ」

エルザが俺に問う

「亡霊に縛られた奴を鎧に閉じこもった奴が救えるわけない。今のお前なら鎧がなくても大丈夫だろ」

「・・・」

「鎧なんて無くたってお前は十分強いだろ」

「・・・そうだな」

エルザが鎧から装束に換装する

「決着をつけてくる」

「行つて来い。俺もシヨウたちを逃がしたら行くから」

「ああ」

エルザは俺の申し出を断らなかった

俺は駄々をこねるシヨウを担いでさっきと同じスピードで壁を出て

急降下

すでに悲鳴を上げる余裕も無いように

あ、吐いた

汚い液体が後ろへ流れていく

かからないようにさらにスピードを上げた

ハッピーやグレイの乗っている船まで着くのに3秒かからなかった
が既に虫の息だった

「おっすグレイ」

「リヨウ!？」

「シヨウ頼むわ。ちょっと俺は行って来る」

「なんでシヨウこんなに傷だらけ？」

ルーシィが聞いてくる

「マツハ近い速度で塔からここまで来たからな」

「オiiiiiiiiそれどんなスピードだあああああ!!」

グレイの全力ツツコミ

「そいじゃ行つて来る」

今度は走っていった

ぶつちやけシヨウを軽く苛めたかっただけ

塔の真ん中あたりでシモン、ナツと合流した

ナツは気絶中

「ういっすシモン」

「リヨウか、エルザはどうした」

「先にジェラルと戦ってる。一旦シヨウを船で脱出させて今俺はジェラルのそこ戻る所」

「そうか」

するとナツが目を開けた

いつの間にか背負われていることに驚いている

「目が覚めたか、ナツ」

「あれ？」

ナツが辺りを見渡す

「確か俺、変な乗り物に乘せられて・・・おおおおぷう！！」

思い出したようだ

「よせ！！思い出して酔うんじゃねえ！！」

シモンがナツに向かって叫ぶ

「ナツ、コレを食え。酔い止めだ」

といって俺が出したのは

ブレアズを10倍に薄めて固めたもの

「お、おお・・・すまねえ・・・」

一口かじる

そして

「ぶぶう!!!オ□□□□□□□□□□」

吐いた

「ぎゃあ ああああああああああああ」

シモンが悲鳴を上げる

だがナツが吐いたのは胃液交じりの炎だった

「あつっ！あつつい！！なに食わせたんだお前はああああああああああ！！」

シモンが俺に向かって叫ぶ

「ああ、ブレアズ１６ミリオンリザーブって奴を１０倍に薄めたもの」

「ブレアズってなんらよ……」

ナツが行き絶え絶えに苦しそうに聞いてくる

ちなみにシモンについた毛呂は大嘘憑きで綺麗になくなりました

「唐辛子にスコヴィール値つてあるの知ってる？」

「ああ、確かハバネロが10万だったか」

「さっきのブレアズは1600万」

10倍に薄めたから160万

「なんてもん食わせてんだお前は!!」

「ナツく大丈夫か」

「うう・・・ああ・・・」

嗚咽なのか返事なのかは分からないがなんとか大丈夫そうだ

「そついやあの後何があったんだ？」

どうやら回復したナツがシモンに聞く

さすが炎のドラゴンスレイヤー・・・辛いもんには強いんかな

「あの後お前は鼻に食われてグレイに助けられたんだ」

「グレイに!？」

「しかしグレイも相当のダメージを負っちゃってな・・・あの猫に連れ出してもらってる」

「だーッ!!!!ありえねえ!!!!俺が負けてグレイが勝っただどー!!!!」

「別に負けたわけじゃねえだろ食われたんだ」

「このネタで一ヶ月はいじられんぞ．．あいつネチツこいからな
くそぞ」

「オイオイ」

「こうしちゃいられねえ……リベンジだ……あの梟ともう一回へばあ……」

最後まで言う前に頭にゲンコツを喰らわせる

「落ちてバカナツ。多分梟はたまたま相性が悪かっただけだ。ホレ、ジャンケンってあるだろ？アレはグーはチヨキに勝てるけどチヨキはグーを倒せるパーより強いってことだ」

「いやわかんねえ……」

「つまりお前はグレイには勝てるけどグレイより弱い梟には勝てないって事じゃね？」

「ふざけんなー！！俺は梟なんかよりつえええええええ！！」

「じゃあジェラルド倒せばいいじゃない？　まああいつは俺がやるけど」

「ふざけんな！俺がやる！！」

「いい争ってる場合か!!」

「でっ！」

「がっ！！」

俺とナツにシモンのゲンコツが炸裂した

「・・・っーかあんた誰だっけ？」

ナツが今更シモンに聞く

「シモンだ、エルザの昔の仲間だよ」

するとシモンが突然うめき声を上げてうずくまる

「お前怪我してんのか？」

俺はシモンに聞く

「俺のことはいい・・・よく聞け・・・」

「いいから。その怪我治してやるよ」

大嘘憑きでシモンの怪我を無かった事にする

「なんだその魔法は・・・」

「魔法とは少し違うな。てかさっき俺とグレイが話してたの聞いてなかったか？ありとあらゆるものを無かった事にする大嘘憑きって」

「・・・・・・・・」

シモンが完全に呆れている

呆れすぎて作者があまりやらない3点リーダー2回やってしまった

「そんな出鱈目な能力を持っているなんてな・・・」

「それよりさつさと続き話せ」

「ああ。さつきウオーリーとミリアから通信があつた。倒れてるルーシィとジュビア、そして三羽鴉の一人を見つけたとな。事情を知らねえあいつ等はとまどっていたがルーシィたちを外に連れ出してもらった」

「てことはあと俺の倒した斑鳩で三羽鴉は全滅？」

「ああ」

「俺何もしてねえ！！！」

「安心しろ。今回お前に何かやらせるつもりはない」

「ひでえ！！！」

「残る敵はジェラール1人でそこにやエルザがいるけど・・・」

「ジェラールは強大すぎる・・・頼む。エルザを助けてくれ」

「やなこった」

ナツが即答した

「落ち着けナツ、お前ここで何もしなかったらマジでやること無いぞ・・・完全に役立たずだぞ・・・」

「ハッ！！それだけは嫌だ！！エルザはどこだ！！」

「シモン・・・扱いやすいなこいつ」

「ああ」

俺とシモンはこそこそと聞こえないよう話す

「それじゃシモンは先に脱出しててくれ。俺とナツはジェラルルのところ行って来る」

「分かった」

「んじゃ行きますか。シモン、船のどこまで連れてくからつかまれ」

「あ、ああ」

俺はシモンを抱え壁を破壊し翼で飛ぶ

さっきのシヨウの時と同等のスピードで

「ぎゃあああああああああああああ」

やっぱ悲鳴

そのまま海に既に出ている船にシモンを乗せ塔へ戻った

すでに衛星魔方陣は展開されている

「やっべ・・・早く塔に入らないと死ぬ」

ギリギリセーフ

壁を破壊してなんとか中に入れた

「うぉぁぁ!!」

丁度入ったところにナツがいた

すると上から轟音が聞こえる

辺りが真っ白に光り

エーテリオンが落ちた

エーテリオン（後書き）

今日は一気に更新してしまおうと思います

それじゃまた次回～

ジェラール（前書き）

また更新〜

それじゃどーぞ

ジェラルル

エーテリオンが落ちた

周りが白く光り塔の壁や床が剥がれ砕けていく

なのに

「なんで生きてんだろうなナツ」

「いつてえ・・・知るか・・・」

まあこのエーテリオンがジェラルルの計画の一部であることは原作知識で分かっているけども

一応聞いておく

ナツが知るわけ無いけども

「塔の壁ってこんな綺麗なやつだったっけ？」

「だから知らねーって・・・早くエルザのところ行くぞ」

塔にさっきまでの面影は無く当たり一面水晶のように光を反射し光っていた

随分と綺麗な建物だ

「ナツく壊しながら回ろうぜ」

「早く行くぞ!!」

ナツがいつもより真面目な感じなのでさっさと行く事にした

「あいよ」

幸い階段などは水晶になっているが残っていた

エーテルナノだっけ

あ、そうそう

エーテリオン覚えたよ

なんだかどんどん異常がホコリを被っていくな・・・

早く 不慮の事故エンカウンターを使いたいが原作じゃまだ出てねえんだよな

ちなみにめだかボックスの方は毎週ジャンプが届けられています

ご都合主義？知るかそんなもん

善吉の目ってなんだろうな

と考えているうちにエルザとジェラルルが戦っているところへたどり着いた

見るとエルザがどんどん水晶の中に埋まっていくところだった

走った

すぐにエルザのところにたどり着く

そのまま力ずくで引っ張り出した

「大丈夫か？エルザ」

「リヨウ！それにナツも・・・」

エルザがこっちを見る

「エルザは妖精の尻尾の魔道士だ。渡さねーぞ」

ナツがジェラルに言い放つ

引っ張り出したエルザを地面に寝かせジェラルのつけた拘束の蛇を剥がす

「何してんだよエルザ、決着つけるってお前の負けでつけても意味ないだろーが」

「す、すまん・・・」

エルザがふらふらの身体を起こす

「しゃーない。選手交代と行きますか」

「よせ・・・相手が悪い・・・お前たちはあいつを知らなすぎる・・・」

「聖十ナメんな」

「・・・はい？」

エルザが間の抜けた声を上げる

「聖十って・・・お前いつの間に・・・」

「丁度ジヨゼを倒した後ぐらい」

「・・・クク・・・ハハハハハハハ」

エルザが笑う

そして

「お前はやっぱり規格外か」

「ああ、物理法則だの万有引力だのそんな知ったこっちゃ無いね。生死だろうが操ってやるよ」

「お前なら出来そうだな・・・」

「だから後は任せて寝てろ。幽兵」

俺は幽兵を一体出す

幽兵はエルザを抱えて外に出した

ジェラールは追わない

ゼレフ復活のためには聖十大魔道クラスの魔道士と27億アイデアの魔力が必要

だが既に二つともそろっている

エルザ、もしくは俺

別にどちらでもいいんだろう

気に食わないな

「ナツ、行くぞ・・・共同戦線といこうじゃん」

「ああ！？こいつは俺一人で十分だっつーの！ー！」

「知るか。エルザに一瞬でやられる奴があいつに勝てるかコンニャロー」

「ああ！？やってみなきゃ分かんねーだろうが！ー！ここでなんかやんねーと俺なんもやってねえ役立たずになっちまうだろうが！ー！」

「ふーん・・・いいじゃん役立たずで。お前はまた次頑張れ」

笑いながら言う

そして

「チエスト！ー！」

腹に一発入れた

「ゲフツ!!」

ナツを気絶させリオンの動の造型魔法で造った鳥に外へ運ばせる

それを見送って

「コレでこの塔に残ってんのは俺とお前だけだ。存分に暴れられる」

「ふん、ガキが・・・たった一人で俺に勝てるっても?」

「その台詞そっくりそのまま返してやるよ。お前みたいに自由の意味も知らないガキに本当の自由の意味を教える」

「・・・面白い。見せてもらおうか。最年少の聖十大魔道の力」

ジェラルルがそう言った瞬間、俺は火竜の咆哮を放つ

「滅竜魔法だ!!?」

咆哮は見事に直撃

だが

「その程度か?」

無傷

羽織っていたローブみたいなのが脱げただけだ

「んなわけ無いだろ？本気どころか準備運動にもなんねえよ」

「なっ！！」

一瞬で接近

そのままから空きの腹にパンチを一発打ち込む

ジェラルルは慌てて腕をクロスさせガードする

5メートルほど下がった後ようやく勢いが止まった

「・・・ッ！」

ジェラルルがこっちを睨む

「オイオイ、さっさと天体魔法見せてみるよ」

「なぜ貴様が俺の魔法を知っている・・・」

「受信感度つつー俺の技。他人の思考や感覚を全て読む」

「成る程な・・・ならば隠す必要など無い・・・流星」
ミィディア

瞬間、ジェラルルが俺の視界から消えた

気付くと既に背後にいた

「おお！」

ジェラルルの蹴りが放たれる

だが

ミイティア
「流星」

「なに！？」

同じ魔法を使って避ける

流星と流星がぶつかる

最後に俺がパンチを放とうとするとジェラルルが上に避けた

「七つの星に裁かれよ・・・グランシャリオ七星剣！！！！」

そのまま上から魔法を放つ

「・・・ッ！！」

ヤバイ・・・マジで死ぬかもしれないな

かなりの威力あるぞコレ・・・

轟音が鳴り響く

俺は数メートル後ろに吹き飛ばされた

「隕石にも相当する破壊力を持った魔法なんだがな・・・よく体が残ったもんだ」

「いてーな」

「なッ!」

だが俺は普通に立ち上がる

さらに

「無傷だと!!?」

「アレで隕石ねえ・・・案外大したこと無いんだな。隕石っつーならエーテリオンとかその辺じゃね？」

「あ、あれを喰らって無傷ですむハズが・・・!!」

「ああ、確かに無傷じゃ済まなかったわ。腕は吹き飛ばし両足はなくなるし、マジで一回死ぬかと思った」

でも

「俺には大嘘憑きって能力があつてな、どんな事でも無かったことにする。死でさえも無かったことに出来る」

「そんな出鱈目な魔法があるか!!」

「魔法じゃないさ」

魔法じゃない

過負荷だ

(・・・ッ！！これ以上塔にダメージを与える訳には・・・！！)

「余所見してんじゃねーよ」

「なっ！！」

ジェラルルの腹に力任せのパンチ

あたった場所に30？ほどの穴があく

ジェラルルが大量の血を吐き出した

意識を失いかける寸前大嘘憑きでなかったことにする

「ハッ！」

ジェラルルが目を見開く

「あんまり塔にダメージ与えて後でエネルギーに暴発されても困るからな・・・」

七星剣によつて塔の床に出来たクレーターも無かったことにした

「それにそれでお前に死なれても困るし」

「は？」

「一応エルザと約束したんでな。ジェラールを救うって」

「なんだと？」

「言ったとおりの事だよ。お前を救う」

俺は気だるげに言う

「かかって来い、全部受けてやる」

どんなに壊そうが塔はどうにでもなる

いつそ粉々になればいい

「ッ！！後悔するなよ！！七星剣！！！！」

「七星剣」

ジェラルルの放つ魔法を同じ魔法で打ち消す

「くそッ！！」

ジェラルルが次の魔法を放とうとする

が

「発動が遅い、流星」

流星で懷に一瞬で近づき喉を突く

先ほどのように貫くようなことはしない

ただの詠唱妨害だ

「カハツ・・・ゲホッ！・・・グ・・・」

咳き込みながらジェラルルがこっちを睨む

「そんな怖い目で見んなよ。楽しく行こうぜ？」

笑いながら俺はジェラルルを見る

「アアアアアアアアア」

ジェラルルが雄たけびを上げる

影が光源と逆の方向に伸びる

「無限の闇に堕ちろ！！暗黒の楽園！！！」

ジェラルルが巨大な黒い球体のような魔法を放つ

それは俺に直撃した

轟音が鳴る

それでも俺は倒れない

「まったく世間知らずの引きこもりは・・・強い魔法使えばいいっ

ジェラルルがこちらを睨む

「ありや、まだ足りないっすか・・・監獄時代でも思い出せば少しはマシになると思っただけど？」

「・・・」

ジェラルルはこっちを睨んだまま何も答えない

俺が開いたのはジェラルルがエルザを仲間と思っていた時のことだ

「エルザの名字、スカーレット。あれジェラルルが付けたんだって？」

「・・・なぜ知っている」

スカーレット

ジェラルルがエルザの髪の色を見て思いついたとか何とか

「さあね、お前の解釈でいいよ、世界の運命を予言できるとか、この世界のことを別世界では物語になっただけそれを見たことがあるとか・・・」

「・・・」

「仲間だと思っただけなら・・・いや、仲直りしたいんならエルザに謝んな」

好きな女の子泣かせちゃだめだぜ〜？と付け加える

するとジェラルルが睨んできた

「ありゃ、凶星だったか」

「違う！！」

「違うない違うない」

さっきまでの殺伐とした空気は何処へやら

いつの間にか修学旅行のノリ

「少なくともエルザはお前のこと好きだろうな、俺は友達に泣いて欲しくないからお前を反省させようとして頑張ってる訳だけど、どうだ？ちよつとは反省したかよ」

「反省？そんなものする必要は無い・・・いまさら後戻りなんて出来ない・・・」

ジェラルルは再び臨戦態勢に入る

体に魔力を集中しいつでも魔法が打てる体制だ

「後戻りねえ・・・戻ってどうするのやら・・・」

「なんだと・・・？」

「戻ったところで同じ道をたどれば同じ運命だよ。ゼレフに憑かれ

「・・・」

そのままジェラルルの顔面に拳を突き刺す

そのままジェラルルは下に落とされ地面に当たる

俺も重力に従い塔の床に着地した

ジェラルルは気絶している

「さて・・・」

どうすっかな

塔のエネルギーが暴走している

大嘘憑きで元に戻してもしばらくすればどうせ暴走する

だからといってこのままにするわけにも行かない

それなら

「ジェラルル」

「・・・なんだ・・・」

ジェラルルは仰向けに倒れたまま返事をした

「いやジェラっち」

「なんだよジェラっちって!!?」

ジェラルルがツッコむ

3秒ほど沈黙が流れた

そして

「ハハハハハハハ!!お前人間らしい反応も出来んじゃないか」

「・・・」

ジェラルルが目を丸くしている

「さて」

「・・・ッ!？」

俺は氷の造型魔法でジェラルルを球体の中に閉じ込める

「先に外に出てろ。あとエルザ達に伝言。多分1〜2ヶ月もすれば戻れると思うって」

「・・・ッ!!・・・ッ!!」

ジェラルルが中から何か叫んでいる

「って聞こえてんのかコレ?まあいいや。聞こえてるなら手をチョキにしろ。嘘は許さん」

「・・・」

中のジェラルルの手がチヨキの形になる

「おっけ。そんじゃ行つて来い」

ジェラルルの入った球体を外に向かって放り投げる

さて、エルザたちがうまく拾ってくれればいいんだけど

「それじゃこつちもどうにかしますか」

ふむ

そうだな、ジェラルルが煉獄碎破で塔を消そうとしたってことは丸ごと消せば暴走は止まるかね

それならアレでしょ

「エーテリオンで丸ごと吹っ飛ばすか」

もし駄目だったら死ぬのは外にいるジェラルル達だから

余計にマズイな

「成功することを祈りますか」

塔の崩壊も進んできた

すであちこちから力が放出されている

魔水晶も液体みたいになうね動いて波打ってる

俺はエーテリオンを撃つ為に衛星魔方阵を空に展開する

「・・・っ！」

まだ魔方阵を展開しただけなのにすでに疲れが出てきた

撃てるかどうかは運次第ってか？

「やってやろうじゃん」

俺は思いっきり魔力を込める

ついでにいくつかのエーテルナノをナツがやったみたいに食べる

「うえ・・・まじい・・・」

でも負担は随分減った

魔力が増えたんだと思う

「さて・・・行くぜえ」

そのまま俺はエーテリオンを落とす

辺りが白く光り

轟音が鳴り響く

元のエーテリオンよりも完成で覚えた分威力は十全

後はうまくいってくれればいい

エーテリオンが塔に直撃した

辺りの暴走ごとこの魔水晶の塔を吹き飛ばす

そして

俺の意識はそこで途絶えた

ジェラール（後書き）

楽園の塔完結

一回主人公死なせます

一回神を殴らせとこうかと

なんか主人公やジェラルルの性格が変わってしまったような回

もうちょい俺に文才があれば！！

そうそうバトルオブフェアリーテイルはやりません

と言う訳で

それじゃまた次回！

1/24：書き直しました。前の方がよかったという人が多くいた場合短編にするなりしてupしようと思います
それではまた

死んだ後（前書き）

連続更新

それじゃどーぞ

死んだ後

目が覚めるとまっ白な空間にいた

「うわゝ・・・久々に見たわ・・・」

見ると自分の体が前世の姿に戻っていた

「なにやってんのよあんた・・・」

「うわッ!!!」

隣に小さい少女がいた

というか神だった

「よっす久しぶり」

「久しぶりじゃない! あんたねえ・・・なに転生させてやったのに死んでんの!?! 自分にエーテリオンって自殺行為!?!」

「あっはっはー」

「あっはっはーじゃない!! 大嘘憑きがあるから大丈夫だけどあそこまで粉々になると1週間はかかるわよ?」

「嘘ッ!?!」

「嘘じゃない。オリジナルとは少し違うのよ」

「マジで」

「マジ。で？どうする？このまま死ぬ？それとも別の世界行く？もしくはFTの世界に戻る」

「FTの世界に戻るわ。1ヶ月で帰るって言っちゃったし、そういうジェラルドになった？」

俺は神に聞く

「ああ、シヨウたちとは別々に旅に出たわ」

「ふーん」

「それだけ？」

「あ、もう一つ、こないだ転生者がもう一人居るって話したろ？」

「うん」

「どんな奴？」

「聞きたいの？」

「原作介入する気は無いつつってたからさ、変な奴だなって」

「なんで？」

「いやせっかく漫画の世界に来たんだからさ、普通物語に介入して

みたいじゃん」

「ああ、あいつはただ単に魔法が使って見たかっただけだし」

まああと少しで介入せざるを得ない状況になるけど

と最後に呟いた

「なんで？」

「あんたと同じ。あいつもね、ミスっちゃったのよね。化猫の宿の上空にくぁwせdrftgyふじこーp」

顔面にパンチを叩き込んだ

「あんた何回ミスってんだよ！！」

「あゝちなみにアンタの女体化に関してはもう戻せないから」

「もういいよそこは・・・今更戻れないし」

今更戻ってもアレだから

てか今更だけど墓とか作られてないよね！？

葬式とか行われてないよね！？

「今のところはね・・・ジェラルもちゃんと伝言伝えてくれたみたいだよ・・・っと出来た出来た。あんたの体修復終わったみたい」

「ん・・・」

意識が戻ると何処かの海岸に流れ着いていた

「何処だここ・・・」

全然見覚えのない海岸だった

コレじゃFTに戻れそうに無いな・・・

うーん

つかなんか寒・・・

え

「ひゃああああああああああああああああああ」

見ると俺は全裸だった

あまりにもビックリして女みたいな悲鳴を上げた

いや女だけでも

「かかか換装!!」

とりあえず換装で服を着る

幸いこの辺には誰も住んでいないようで助かった

「あの〜・・・」

居た

女の声だった

恐る恐る振り向くとそこに居たのは

ハッピーに似ている白い猫と紺色の長い髪の少女

てかウエンディとシャルル

「大丈夫ですか？」

と聞かれた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は呆気にとられて声が出なかった

「えっと・・・どうしたんでしょうか・・・」

「あ、ああまあ色々あってね」

シャルルは我関せずとまったくしゃべらない

「あ、私ウエンディって言います。こっちはシャルル」

「よろしく」

「あ、俺はリヨウ、リヨウ・アオサキ」

「なんだか似てますね」

「似てる？」

誰にだ？

「えっと私のギルドに最近入った人で、コヨミ・ワタヌキって言うんですけど・・・」

四月朔日？

ふーん

「名前が？」

「ハイ」

とまあ自己紹介を終えたところで

「あの、もし良かったら仕事手伝ってくれませんか？」

唐突だな・・・

ウエンディでこんなキャラだっけ

と言っ訳で

手伝う事になった

森に生えている特産きのこの採取だそうだ

モンハン？

っーかここマジでどこなんだろう

多分、化猫の宿の近くだろうけど

そっついやもう一人の転生者もこの辺にいんのかな

今俺は何処かの森にいる

てかエーテリオン落としてから何日経ったんだろ・・・

えーっと

そっついや携帯あるかな

ポケットをさぐる

まあエーテリオン落としたときに吹っ飛んだらうけどってあるし

携帯を開く

見ると

アレから3週間ほど経過していた

意外と時間たっていた

「あの、どうしたんですか？」

「あ、なんでもない」

俺は携帯を閉じてポケットにしまう

つかこの携帯ホント使い道ねえな

最初に来たときに貰ったけど使い道と言ったら日時の確認と神との連絡ぐらいだし

そうだ

連絡といったらシモンがそんな魔法使ってたな

一応エルザたちに連絡なりしてみよう

「~~~~~」

駄目だった

となると六魔將軍の時まで会えないわけですか

まあいいか

地図なり買えばいいんだけど金も家だし

どうしょ

「あ、アレです」

ウェンディが指を刺す

そこには大量のきのこが生えておりその中にある赤いきのこが特産きのこなのだそうだ

「アレか・・・」

するとウェンディが小さいくわっばいものを取り出す

なんでも特産きのこは硬い地面にしか生えず素手で抜くには大変なのだそうだ

俺は素手でも大丈夫だった

クエストは１０分ほどで終わった

「コレっておいしいんですかね」

ウェンディがきのこを見て言う

確かに食べたいとは思えない

なぜなら抜いた瞬間とんでもない悪臭がしたからだ

「食ってみりゃわかるんじゃない？」

「駄目ですよ。依頼人に渡すんですから」

とか話していると家が見えてきた

「ごめんください」

ウェンディがノックする

「はい」

奥から若い男の人が出てきた

依頼の品を渡す

報酬は50000j

ウェンディとシャルルで25000ずつ

俺にも渡すと言ってきたが遠慮した

よく探してみるとポケットに財布が入っていた

神、グッジョブ

さて、これからどうしよう

妖精の尻尾に帰るにしてもここがどこなのかよく分からない

途方にくれているとウェンディが化猫の宿に來ないかといってきたのでお言葉に甘える事にした

しばらくはそこで暮らすことになった

死んだ後（後書き）

なんか適當ですみません

でも一応やつておきたかったです

次回はまたしても番外編です

しかもまたしてもスケツトダンスネタです

前々回言ったタイトルからも分かるでしょうがチュウさんのちっさくなるクスリのネタです

で

誰を小さくするか迷ってます

なんか適當に感想に書いてくれると嬉しいです

それではまた次回！

番外編 リトルフェアリーはご機嫌ナナメってまたスケッチダンスネタかよ！

またスケッチダンスネタです

さすがに次はやりません

今回つきりだと思っています

多分

きっと

それじゃどーぞ

番外編 リトルフェアリーはご機嫌ナメってまたスケッチダンスネタかよ！

SIDE3 人称

それはある日の昼のことだった

「暇……」

と唸っているのはルーシィ

「暇なら仕事行ったら？」

とルーシィに言ったのはミラジエーン

「だってナツ今日行く気無いんだもん」

「別にルーシィ一人で行ってもいいんじゃない？グレイとかエルザとか、リヨウとか、あと……ハッピーとか」

「なんでハッピー！？というかエルザは他の仕事で居ませんよ」

「そうだったけ？そういえばリヨウも居ないわね」

「リヨウも別の仕事です。薬を作るとかなんとか」

「ふん。リヨウって薬なんて作れるんだ」

「はい」

とルーシィとミラジェーンがカウンターでだらだらと話しているとギルドの出入り口から誰かが入ってきた

「あ、おかえり〜エルザ」

エルザだった

「ああ」

「なんか疲れてるわね。なにかあった？」

「うむ・・・ミラ、なにか飲み物をくれ」

なんだか今日のエルザは元気が無かった

大分ハードな仕事だったらしい

「あれ？なんだろうコレ」

ミラジェーンが取り出したのはカウンターにおきっぱなしになっていたコーラのビン

「しまい忘れてたのかな〜。エルザ、コレでいい？」

ミラジェーンは適当に言う

「ああ」

とエルザはグラスに入れられたコーラを一気に飲み干す

「よく炭酸一気飲みに出来ますね」

すると

ギルドにまた一人入ってくる

「あ、おかえりリヨウ」

リヨウだった

だがリヨウは机に置かれたビンとそれを飲んだらしいエルザを見て表情を驚愕に染める

「エルザ、お前それ、飲んだのか!？」

リヨウがエルザを指差して言う

「ん? ああ、飲んだが・・・マズかったか？」

エルザは呆氣にとられたように言う

「え、あ・・・」

リヨウはエルザの様子を見て逆に呆氣に取られたようだ

だがそれは安心しているようにも見えた

すると

「ぐ、ううう、う」

見た目的には大体3〜4歳児というところまで縮んだ

SIDEリョウ

「どーなってるの!？」

ルーシイが俺に詰め寄る

「コレがエルザ!？小せえ〜・・・」

ナツが小さくなったエルザを見て目を輝かせている

可愛いのかそれとも・・・

まあ後者だろう

どうせ今なら勝てる!!

とか思ってるに違いない

「リョウ!あんたの仕業!？」

ルーシイが問う

「うん。俺の仕業」

「どーなつてんのよ!!何がどうなつたらこつなるのよ!!」

ちなみに被害者であるエルザに関しては

なんだか青ざめている

どうやら元に戻るのか不安なようだ

いや

そうじゃない

「キャ~~~~~~~~かわいい~~~~~~~~!!!!!!」

とテンションを上げてエルザに抱きついているのは

「ミラさんってあんなキャラだっけ?」

ちなみに今のエルザはハッピーとほとんど変わらないサイズ

「く、苦しい、誰か~~~~~」

どれ程の力で抱きしめられているのか

エルザが誰かに助けを求めるが誰も助けない

「うう~~~~~」

ちなみに鎧に換装してもサイズが小さくなりすぎてなんの意味もない

というか鎧に閉じ込められる

それほど小さくなっている

「というか見てないで説明してよ」

ルーシイが俺に聞いてくる

「ん、分かった」

と言う訳で説明開始

「若返り薬!？」

ルーシイが声を大にして聞く

俺はそれに答える

「ああ、実はな?ギルドボードにさ、強力な育毛剤が欲しいって言う依頼が書いてあってな、それで試しに受けてみたんだよ」

「なんでそんなの受けんのよ・・・」

「それで、色々考えたらやっぱり頭皮を若返らせるのがいいと思っ
な？」

「ふむふむ」

「で、作ったのよ」

「あんた凄いな!!」

ルーシイが明らかにいつもと違うリアクション

完全に混乱している

ちなみに当人エルザは

「・・・・・・・・・・」

黙って俺の説明を聞いている

「まあ成功するとは思わなかったけども」

「成功してないわよ!!見てみなさいコレ!!全身丸々若返って
じゃない!!」

「静かにしてくれ・・・今日は疲れてるんだ・・・」

エルザが突然しゃべる

「・・・・・・・・」

その瞬間一瞬の沈黙が流れた

そして

「しゃべった!？」

とルーシイが驚く

「しゃべったよこの子!！」

「この子じゃない・・・体が若返っただけで中身はそのままなんだ・
・」

随分と元気のない子供だった

「か、かわいい・・・」

「でしょ!？」

ルーシイの呟きにミラさんが敏感に反応した

完全にキャラが壊れてる

「なあリヨウ、コレ戻れるのだろうな」

とエルザが聞く

「大丈夫大丈夫、ちょっとひとつ走り材料買ってくるから。コレ着てろ」

俺は1着の子供服をエルザに渡す

今の今まで説明しながら作っていたものだ

「む、分かった」

とエルザは服を受け取る

「それまでエルザの子守り頼むな？」

とミラさんに言う

「まっかしといて〜!~!」

「あ、ずるい!~!」

とミラさんとルーシィ

「子守りって言うのはやめろ!~!」

とエルザ

その後エルザはカウンターの裏に隠れて子供服に着替えた

5分後

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

ルーシィとミラさんが同時に歓喜の声を上げる

「うう・・・」

エルザなみだ目

俺はその五分の間に材料を買った

「まあ1〜2時間で作れると思うから」

「待て！！1〜2時間もこの姿でいるというのか!？」

「うん」

ちなみにマスターは評議院に始末書を提出しに行っていて居ない

「うう・・・」

エルザがうつむく

もう怒る気力も無いようだ

ちなみに

「なんだろこの見慣れた人が小さくなる感じ・・・なんというかも」

ルーシィとミラさんのテンションはとんでもないことになっている

エルザは完全にこの二人のおもちやになっていた

「ねえねえエルザ」

ミラさんがエルザに話しかける

その目はとても綺麗に光っていたそうな・・・（後日談エルザ）

「な、なんだ・・・」

エルザが恐る恐る聞く

「トイレ大丈夫？」

「大丈夫だよ！！そわそわしないでくれ！！！！なんだ今日のミラは・・・」

「だってかわいいんだもん！！」

といってまたエルザに抱きつく

エルザはもう完全に泣きそうだ

今にも泣きそうだ

数分後

「はぁ・・・はぁ・・・」

どうにか脱出したエルザ

「ミラめ・・・というかりヨウめ・・・」

なんかエルザの周りからどす黒いオーラを感じる

戻ったら殺されそうだ

成長薬作ったら全力で逃げよう

辺りから視線を感じる

どうやら全てエルザに向かっているようだ

受信感度を使うと大半が呆れだったが

レビィやカナなどの女性陣の方からは抱き着きたい・・・でも戻ったら殺されそうという感情が流れてきた

エルザの方は

怖ッ！！なんかものっそい怨念が・・・

すると今度はルーシイが

「ねえねえエルザ」

「うう・・・今度はなんだ・・・」

「お散歩行かない!？」

「散歩!？冗談じゃない!!私は今日はここから一步も出んぞ!!」

エルザがルーシィを睨む

だが

「きゃああああかわいいいいいいいい」

という反応しか戻ってこない

かわいいそうにw

「駄目よエルザ、子供は外で遊ばなくちゃ。子供は風の子っていうでしょ？」

「誰が子供だ!!」

「~~~~~エルザ」~~~~~

ミラさん、ルーシィだけでなく

ナツ、ハッピー、グレイも同時に言う

「~~~~~ッ!」

そのままエルザは外に連れ出されていった

「リョウ〜!! 助けてくれ〜!!」

「行つてらっしゃーい。お姉さんやお兄さん達の言うことはちゃんと聞くんだよ〜」

俺はエルザの助けをスルーしてエルザ、ミラさん、ルーシィ、ナツ、ハッピー、グレイを微笑ましく送り出した

「~~~~~」 (声にならない悲鳴)

さて、俺は薬の作成を進めますか

黒い包帯はこういうときに使う

「えーっと次は昆布っと」

「なんで昆布？」

レビィが突っ込む

まともに登場したのはコレが初めてだな

バトルオブフェアリーテイルも作者の都合で丸々カットになってほとんど唯一の出番を失っちゃったし

「いや昆布は絶対必要なんだよ。味の深みが全然違う」

「出汁じゃん!」

とこんなことをしながら薬の作成を続ける

ちなみに育毛剤の方もついさっき完成させた

同時進行

自分に使ったら肩まであった髪が腰まで来た

成功

つと今は関係ないつと

「えーつと次は・・・」

という感じで作業を進め

2時間後

エルザたちが帰ってきた

よっぽどひどい目に遭ったのかエルザは真っ白な灰となっていた

「リヨ・・・リヨウ・・・薬は・・・」

この台詞だけだと麻薬中毒の人に見えなくもない

だが違う

ただ単に薬が完成したかどうか聞いただけです

「あ、これこれ、出来たよ」

「うう・・・」

とりあえず一旦カウンターに置き元の服に着替える

その後エルザに薬の入ったコップを渡す

エルザはそれを恐れることなく一気に飲み干した

よほどひどい目にあっただろうか

ミラさんとルーシィが名残惜しそうに見ている

あ、ハッピーも

「う、ぐあああ」

エルザが苦しみます

そして

元に戻った

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

その後のミラさんとルーシィのテンションの下がり具合はハンパな
かった

「全然面白くない・・・」

「もつかい飲まない？」

「嫌だ・・・」

エルザはかなり疲れている

ちよ！このままじゃオチが！！オチがあああああああ

と思つてゐる。

「う、ぐああ」

後ろからこんなうめき声が聞こえた

振り向くとナツが小さくなっていた

[illegible]

またしてもギルド内で驚愕の声が上がった

番外編 リトルフェアリーはご機嫌ナナメってまたスケッチダンスネタかよ！

オチ適当ですみません

なんというか・・・うん

あんま面白くないっすね

まあしょうがないか

次回は年明けになると思います

それじゃまた次回！

四月朔日・暦（前書き）

あけましておめでとつございます

今回やっと2人目の転生者が登場します

それじゃどーぞ

四月朔日・暦

きのこ狩りクエストが終わって大体2時間ぐらいが経った

「うゝ・・・」

うめき声を上げる

何回目かのうめき声

さっきからとてつもなく体がだるい

神によるとエーテリオンを撃ったせいで魔力が無くなったのが原因だそうだ

肉体の修復が終わった時点で魔力も回復するかと思っただが

エーテルナノを食べたり直接喰らったりその他諸々色々な理由で体がガタガタらしい

今日寝たら多分2〜3日は寝続けるだろうとのことだ

「大丈夫ですか？」

ウェンディが聞いてくる

ごめん、全然大丈夫じゃない

「うあゝ・・・」

ウェンディは普通に歩いている

俺はフラフラとしながら木にぶつかったりしていて足取りがおぼつかない

それから10分ほど歩いていると小さな集落が見えてきた

アレが化猫の宿らしい

集落全部がギルドになっていて織物の生産が盛んとか何とか

でもコレは

「幻・・・」

「ハイ？」

呟くとウェンディがこつちを見る

「あの・・・なんですか？」

「あ、なんでもないなんでもない」

慌てて言うウェンディが不思議そうな顔をしている

だがすぐに前を向いた

とりあえずまずはこのマスターに会いに行く事にした

ローバウルさんへの挨拶を済ませた後、とりあえず自分が泊まる宿を探す事にした

ギルドなのに売店みたいなものもある

どうやら宿もあるらしい

売店にこの世界の地図帳見たいな物が売っていたので一冊買う

これで多分いつでも帰れると思う

でも

「この状態じゃ無理だ・・・」

そう

さっきも言った通り、俺の体はかなりガタガタだ

もう歩くのもだるい

さっさと宿に泊まって寝たい

とりあえずフラフラと宿を探して彷徨っていると人にぶつかる

立っているだけでフラッフラになっている俺は手をつくことも出来ずに尻餅をついた

「あ、大丈夫か？」

手を差し伸べられる

見るとそこには明らかにこの集落には似合わない格好をしていた

茶髪に染めた髪と・・・セーラー服？

腰に刀を挿している

てか・・・

「無桐伊織？」

ピキリと

少女の体が凍る

もしかして

「転生者？」

凶星だった

完全に固まっている

目の前で手を振っても反応なし

「ていつ！」

チョップした

ナナメ45度

すると

「はっ！！」

意識が戻ったようで

そして

「え〜っと・・・」

なにか困ったような顔をする

「なんで知ってるんでしょうか・・・？」

恐る恐る聞かれた

なぜに敬語・・・

「というか無桐伊織は禁句です」

なんか睨まれた

どう答えるか・・・

「ああ、俺も転生者・・・つーかあの神からは男^{バカ}って聞いたような・
・・・」

「前世はね・・・」

ハハ・・・と暗い笑みを浮かべる

なんというか・・・ご愁傷様

「元気出せ、俺もだから・・・」

苦笑しながら軽く肩に手を置いた

「うう・・・」

なんか可哀想になってきたな・・・

「四月朔日暦・・・」

と突然いわれた

「僕の名前です」

「ああ、俺は青崎峻」

「珍しい名前だね」

「お前が言っとな・・・お前の方がよっぽど珍しくないか？というか

なんでセーラー服？」

「なんか知らないけどそれしか入ってないんだよ……」

ちなみにかなり丈夫なやつだとか

ナイフも刺さらないらしい

「お前はどんな能力貰ったんだ？」

「BLEACHの斬魄刀全種と虚化、鬼道やらなにやら……とい
うかBLEACHの能力全般」

うわー……凄いチート

下手したら俺の貰った奴よりチート

「とてつもないチートだな……」

「まあね。峻は？」

「完成とその他の異常」

「うわー……」

お前もチートじゃねえかよとも言いたそうな顔だった

すると突然のめまいが来た

うわ……ヤバイマジでだるい

「どしたの？」

「俺さ・・・妖精の尻尾の上空に落とされたせいで結構原作介入してんだけどさ、こないだ樂園の塔でエーテリオン使ってそのせいで体がガツタガタなんだよね」

「ふーん。じゃあ・・・」

暦が腰の刀を抜く

すると刀が巨大なエイに変わった

ぶつちゃけキモい

そのまま俺は巨大エイに食われた

「復活！」

と叫ぶ

あのエイのおかげでとりあえず魔力は回復してくれた

とりあえず曆に礼を言う

ついでに

「コレ被る？」

ニット帽を渡す

即答で断られた

前世から地味に似ていたらしく

この世界に來た途端ほとんど瓜二つになってしまったらしい

まあ・・・ご愁傷様

このまま妖精の尻尾に帰るのもいいが、いつそ六魔將軍までここに
いることにした

一応生きていることを知らせるため幽兵で手紙を送る

ちゃんと届くかは別として

「まあ大丈夫だろ」

さて、サプライズはまた今度として

「寝よう」

ちなみに俺が今いるのは暦の家

泊めてもらえることになった

そのまま俺は眠りについた

四月朔日・暦（後書き）

なんか短くてすみません

近いうちに暦のプロフィールは載せます

今回は敬語使ってますが暦は基本普通のしゃべり方です

怒ったり混乱したりして精神が乱れると口調が色々変わります

それじゃまた次回！

お久々（前書き）

更新~~~~

つーか今更だけど前回の転生者チートすぎて今後の物語が微妙な展開になりそうで怖い

まあどうせ六魔將軍終わった後は出番あるかどうか分からないし

その辺はあとで決めます

それじゃどーぞ

お久々

「疲れた・・・」

と暦が呟く

暦は馬車が苦手なのだそうで

曰く、「腰痛い」だそうだ

現在俺と暦、ウェンディの3人は青い天馬のマスターの別荘ー（長いな・・・）に向かっている

そこが集合場所

六魔將軍の討伐に行くためにあっちが同盟ならこっちは連合という事で

妖精の尻尾、青い天馬、蛇姫の鱗、化猫の宿で連合を組むらしい

ちなみに今回俺は化猫の宿ということになっている

まあしょうがないか

「にしても僕が出る意味あるのか？」

「しょうがないだろ？ローバウルさんが行って来いっつーんだから」

俺は化猫の宿のマスターは名前で呼んでいる

「一応俺は妖精の尻尾の一員だし」

「それに俺としてはみんなに生存報告しときたいし」

「そういえば峻は妖精の尻尾じゃ生死不明扱いだっけ？」

「こないだ手紙送ったけど届くとは思えないし」

さつきから俺と曆しか喋ってない

理由は

「つかそろそろ着くけどウェンディ起こさなくていいの？」

「着くまで寝かしとこうよ」

寝てるから

よくもまあこんなところで寝れるもんだ

「あゝめんどくさい」

「お前そんなに原作介入するの嫌なのか？」

「いままでずっとしてこなかったからな」

「そんなもんか？」

「そんなもんだ」

とかやっていると別荘が見えてきた

「おいウェンディ、着いたぞ、起きろ」

ウェンディの身体を揺する

だがうめき声を上げるだけで起きない

「「チエスト!!」」

ダブルチョップ

「痛ーッ!!」

起きた

ちなみにシャルルはウェンディと一緒に寝てた

シャルルもウェンディの悲鳴で起きる

「どうしたのよウェンディ」

「あうゝ・・・」

シャルルの問いかけに頭を抑えて答える

「着いたぞ起きろ」

「もう起きてますよ」

たんこぶが出来た

そのまま馬車から降りる

丁度今、蛇姫の鱗のジュラさんが入っていくところだった

「ああゝ・・・疲れた」

「いやまだ馬車降りたばかりじゃん」

おや？

見ると玄関の脇に何か飾られている

エリゴールだった

まあ無視

「とりあえず入ろうぜ？」

と入った瞬間

「オラァ！！」

ナツがパンチを放ってきた

普通に回避

「あう！！」

勢い余ってウエンディにナツの足がぶつかる

「「「リヨウ!」」」

グレイとエルザ、ルーシィがこっちへ走ってきた

「よっす久しぶり」

「てめえ今まで何処行ってた!」

ナツが聞いて来たので

「化猫の宿」

即答

「もっと早く帰ってくれば良かったのに」

「一昨日目を覚ましたばっかなのに無茶言っつな」

「本当に不死身だったんかお前は・・・」

グレイがこっちを呆れながら見てくる

「話さなかったっけ?」

確か話したと思っただけども

「本当とは思わなかったわ・・・」

そりゃそうだ

まあ再開の挨拶はスルーして

それぞれ自己紹介

「化猫の宿から来ました、ウエンディです」

「同じく・・・フック船長です」

「ピーターパンです」

と上からウエンディ、暦、俺

「ちゃんと本名乗ってください!!」

ウエンディが突っ込む

「「ナイスツックミ」」

同時

妖精の尻尾の面々はこのやり取りを見て特に何も思っていない

俺はいつもこんな感じだったからな

「改めまして、パフュームです」

「だからちゃんとやってください!!」

「ツツコミうまくなったな〜ウエンディ」

「毎回毎回リヨウさんやコミさんがこんな事やってれば嫌でも慣れますよ・・・」

会ってからずっとこんな感じでした

おかげでウエンディのキャラが完全に変わってしまった

「峻、いい加減ちゃんと名乗ってやろっぜ?」

暦が俺に言う

「そだね、青崎峻です」

「四月朔日暦です」

改めてちゃんと名乗る

ウエンディがため息をついている

「コレで全てのギルドがそろった」

ジユラさんが普通に話を進める

そういえば

「シャルルは?」

「あそこです」

見ると少し離れた位置で立っていた

最初の頃はウエンディと一緒に突っ込んでいたが最近はスルー

我関せずを貫いている

「「「猫!」「」」

青い天馬の三人が同時に言う

ハッピーがシャルルに一目惚れしたらしい

なんか見てる

だがシャルルはフンと顔を背けてしまった

ちなみに化猫の宿のメンバーは俺を含めても12、14の子供しかない

俺と暦が14

ウエンディが12

でも案外リアクションは無い

ぶっちゃけ言っちゃうところにいるメンバーで面識が無いのは青い天馬の4人だけでそれ以外はよく見ると全員面識があった

ジユラさんとは聖十の称号を貰ったときに会った

蛇姫の鱗のメンバーは言うまでもなくデリオラの時に

ウエンディだけなんというか仲間はずれにされたと思っているのか
色々言っているがスルー

暦も同じく

弱気なのはあまりかわっていない

「あの子達将来美人になるぞ」

「今でも十分かわいいよ」

青い天馬の3人がなんか言ってるな

するとその内の一人が

「さ、お嬢さんたちこちらへ」

とこつちへやってきた

俺と暦は拒否（物理的に）

ウエンディも拒否すりゃいいのに

流されてテーブルに連れて行かれた

ご愁傷様

とこんな事をやっている

「さて・・・全員そろったようなので、私のほうから作戦を説明しよう」

と顔のごつい小さい人

たしか一夜

が作戦を説明しようとする

だが

「とその前にトイレの香りを」

とトイレに向かった

「オイ!!」

「そこは香りってつけるな・・・」

と誰かが突っ込んだ

数分後

「ここから北に行くとワース樹海が広がっている、古代人たちはその樹海にある強大な魔法を封印した、その名はニルヴァーナ」

一夜が言った名前に皆が反応する

皆知らないらしい

「古代人たちが封印するほどの破壊魔法という事だけは分かっているが」

「どんな魔法かはわかっていないんだ」

「六魔將軍が樹海に集結したのはきっとニルヴァーナを手に入れるためなんだ」

「我々はそれを阻止するため、六魔將軍を討つ――！」

という事らしい

作戦か？コレ

話はまだ終わってなかったようだ

「こっちは14人、敵は6人、だけど侮っちゃいけない。この6人がとんでもなく強いんだ」

すると青い天馬の一人

確かヒビキだったと思う

が魔法で敵の映像を見せながらそれぞれ説明する

それぞれがギルド一つぐらいなら1人で潰せる实力を持つらしい

「あの・・・あたしは頭数に入れないで欲しいんだけど・・・」

「私も戦うのは苦手です」

とルーシィとウエンディが言う

シャルルがウエンディを叱る

「安心したまえ、我々の作戦は戦闘だけにあらず。奴らの拠点を見つけてくれればいい」

「拠点？」

「今はまだ奴らを捕捉していないが樹海には奴らの仮設拠点があると推測される」

「もし可能なら奴ら全員をその拠点に集めて欲しい」

とここで一旦質問タイム

「見つけ次第その場で倒しちゃってもいいんですよね？」

と暦

「難しいが可能ならそれでもいい」

という返答が帰ってきた

「集めてどうするのだ？」

とエルザ

「わがギルドが大陸に誇る天馬、クリスティーナで拠点もろとも葬り去る」

とのことらしい

「てか・・・人間相手にそこまでやる？」

ルーシイが呆れ気味に呟く

「そういう相手なのだ。よいか・・・戦闘になっても決してひとりで戦ってはいかん」

とジユラさんが答える

するとナツが6人まとめて相手してやらう！！

と意気込んで出て行った

他の皆もそのまま勝手に出て行った

残ったのは一夜、ジユラ、俺と暦

ジユラさんが呆れている

さて

「一夜さん」

先こされた

暦が一夜に話しかける

「うん？」

仕方ない

「「ちょっと死んでください」「」

言うと同時に暦が刀を抜く

そして

「射殺せ、神槍」

言うと同時に暦の刀がとんでもない速さでのびる

「ぐあー!!」

刃が一夜の心臓に突き刺さった

暦はそれだけでなく刺さった刃を上に向け思いっきり上に切り裂いた

一夜が悲鳴を上げる

すると一夜の体がボコボコとアワを立て

一夜が分裂した

そのまま一夜は変なぬいぐるみみたいな奴になって消滅した

ジユラさんは呆気にとられている

「に、偽物？」

「そだね、多分トイレに行ったときにでも入れ替わったんだと思うよ？」

「双子宮のジエミニ、六魔将軍の一人が精霊使いだったんだと思う」

俺と暦が言う

ジユラさんはなんか感心してる

「よく見破ったな・・・」

「まああの精霊を出したやつはとっくに逃げたかな。とりあえずト

イレで寝てる一夜さん起こしてきて?」

「分かった」

男子トイレに俺と暦は入れない

さて

「俺たちはナツを追いますか」

「ああ」

と言う訳でそのまま進む

俺は翼で

暦は瞬歩を使う

丁度エルザが倒れたところだった

暦が正解、虚化の天鎖斬月で月牙天衝を放ち奴らがトドメを刺そうとするのを止めた

「誰だ!!」

ブレインが叫ぶ

「通りすがりの死神と異常です」

「通りすがりつつーか作戦どーり来たわけだけど」

作戦も何もねーな

「フン、雑魚が何しに来た」

レーサーが言う

「お宅ほどじゃねーですよ」

「ねえ」

ぶちんという血管が切れたような音がする

「死ねえ!!」

レーサーがナイフを持ってこっちへ突っ込んできた

俺は懐からとあるバットを取り出し

打った

カキンという爽快な音が鳴り響く

レーザーは空高くどこかへ消えた

「レーザー――――！！！」

ブレインが叫ぶ

顔の紋様が一つ消えた

「ホームランバット」

「お前……」

なんか暦がこっちを見てる

「異常だけじゃないのかよ」

「暗器使いを使うためにいくつか特殊な武器を」

「特殊すぎるよー！！」

さーて

「無双タイム、というわけで頑張れ暦」

「僕一人かよ……」

「俺はエルザ辺りの治療に回るわ」

「はぁ・・・分かったよ・・・」

SIDE OUT

「なんだ？ たった一人でやる気か？」

ブレインが問う

「そうだよ」

僕はそう言い返した

峻め・・・ぜってえあとでボコる

「万象一切灰燼と為せ」

「何を言っている」

ブレインの声を無視し続けた

「流刃若火」

瞬間、自分の周りの気温が一気に上がる

ブレインたちの顔は見てて笑える位に絶望に染まっていた

火柱が何本も天高く上がっている

「うわーすごいね」

峻がその光景を見てなんかテンションをあげている

ムカつく

「はぁ・・・めんどくさいな・・・オイ、六魔將軍」

声色を変え、話す

「今はこっちも全滅寸前の状態だから今だけ見逃してやる。失せろ」

「なんだと？」

「言つたる？一時休戦、こっちは壊滅状態だし、こっちとしては一旦休みたいわけよ」

「・・・」

「言う事聞かないなら5人まとめて炭にするだけだけど」

その言葉が決定的だったのか

あっちは一瞬で一人やられている

こっちは2人（ジュラさんも含めれば3人）だけとはいえチート二人

体制を整えなければ勝てないと悟ったのか一時撤退して行った

「さて、一旦帰って作戦練りますか」

刀を通常の状態に戻し背伸びをする

「お前さ、あれ結構ラクに勝てたんじゃない？」

「さーてね」

峻の問いに適当に答える

「エルザたちは？」

「大嘘憑きで治しといた」

「あつそ」

とりあえず皆の意識が戻るのを待つことにした

お久々（後書き）

なんか・・・微妙

やっぱチートキャラは1人で十分ですねえ

今回は暦を活躍させたかっただけです

それじゃまた次回

第一回ニルヴァーナ争奪ゲーム（前書き）

こんにちは

特に書くこともないんですけど

第一回ニルヴァーナ争奪ゲーム

「こんにちは」

俺は今、六魔將軍の拠点に来ている

なぜかって

ちょっと遊ぼうと思ひまして

「な、貴様！どうやってここまで・・・！」

ブレインが俺を見て臨戦態勢に入る

普段なら特に気にしないで攻撃してきたんだろうけど

不意打ちとはいえレーサーを殲殺したんだからそりゃ警戒しないはずないか

「どうやってって、普通に」

先ほどのブレインの問いに適当に答える

「外には傘下のギルドの連中がいた筈だが」

「ああ、アレね、全滅」

「は？」

「いやだから、全滅させたって」

「なんだと!？」

ブレインが驚愕する

「バカな! たった一人で全滅させられるような数ではないぞ!」

「たかが傘下だろ? 10分あれば十分」

「・・・それで、我々のところへ戦いに来たと?」

ブレインが問う

「いやいや、今回は戦いに来たんじゃなくて、ゲームの誘いさ」

「ゲーム・・・だと?」

「第一回ニルヴァーナ争奪ゲームってどこかね、5対5のゲーム。明後日スタート」

その言葉にブレインとその他4人が呆れる

「つかさ、ブレインだけじゃなくてお前らもなんか喋れよ、いやっぱいいやめんどい」

（（（どっちだよ!）））

4人の思考が一致した

「とりあえずゲームに必要なもん渡しとくけどまだつけんなよ。あぶねーから」

そう言つて俺は腕輪を5つ投げる

それから鍵を5つ

「何だコレは・・・」

「このゲームに必要なもの。ルールブック渡しとくけど一応説明もしとくわ」

てことで

ルール

各自腕に腕輪をつける

フィールドはこの辺り半径2km

敵の持っている鍵を奪えば腕輪が外れる

5つの内4つはダミー

殺すのは無し

気絶させるなりして奪う事

本物の鍵がどれかは不明

俺らは14人いるんで選抜した5人のみが行く

それと、腕輪を無理に外そうとすればその場で毒針てきな物が刺さるから注意

「俺に毒は効かねえぞ」

コブラが説明の途中で喋る

「ああ、その点については問題ない」

毒針的なのいったらう

決して毒針じゃない

毒針的な何かだ

考えるな！感じるんだ！

「まあルールは大体こんなもんか・・・」

「断る・・・と言ったら？」

ブレインが問う

まだかなり警戒しているようだ

「断れば仕方ない、この場であんたら全員殺すだけだし」

「そう簡単に殺せるとでも？」

「もういつでも殺せるさ、俺が右手をちょっと動かせばもう首がスパーンと飛ぶ」

曲弦系使ってます

「出来るわけが・・・」

ブレインが最後まで言う前に右手を数mm動かす

瞬間、コブラが倒れた

「なっ！・・・何をした・・・！」

ブレインの顔の紋章がまた一つ消えた

「まだ気絶させただけだね、あいつ確か他人の考えてる事が読めるらしいし・・・先にやっというた」

「・・・」

ブレインがこっちを睨む

「そんで？やるの？やらないの？」

「・・・分かった」

「よし」

というわけで

「明後日、ニルヴァーナ争奪戦やることになった」

「「「なにやってんだお前はああああああ」」「」」

叫んだのは暦とウエンディ、ルーシィを除く全員

暦とウエンディには馬車の上でとくに話してた

ルーシィは自分が参加しなくても大丈夫そうだということから

「いやでもさ、死人が出る可能性がなくなっただからいいじゃん」

「まて、そのルールだとどちらかの腕輪が外れないぞ」

エルザが言う

「腕輪の事？それなら問題ないさ、あっちが外れればこっちも外れるし、こっちが外れればあっちも外れるようになってるから」

「5人というのは？」

「俺と暦、ジユラさんとエルザはまあ決定」

「残り1人は？」

まあそこはジャンケンなり適当に決めようか

一夜はもう戦えるとは思えないんでスルー

となると

「ナツかグレイ、あとリオンとかその辺かな・・・」

てかもう原作なんて知ったこっちゃないですよ

そもそも前回の楽園の塔編でジェラールを改心させた時点でニルヴァーナの封印が解けることも無さそうだし

まあ勝ったら俺が封印解いて破壊することにしてんだけど

ちなみに

あっちがルールを破ってニルヴァーナの破壊を邪魔をしたとする

そうなったら俺と暦でもう二度と逆らえないように虐めまくるから

「あっちは負けたら評議院におとなしく連行されるよーにと約束取り付けたし」

それも破った場合上記と同じく

とここまでで説明終わり

多分大丈夫

「ゲーム開始は明後日な、こっちも準備とかあるから」

「分かった」

どうやら皆納得したようだ

ナツはもう最初っからやる気満々

まあ最後の一人はナツかな・・・

ってオイ、青い天馬まったく出番ないやん

「そうそう、俺らの腕輪にもちゃーんと毒針的なものは付いてるから」

「なんだと!？」

「そーでないと公平じゃないし」

「お前はふざけているのか!？仲間まで命の危険にさらしてどうする!！」

「無理に外そうとしなければ刺さんないんだから大丈夫だよ」

ちなみにその辺は神の判断

なぜ協力してくれたのかって

神がどうやら100人目を殺したらしく

それで仕事クビになって住む所がないから今回の件に協力してくれ
たら居候させてやるという条件で

「というわけでちょっと準備の為に一旦妖精の尻尾にもどるわ」

「ただいま」

1時間ほどで戻ってきた

「早いな・・・」

「みんな驚いてたよ」

「そりゃ死んだと思ってた奴が生きてたら驚くだろう・・・」

暦が呆れている

ちなみに青い天馬だけでも

ニルヴァーナについての情報を貰った後は用済みなんで
帰っていただきました

「あとマスターに怒られたな」

「そりゃそうだ・・・」

ちなみに何しに妖精の尻尾に戻ったかって言うと

「フリードに術式を教えてもらってたんだよ」

「術式？」

「ああ、この辺り一帯を囲つといた。腕輪をつけてる者は出られな
いって条件で」

「ナルホドな」

ちなみにいまこの場にいるのは暦だけだ

他の皆は青い天馬のマスターの別荘で休んでる

「思ったより早く終わったな・・・」

「ふーん」

「ジェラール探してみたらさ、なんかニルヴァーナの封印場所と封

印の解除法を思い出して丁度破壊しに行くところだったからやり方だけ聞いて帰らした」

「そっか」

さーて

明後日までなにすっかね

第一回ニルヴァーナ争奪ゲーム（後書き）

なんかすみません

こうでもしないとニルヴァーナの破壊が出来ないんですよ

そもそもジェラルルがいないのに六魔將軍が動くって時点でもう駄目駄目なんですけど（呆）

まあその辺はスルーで

なのでこういう形になりました

ニルヴァーナ争奪ゲーム

第1回と言っても2回は無いですけどね

それじゃまた次回

ゲーム開始（前書き）

V S ジェラルルを書き直すかと思っています

それじゃどーぞ

ゲーム開始

「・・・」

めんどくさい

ものすごいめんどくさい

自分から六魔將軍にゲームをすると言ったくせに当日になってある理由からとてつもなくめんどくさいと思っている

「ど、どうしたんだリヨウ・・・なんだか機嫌悪いぞ・・・」

エルザが若干引きながら聞いてきた

「・・・今日の朝の事だ、起きたら空き巣が入ってきていてな、それでとりあえず叩きのめしておいたんだが、その時にまだ読み終わっていない本が燃えた」

あの空き巣、捕まえようとしたら魔法はなってきやがった

ムカついたんで爪を10枚ほど剥がしたんだが

やっぱまだいらいる

「なので、今日の俺は自分でも引くほど機嫌が悪い」

エルザが呆れている

つか完全に引いてる

暦はもう我関せずを貫き

ナツはビビッてる

ジュラさんはなんというかやっぱり引いてる

ハッピーは本能的に距離をとっている

ちなみにハッピーは数に入らないことになっている

あっちもコブラがキュベリオス連れてるし

まあそんな感じ

「はぁ・・・」

この鬱憤を六魔將軍で晴らそう

と俺は心に誓った

「そんなこと誓ってどうする・・・」

エルザが呆れてぼやく

で

「全員そろったっばいね」

あいつらの事だから恐らく戻ってきたであろうレーサーも連れてくるかと思ったけど

どうやら連れていないようだ

一応受信感度で確認

ふむ

予想通り戻ってきては居たけども、ホームランバットで数百m上空から地面に叩きつけられて四肢を骨折して動けなくなっているらしい

「というかりョウ、いつの間にかすっかり機嫌が元に戻ってるよう
な」

「六魔將軍で鬱憤を晴らそうと思ってるから今はとりあえず形だけは」

「・・・」

あまり言つと八つ当たりされそうだとも思っただのか

こっちのチームの5人が全員だまる

「さて、そろそろ始めるか」

言った途端、六魔將軍の5人が臨戦態勢に入る

ミッドナイトもどうやら起きているようだ

「よいい」

俺は懷からとあるスイッチを取り出す

「スタート」

押した

瞬間

ボンッ！という爆発音が10発

この場に居た10人全員が空高く飛ばされた

「「「「わああああああああああああああ「「「「

いくつもの悲鳴が上がる

「くっ！」

「おっと、サンキューハッピー」

キュベリオスを連れているコブラ

ハッピーを連れているナツの二人は完全に飛ばされる前に空中で止まり対峙する

というわけでナツvsコブラ

ほか8人（俺と暦は止まろうと思えば止まれたがそんな気分でも無いんで）

は散り散りに森の中へと飛ばされた

飛ばされた方向を見ると

暦とブレイン

ジユラさんとホットアイ

エルザとエンジェル

という感じで落ちていく

俺の近くはミッドナイト

突然すぎて反応できないということは無いだろう

てかルールブックに載せてたからこのルール

ちゃんと見てなかったやつだけわからない

ルールブックにはばらばらに飛ばすとしか書いてなかったけども

とりあえずまとめ

コブラvsナツ

ブレインvs暦

エルザvsエンジェル

ホットアイvsジュラ

ミッドナイトvsリョウ

という感じだ

さて、虐めですか

SIDE OUT

SIDE 三人称

「はあ、はあ、――！」

ミッドナイトは逃げていた

後ろからはあたりの木や地面、草やらなにやらを腐らせながら敵意

と殺意を撒き散らして追ってくる奴が一人

てかりヨウ

「なんなんだアイツは・・・ボクの魔法をコピーしただと!？」

幻覚も通用しない

魔法も通用しない

使っても同じ魔法で返されるというのは恐らくミッドナイトに
ても最初で最後のことだろう

ゲームが始まってから10分程度しか経っていない

その間にミッドナイトはすでに追い詰められていた

自分は最強、その自信を完全に崩された

「おいおい、逃げてんじゃねーよつまんねーな」

「ッ!?!」

いつの間にか回り込まれている

(やばい、こいつはやばい)

「なにビビッてんの?最強じゃなかったっけ?」

リヨウはミッドナイトに近づく

周りの木々や植物を腐らせながら

「あゝあちよつと脅しただけですぐコレだよ……コレだから闇ギルドの連中は虐め甲斐がある」

最初の一言は残念がるようなくさだったのが

後半、完全に笑っている

「さてつと」

リヨウはあたりのものを腐らせるのをやめ近づき

「まあ存分にビビッてくれや」

ミッドナイトの心の傷を開く^{トラウマ}

「
×××××」

さらにその心の傷をえぐる発言

ミッドナイトはたったそれだけで意識を失った

「やりすぎたか……大丈夫か？こいつ」

倒れたミッドナイトを見てつぶやく

SIDE OUT

S I D E リ ョ ウ

「気絶したフリとかじゃないよな、鍵を取ろうとした途端起き上がって心臓一突き、とかそんな卑怯な真似しようなんて考えてないだろうな・・・」

一応受信感度で確認

「うえ・・・」

うん、やりすぎた

ちょっと読んだだけで気分悪くなったわ

まあでもスッキリしたわ

憂さ晴らし完了みたいな

「っと、鍵鍵っと」

ミッドナイトの懷から鍵を探す

「あつたあつた」

そのまま腕輪に鍵を差し込んだ

押しても引いても回しても捻っても鍵は開かない

「ダミーじゃん」

ちなみにダミーと本物の差

約0・数ミリ程度の形状の違いしかないらしい

なので一目見ただけじゃ同じ鍵にしか見えない

それでも開くのは本物のみという

どんなに叩こうが削ろうとしようが傷ひとつつかず0・000000
1mmの傷すらもつかない

地上には無い素材を使っているからだそうだ

「そんなんどうやって作ったんだ？」

加工もできないものをどうやって作ったのか

あんなんでも神って事が・・・

まあそれは置いて

とりあえずぶっ倒れているミッドナイトをネ拘束ロープで動けない
ようにする

まあこれから生きていこうと思うのかどうかも怪しいが・・・

それほどまでにこいつの心を完膚無きまでに叩き折ったからな

自業自得ということ

なんか自分を最強とかそんなこと言ってたから多少容赦なく心を折ろうとしても大丈夫かなーと思ったんだけどなあ

ぜんぜん駄目じゃん

自分の敵は撃退したし、ほかの奴の助っ人にも行こうか・・・

ゲーム開始（後書き）

てことで戦闘描写の少ない回でした

もともとあまり多くなかったような気もするけども

ちょっとやり過ぎたか

次回は暦視点とかで行こうと思ってます

それではまた

主人公不在（笑）（前書き）

遅れましたすみません

受験終わって浮かれてました

前回言った通り曆視点です

でもあまり期待しないでww

それではどぞー

主人公不在（笑）

「迷った」

僕は深い森をふらふらとさまよっている

ブレインと戦っているのではなかったのか？という疑問が浮かぶだろう

それに関しては森をさまよう前、大体2　30分ぐらい前にさかのぼる

峻が押したスイッチで六魔將軍含め全員が宙高く飛ばされた

その直後のことだった

ブレインが魔法をこちらへ向けて空中で放ってきたのである

まあ別にたいした問題はなかったが・・・

こっちも銀嶺小雀で相殺した

その結果

技と技がぶつかり合った結果、爆風が起こり僕とブレインは思いきり飛ばされた

怪我については特にしていないがそのせいでブレインと思いきり離れてしまった

なので現在ブレイン（別の六魔将軍でも問題なし）を捜している所
なのだが・・・

「迷った」

というわけ

マジで困った

このままでは僕出番なしで終わるんじゃない？

「まいったな・・・」

独り言を呟いていると後ろに強い衝撃と激痛が走る

「・・・ッ!!」

僕はそのまま吹き飛ばされうつぶせに倒れて止まる

「っッ・・・」

さっきまで僕が立っていた所にはブレインが立っていた

ドヤ顔である（恐らくブレインはドヤ顔をしているつもりはないと
思うが）

「捜したぞ・・・」

そう言って一歩ずつこちらへ近づいてきた

搜したぞ、はこつちが言いたい

どんだけ歩いたと思つてんだこのやろー

と悪態をつきたいがそういう状況でもない

やばい・・・背中痛い・・・

僕はよろよると起き上がる

これはまずい・・・血が止まらない・・・

早く治療したいがその余裕もあまりない

一瞬で怪我をなかったことに出来る峻の大嘘憑きがうらやましいな・
・・・畜生

「ミッドナイトもやられ・・・エンジェルもやられた・・・ホット
アイも・・・後残っているのは私とコブラのみ・・・か・・・」

ブレインが勝手に現在の戦況を言う

別に聞いてねえし

いつの間にかそんなに進んでたのか

・・・このままだと僕一番最後？

それは嫌だな

「おいブレイン・・・あまり余裕も・・・ないから・・・さっさとやるぞ・・・」

僕は息絶え絶えの状態で刀を抜く

もう相手の生き死になんて気にしてる場合じゃない

多少強いやつ食らわせても大して問題はないだろう

虚化し虚閃を放つ

「!？」

ブレインは慌てて横に跳んだ

着弾したところが爆発しその爆発にブレインも巻き込まれる

「ぐああ!」

短い悲鳴を上げブレインは木に叩きつけられた

体制を立て直そうとしたブレインに容赦なく虚閃を放つ

「ぐう・・・ッ!」

ブレインは走る

背後から虚閃を放つ

放っ

放っ放っ

放っ放っ放っ放っ

放っ放っ放っ放っ放っ放っ放っ放っ

「ぐあああああああああああああああ」

悲鳴が上がる

吹き飛ばされ木に強く叩きつけられる

そのままブレインは気絶した

仮面が碎け虚化が解ける

「はぁ・・・」

あゝ意識がもーろーとしてきた

ふらふらする

とりあえず盾舜六花で背中中の傷を拒絶する

「助かった・・・」

とりあえず傷は治った

こっからどうしよう・・・とか考えていると

「ぐ・・・ぬう・・・」

ブレインが起き上がった

「まだ動けたか・・・」

と言ったものの

すでにブレインは限界のようだ

生まれたての小鹿みたいになってる

フラッフラだ

「負けるわけにはいかぬ・・・」

ブレインがこっちを睨む

「六魔が負けるわけにはいかぬのだ!!!」

そう叫んでブレインが魔法を放つ

「常闇回旋曲!!!」

最後の力を振り絞ったとかそんな感じだろう

結構威力高い

即座に虚化し虚閃を放つ

常闇回旋曲は虚閃により打ち消される

「ぐ……ぬ……」

最後にうめきのような声を上げブレインは倒れた

「終わった……」

鍵を回収せずその場にへたり込んでいると足音が聞こえた

振り向くとエルザが立っていた

「おつかれ」

とりあえずエルザに労いの言葉を言う

「あ、ああ」

なんか呆れてる

多分ここの現場の惨状を見ているのだろう

木々は吹き飛びなぎ倒され地面にはいくつものクレーター

ついでに血、血、血

まあ主に俺の血だけでも

あと少しでも治療が遅れたら出血多量で死んでましたね

ブレインの血は無い

噴出す間もなく消滅した（笑）

今ブレインが生きているのは運がよかったからだろう

「後はコブラで六魔將軍は壊滅らしいよ」

「そうか・・・」

「・・・・・・気まずい

なんというかエルザとはまったく喋った事がない

その上この惨状を見て呆れたエルザはあまり喋らない

こっちも喋りづらい

結果、気まづくなった

「とりあえずさ、峻とかジュラさんとか捜しにいかないか？」

「・・・そうだな・・・」

エルザも気まづかったのかあっさり承諾してくれた

とりあえず峻から捜すことにした

主人公不在（笑）（後書き）

なんか微妙な終わり方

でももう曆視点はやらないぜ！（多分）

次回は峻の視点に戻ります

実は久々すぎて峻の漢字を忘れていた作者です

それじゃまた次回～～

ゼロ（前書き）

少し遅くなりました

実際特にやることも無いのにいざ書こう！と思うとネタが浮かばず書いたとしても半分書いたところでとてつもなくひどい駄文になるということが続きます

まあ・・・スランプ？

「レイトウ本マグロ」この単語を聞いた途端に今回のネタを思いついた今日この頃（笑）

それじゃどぞー

ゼロ

「リョウ・・・なんだそれは・・・」

「・・・」

合流したエルザが開口一番に言ってきた言葉がコレだった

曆もいる

あきれてる

「ソレ」とは恐らくロープに縛られ俺に引きずられているヤツの二つを刺しているのだろう

「なにつて・・・ミッドナイトだけど」

「・・・」

最早面影がない

目はうつろで髪はぼさぼさ（もともと）

雰囲気からして暗い

最初に見たときとは違うベクトルの暗さ

「やりすぎちゃった!」

と開き直ったらエルザが呆れた

俺が得意なのは多分精神的に殺すこと

暦はそのままの意味で殺すことが出来るけど俺の能力は異常

精神攻撃の方が多分得意

普通に攻撃してもそこまで高い威力の異常はないし

それだったら致死武器で心の傷を開いたり最近使えるようになった
不慮の事故で自分のストレスやらなにやら全部押し付けてやったほ
うが威力は高いかもしれない

「その結果できたのがこのミッドナイトです」

「・・・」愁傷様・・・」

暦が小さく呟いた

さて、とりあえず話を進めよう

こっからは特に話すことも無いのでさっさと進めよう

まず六魔将軍も残り1人

コブラ・・・ではなく

ゼロである

コブラならついさっきゼロに殺されてた

そういえば仲間を殺してはいけないうってルール作ってない

結果、コブラはさっき目覚めたゼロによって殺された

その後駆けつけた（？）俺たちが見たのはナツに執拗な攻撃を加えるゼロだった

「って展開早過ぎだろおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

突っ込んだのは暦

現在俺はゼロと対峙している

「おいブレイン、それ以上はルール違反だ」

俺はナツに攻撃を加えようとするゼロに言い放つ

「ルール？知るかそんなもん。俺はただ壊したいだけなんだよ・・・
まだこいつは壊れてねエだろうが」

嫌な笑みを浮かべながらゼロは言う

「それと俺はブレインじゃねえ。六魔將軍のマスター・ゼロだ」

「闇ギルドにマスターなんていたのか」

露骨に驚いたフリをする

「お前らみたいなヤツにマスターが必要なのかどうか疑問なんだけどその辺はスルーしてこうかエロくん」

「エロじゃねえゼロだ」

口しかあつてねえと付け加え

「そうか、それでネロ君、いい加減ナツに蹴り入れるのやめねーとルール違反ってことで腕輪の毒がお前に入るんだけどそこんとこ分かってる？まあそうなればこっちは不戦勝ですむんだけど」

記憶共有してないのか？

「そーだったそーだった、あぶねえあぶねえ・・・まだ全員潰して

ねーのに危うくゲームが終わっちまうとこだった」

ソレと俺はネロじゃねえ、ゼロだと付け加え

「そうだよパトラッシュ？それよりそろそろラストゲーム戦闘を開始しようかと思っただけどどうだろう」

「そうだなあ・・・それと俺はパトラッシュじゃねえ・・・ゼロだっ！！！！！！！！」

言つと同時にゼロがこっちへ常闇奇想曲を放つ

たしか貫通性の魔法だっけ

俺は懷から武器を取り出し応戦する

「レイトウ本マグロ・・・G！！」

取り出した武器はモンハンより抜粋

レイトウ本マグロG

「なんだそのふざけた武器は？」

ふざけた武器とは心外だ

それでも切れ味はそこの剣とは比べ物にならないくらいいいんだが

「ぶっ壊してやるよ！！」

笑いながら出力を上げる

「壊せるもんならな」

いや簡単に壊せそうなんだけど！？とエルザが言いかける

言いかけると言ったのは言っていないから

受信感度あるから思ってることは筒抜けである

「そい！！」

レイトウ本マグロGを上思いつきり振り上げ魔法の軌道を変える

レイトウ本マグロGを仕舞いキングエビィーガンGとロイヤルエビィーガンを取り出す

弾丸は魔弾

オリジナル

「今日はモンハンまつりいーーーー！！」

テンション上がってきたーーーーー

連射する

乾いた音が連続で響き渡る

「ちい！」

魔弾の効果は魔力を持つ者の魔力を削る

そのため魔弾の威力は低いが仮にもモンスター討伐用の武器である

ゼロの表情が少し苦くなる

「なめてんじゃねえぞ！！常闇回旋曲！！」

ゼロは常闇回旋曲で飛んでくる弾丸を消し去る

「無駄無駄無駄無駄あ！！封龍剣【真絶一門】」

キングエビィガンとロイヤルエビィガンを懷に仕舞い封龍剣【真滅一門】を取り出す

剣に魔力を纏わせ常闇回旋曲を切り裂いた

「なにっ！！？」

ゼロが驚愕する

「びつくりしてる場合じゃねえだろおがよおお！！」

テンションあがってキターーーーーー

なんでだろうね

さっき食べた七色のきのこのせいだろうか

この世界で見つけたオリハルコン

そいつを使って作った火の魔水晶入りメリケンサックを手に付け腹を殴る

着弾箇所が爆発した

「がはぁ！！！！」

口から息を吐き出しゼロはうずくまる

「壊す壊すって言うてたくせにこの程度か？」

モンハン祭りはここまでだ

終わるの早いぜ！

「なめてんじゃねえぞ・・・」

ゼロの周りに魔力が集まる

「我が前にて歴史は終わり、無の創世記が幕を開ける・・・ジエネシス・ゼロ！！開け、鬼哭の門」

辺りが黒く染まり悪霊のようなものがまとわり憑いて来る

うっとおしい

「消えろ・・・TNP版エーテリオン」

説明しようTNP版エーテリオンとは

魔力のコストを抑え自分ひとりでも放てるようになったエーテリオンである

まあTNPというのはあるCMから抜粋させていただきました

そのエーテリオン斜め45度の方向に向けて放った

ゼロの魔法がエーテリオンによってかき消される

元のエーテリオンより効果範囲が狭くなっているが威力は変わらない
周りの悪霊のようなものは余波に巻き込まれすべて消え去った

「・・・」

ゼロがあっけにとられた顔をしている

「ば・・・かな・・・」

「俺たちの勝ちだ」

宣言してゼロの鳩尾に蹴りを放つ

ゼロはそれで気絶した

その後

俺はゼロの鍵を奪い腕輪の鍵穴に差し込んだ

すると俺とエルザたちの腕輪が外れるとともにゼロたちの腕輪から光の縄のようなものがでてゼロたちを拘束した

その後、評議院のやつら呼びこいつらを捕まえてくれるよう言った

もちろんホットアイにはつかまる前にウォーリーが現在世界中を旅していることを伝えた

死んだコブラもそのままだと評議院が何を言つか分からないので一応生き返らせといた

その後ニルヴァーナの封印を解き自立崩壊魔法陣でニルヴァーナを破壊した

そんなこんなで六魔將軍は壊滅した

後日談というか今回のオチ

やっとちゃんと使えた

俺たちがいるのは化猫の宿

ニルヴァーナを破壊したことの報告、それと俺は妖精の尻尾に戻る
のでその挨拶も兼ねている

後から分かったんだがニルヴァーナを作ったのはニルビット族でそ
の末裔が化け猫の宿のメンバーだそうだ（ウエンディ、暦を除く）

そっぴゃそんな設定あったね

ルーシイたちは終わったあと合流し、今ここの服を見ている

織物が盛んだからいろんな服がある

俺は最初に来たときに何着か貰っているんで先に広場に集まっていた

「暦ー」

「ん？」

「これからどーすんの」

「あー・・・とりあえず僕も妖精の尻尾に行こうかと思ってる。つ
ーかさ」

「何？」

「なんで神バカがいるの？」

こいつ暦のとはたずねてなかったのか・・・

「仕事・・・首になったんだってさ」

家賃払えなくなったから天界で次の仕事が見つかるまで住まわせてくれとのことだ

「・・・仕事だったのか・・・あれ・・・」

呆れてる

「らしいね」

六魔倒した途端に俺のところに落ちてきた

三回転ぐらいして着地、敬礼、「これからお世話になります!!」
と言ってきやがった

自分で不可視とかそういうことが出来る見たいなので俺と暦以外には見えていない

まああっちについてからこいつがいる理由は適当にでっち上げればいいか

妖精の尻尾に所属してみたいとか言っているんだが

「させてやりやいいじゃん」

「マスターになんていえばいいんだよ」

「まあ・・・頑張れ」

「丸投げ!？」

などとくだらない話をしているとほかのみんなも集まってきた

あ後は大体原作どおりなんで割愛

文字数をこれ以上増やすと重くなるし

ウエンディと暦は妖精の尻尾に所属することになった

あとエンジェルの星霊がエンジェルが逮捕されたため契約が解除され行く所がなくなったらしく

「星霊魔導師がいたらだれか使ってくれ」

と言うので丁度ルーシイの持つてるアクエリアスとレオがスコープオンとアリエスの知り合い（っーか恋人同士）だったのでルーシイが貰うことになった

現在船に乗って帰るところである

「あー気持ちいいー」

ナツが乗り物を克服したようだ

っーか単純にウェンディから魔法かけてもらったただけなんだけど

なんかテンション高い

かけたタイミングが原作と違ったため効果はまだまだありそうだ

「リヨウ、なに読んでるの？」

ルーシイが話しかけてくる

俺は船の壁に寄りかかりガンガンを読んでいる

ジャンプではなくガンガン、ここ大事

それにルーシイが興味を持ったようで

「見る？」

「見る」

ルーシーにガンガンを貸す

とりあえずやることも無いので寝ることにした

おやすみ

ゼロ（後書き）

最後投げやりっす

すまん

それじゃまた次回

ギルダーツ（前書き）

こんちわー

こないだ一番最初に書いたとある魔（ry）のプロローグを少し編集しようと思ってみたら・・・もう凄い酷さでした

あまりの文の酷さに10分ぐらい悶えてましたねwww

自分の文才は成長しないままだと思ってましたが意外と・・・

まあ所詮ザクはザクですが

それじゃどーぞ

ギルダーツ

ウェンディと暦が妖精の尻尾に入って数日が過ぎ

俺も女子の生活に慣れてもうちよい女っぽい口調使って見るかな
とルーシィに言われて思った頃

「・・・」

俺はカウンターに突っ伏していた

「ど・・・どうした？」

暦が若干引き気味に聞いてくる

グリーンと首だけ暦のほうへ向ける

「いやさ、今家に神が居候してんじゃん？」

「性格には元だけだな」

「こんなの渡されただけども」

取り出したのはiPad

ちなみに俺の含め2つ

つまり

「一つは僕にと?」

「なんか転生者同士でテレビ電話みたいなのが出来らしい」

「この世界2人しか居ないのに?」

「いや、5人くらい居るらしい」

「は?」

暦が口を開けぽかんとする

「別に神が殺してなくても何かの間違いで流れてきたり憑依したりとかもあるらしい、基本的に原作に関わる気があるのかは知らんけども1人か2人はこのギルドに居るらしいよ?」

「ま・・・マジ?」

「マジ。それとこのiPadな、別にこの世界で無くても通信は出来るらしい」

主にさっき言ったテレビ電話、チャット、メールなどなど

手段はアプリで色々ある

「はあ・・・そりや随分便利なもの作ったな神は」

「現在転生者に配布中、普及率20%」

「少なっ!」

まだ作って日が浅いからな

「まあそんな訳で、ちなみにそれ強度も半端ないらしくてな、エーテリオン全エネルギーを一点に集中させたレーザー方エーテリオンを当てても傷一つつかない優れものだ」

「そりゃ凄いな・・・つかありえねー」

「俺でも壊せない。ラフレシアでもエーテリオンでも大嘘憑きで無かったことにも出来ない」

「無かったことにすんなよ」

「まあさすがは神製と言ったところか」

ちなみに突っ伏していたのは眠いから

昨日、宮咲って奴と柴葉（兄）って奴とチャットアプリでドラ○エについて熱論してた

（兄）てのがよく分からんけども

気づいたら朝になってたんだ・・・

完徹、あっちとは時差があるらしくってあっちは真昼間の学校だったらしいけど・・・

勉強しろ勉強

暇だな・・・悪魔の心臓でも潰して来ようかな・・・

それともゼレフ搜してあの近づいた生き物を問答無用で殺す・・・
あれなんつーんだろ

まあアレを無かったことにしてくるか・・・

「物騒なこと考えてんじゃねーよ」

暦が突っ込む

ばれたか

どうやって暇を潰そうかと考えていると

「大変だー!!」

と誰かが叫んで入ってくる

その直後に鐘が鳴った

いつもとは違うリズムだ

ゴーンゴゴーンと言った具合に

途端に周りが騒ぎ始める

「ギルダーツが帰って来た!!」

「あいさー!!」

ナツとハッピーが騒ぐ

「ギルダーツ？」

ギルダーツを知らないウエンディが呟く

俺もギルダーツは漫画でしか見たことないし出番もあまり無かったからよく知らない

「どうでもいいけどこの騒ぎよう何！？」

周りのお祭り騒ぎを見てルーシイが叫ぶ

真後ろで

俺と暦は同時に耳を塞いだ

「みんなが騒ぐのも無理ないわ」

ミラさんが口を開く

「3年ぶりだもんギルダーツが帰って来るの」

「3年！？」

「3年も何してたんだ？」

興味なさげに暦が問う

「うわぁ・・・全然興味無さそう」

「あるある、めっちゃ興味ある」

暦は嘘が下手なのだろうか

全然興味無さそうな口調でそういった

「もちろん仕事よ」

そんな暦にミラさんは親切に答えてくれた

S級の上にはSS級とか言うのがあってその上に10年クエストがあつてさらにその上に100年クエストとか言うのがあるらしい

それにギルダーツは言ってたそうだ

「でもなんだかんだでここに居る興味なさそうな二人は簡単にクリアシそうだけど・・・」

ルーシィがこっちを見ながら言う

「俺たちってそんな規格外扱いされてたの？」

「個人でエーテリオン打てるような奴とそれと同等とか自称して実際それだけの力を持つてるような奴を規格外と呼ばずになんと呼ぶ・・・」

何時の間に居たのだろう

エルザが呟く

「あれ？楽園の塔の時のあれやっぱ俺がやったってばれてた？」

「当たり前だ」

そりゃあどうもっと

『マグノリアをギルダーツシフトに変えます！町民の皆さん！速やかに所定の位置へ！繰り返します・・・』

外では何か放送をしている

む、別にギルダーツにはほとんど話に絡んでこないしこつちも話しかけられる気もしないから興味無いけど例の町の変形は見てみたい
トランスフォーム
そんな訳で出口近くに移動する

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

などという大仰な音を立てながら街が真つ二つに割れた

ルーシイがいつもどおり過剰なリアクションを取る

その割れた街の間の大きな道を一人の男が歩く

数分経たないうちに入り口を通り入ってくる

オールバックの髪で黒いマントを纏っている中年

「ギルダーツ！！！！オレと勝負しろおおおおおお！！！！」

開口一番ナツがギルダーツに勝負を吹っかける

「おかえりなさい」

ミラさんがギルダーツに近づき労いの言葉をかける

だがギルダーツはここが妖精の尻尾で彼女がミラジェーンということに気づいてないようで

そりゃ3年前ということはミラさんはまだ魔神とか呼ばれてて妖精の尻尾も改装前だったし

ミラさんが名乗ってようやくギルドが新しくなったことに気づいた

「ギルダーツうつうつうつうつうつ！！」

「おおっ！ナツか！久しぶりだなア」

突っ込んでくるナツにそう返す

「オレと勝負しろって言ってんだろ！！」

と殴りかかるナツを

「また今度な」

と言って天井に弾いてめり込ませた

「うわーすげー」

「つかナツはなんでエルザにも勝てないのにギルダーツに喧嘩売るんだろ」

「いやあ、見ねえ顔もあるし・・・ホントに変わったなあ・・・あんたがりヨウって子かい？」

「は？」

「知ってんですか？」

「まああちこちで噂になってたからなア、妖精の尻尾にいきなり昇格試験も受けないでS級になった新人が居るとかなんとか」

マジか・・・後で沈静化させとこう

「その手足の怪我、大丈夫ですか？」

「!!!!・・・お前・・・」

「ギルダーツ」

「おおっ！マスター！！久しぶりーっ！！」

マスターに話しかけられギルダーツはすぐにそちらを向く

話題をそらすためだろうか

多分そうなのだろう

「仕事の方は？」

マスターの問いにギルダーツは笑って答える

「ダメだ。オレじゃ無理だわ」

「そうか・・・主でも無理か・・・」

「スマネエ、名を汚しちまったな」

「いや、無事に帰ってきただけ良いわ。わしの知る限りこのクエストから生きて帰ってきたのは主が初めてじゃ」

「オレは休みてえから帰るわ。ひゝ疲れた疲れた」

ギルダーツはそう言って帰っていった

最後にナツにお土産があるとかなんとか言いながら

それと俺にも後で話したいとかなんとか

多分さっきの怪我のことだろう

無かった事にしたのは不味かったか（笑）

「お前何したの？」

暦が聞いてきた

「怪我無かった事にしてみた」

「・・・お前・・・」

暦が呆れの目で見て来る

「やっぱさぁ・・・原作と同じじゃつまんないよね」

どんな風に物語に影響するか・・・

その前にギルダーツに恨まれる覚悟でもして置こう

名に言われるんかねえ

ギルダーツ（後書き）

やっちゃったZE！

最近アニメがオリジナルストーリーをやっているらしく、その話もやろつかどうか迷いましたがやらないことにしました

ギルダーツが峻に対して怒るのか感謝するのか、さてどっちにするか

峻「決めてないのかよ！！！」

いやどっちのパターンも考えてる

どっちがいいですかね

それじゃまた次回！

サブタイトルが思いつかん(前書き)

サブタイも前書きに書くことも思いつか無い

それじゃどーぞ

サブタイトルが思いつかん

前回のあらすじ

ギルダーツが帰ってきた

なんか話しかけられたからついでに怪我治してみたら家に呼ばれた

そんな訳で現在ギルダーツの家に向かっているところ

「なんでリヨウとコヨミが居るんだ？」

「呼ばれた」

ナツの問いに適当に答える

ちなみに暦が居るのはついてきたから

「じゃあコヨミは？」

「なんとなくついてk・・・ゲフンゲフン、新人として挨拶を」

なんとなくついてきたって言おうとしゃがったよこいつ

「それじゃルーシィやウエンディも呼んだ方がいいんじゃないか？」

ナツが笑いながら言う

「今更戻るのも面倒じゃね？」

「そだな」

諦め早っ！

そんな訳でギルダーツの家に着いた

ドアがない

多分ボーっとして壊すから取り外したんだろうな・・・

「よオ」

「おじゃまします」

「ちわっす」

「邪魔しまーす」

上からナツ、ハッピー、俺、暦

「来たか、ナツ、ハッピーそれとリョウちゃんと・・・」

「ワタヌキコヨミ、こっち風に言ったらコヨミワタヌキです」

「こつち風って事は東洋の方から来たのか？」

「ハイ。こないだ入ったばかりなんで挨拶をと思いまして」

と言ってどこから出したのかまんじゅうをギルダーツに渡す

ギルダーツは礼を言ったあとそのまんじゅうを一旦机の上におく

「さて、まずはリヨウからか・・・話つつーのはアレだ。あんがとな。つーかどうやったんだ？無くなった腕と足、それに内臓まで」

「俺の魔法の一つと言っておきますかね。ありとあらゆる事柄を全て無かったことにする程度の能力？」

東方風に言ってみた

ちなみにラフレシアなら全てを腐らせる程度の能力

不慮の事故なら自らの傷を他人に押し付ける程度の能力

完成なら・・・ありとあらゆる能力を自らのものにし使い切る程度の能力

「何で疑問系なんだよ・・・」

暦が呆れる

「程度ですむかそれ・・・」

ギルダーツも同じく

「さて、ナツ」

「ん？」

「おめえあれからリサーナとはうまくやってんのか？ん？」

ギルダーツは楽しそうにナツに聞く

おっさんかあんたは・・・

いやおっさんだったか

「はあ？」

「てえゝれやがってえ！がはははっ！」

「リサーナは死んだよ、2年前に」

その言葉にギルダーツの笑いが止まる

「マ・・・マジかよ・・・そっか、それでミラの奴・・・うおお・・・ス、スマネエナツ」

「そんな話なら帰んぞ」

ナツは機嫌を悪くしたのか踵を返し帰ろうとする

「ナツってば！」

「ナツ」

ハッピーが引きとめようとすると不意にギルダーツが口を開いた

「仕事先で、ドラゴンに会った」

ナツが目を見開きながら振り返る

さて、俺は帰ったほうがいいのだろうか

「お前の搜してる赤い奴じゃねえとは思うがな、黒いドラゴンだ」

「ど……どこで……」

「霊峰ゾニア、おかげで仕事は失敗しちゃったよチクショウ」

言った瞬間ナツは部屋を飛び出そうとする

とりあえずマフラーを後ろから掴んで止めた

「ぐえ！何すんだ！！」

「行つてどうする？」

「決まってる！イグニールの居場所を聞きに行くんだ！！」

「もういねえよ。あの黒龍は大陸……あるいは世界中を飛び回ってる」

「それでも何か手がかりがあるかしんねえ！！」

ナツが俺の手を振り払おうとするが外れない

結構本気で掴んでるからな

「ナツ、これを見る」

そう言っただけでギルダーツは義手と義足を投げマントを脱ぐ

今はもう治っているが包帯は付けっぱなしだ

血がにじんでいる為さっきまでかなりの怪我をしていたことが分かると思う

ナツとハッピーが驚愕の表情を見せる

「今はその穢ちゃんが無かった事にしたせいで治ってるが、左手と左足、内臓もやられた」

ほとんど一瞬の出来事だったらしい

黒いドラゴン↓強い↓ミラボレアス？

どうでもいい事を考える

「イグニールって奴はどうだか知らねえが、あの黒いのは人類の敵だ、そして人間には勝てない」

「そ、それを倒すのが滅竜魔導師だろ！！オレの魔法があれば・・・黒いドラゴンなんて・・・」

「本気でそう思ってたんなら止めはしねえよ」

その後ナツは飛び出して行った

「はぁ・・・穰ちゃんがこの怪我治さなけりやもうちょい楽に説得できたかも知れねえんだけどなあ」

「それが本音ですか？ギルダーツさん」

皮肉たつぷりに敬語で問う

もちろんお互い冗談だ

つーか治さなくてもほとんど変わらなかったけどな

「ハッピー、お前がナツを支えてやれ。アレは人間じゃ勝てねえが、竜なら勝てるかもしれねえ、いつかきつと」

「・・・」

ハッピーはその言葉を黙って聞いていた

で、数日後

「雨やまないな」

外は大降りですっきりからずと雨が降り続いていた

「今、氷輪丸使ったらどうなるんだ？ 暦」

「さあ？」

外にも出られない為現在モンハンプレイ中

「あ、回復薬尽きた」

「早っ！ どんだけ使ってたんだよ・・・」

レウスワールドツアー止める

「まあ回復薬尽きてもまだグレートあるけども」

「よっしゃタメ3ヒットオオオオオ！」

なんて事をしながら暇を潰す

ちなみにカナは酒を樽ごと飲んでいる

ミラさんとエルフマンはこれから墓参りに行くとか

グレイとジュビアは一緒になってホットドックらしきものを食べている

あ、やべ、プレス当たった

そんな感じで暇を潰していると突然景色が歪んだ

「あー・・・アニメ来ました？」

「だねー」

「エドラス介入する？」

「どうしよう・・・」

「まあここに居る時点でミストガンが勝手に連れてくか」

既に辺りは何もない

みんなエドラスに行ったのだろう

「残ってるのはウエンディとナツ、あとルーシィとガジル、それにミストガンだっけ」

「うん」

恐らく第三者から見れば落ち着きすぎだろうと言われると思う

実際、今言われた

「どんだけ落ち着いてんですかあんならあああああああああああ
あ」

約数週間、それはウエンディをツツコミキャラに改造するには十分な時間だった

サブタイトルが思いつかん（後書き）

オチはアレです

ノリです

約数週間つてのは化け猫の宿に居た時間ね

番外編第3弾書こうかと思うんだが・・・どう思う？

峻「前書きに書くこと無いとか言っておいてここにそれを書くか」

うん

後書きには書くことあったんだ

それで、なにかやってほしいことあったら是非感想にということで

適当にチョイスしようと思う

期間は・・・次回更新するまで

多分1日〜1ヶ月ぐらい？

峻「長いのか短いのか・・・」

それじゃどーぞ

エドラス（前書き）

アンケート期間延ばします

期間はエドラス編が終わるまで

それが終わったら感想とかの中から適当にチョイスします

勝手なこと言ってごめんなさい

それじゃどーぞ

エドラス

「はぁ・・・なんでよりによってリョウさんとコヨミさんしか居ないの・・・」

ウエンディが呟く

「っかどういう意味だ

「チョップ！」

なんとなくその物言いにイラっときたためデコにチョップを喰らわせる

いつもどおり痛ーっ！と叫んだ

「何するんですか！！？」

「言い方を考える」

睨むとウエンディは後退って土下座の体制に入った

「調子にのってすみませんでした」

うん、やっぱり大分キャラ変わってるな

俺たちのせいか

うん、だろうな

正確には暦のせいだけど

「僕のせいにしないでください!」

久々に暦の敬語が出た

切れると時々こうなる

「いや原因はお前にもある」

「ですよね」

俺の言葉をウエンディが肯定

そんなことをしているとギルドがあった場所の一角が突然モコリと盛り上がった

モグラ?

ウエンディが少しビビる

ふむ

「暦」

「おっけ、月牙天衝」

盛り上がった場所に暦が月牙天衝を放つ

ぎゃああああああああああああああああああああと
悲鳴が響いた

クレーターが出来てそこには一人の男が転がっている

というかナツだった

「大丈夫かナツ」

「だ・・・大丈夫じゃねえ・・・」

「なんだナツさんか・・・」

ウェンディは俺たち以外にも居たことにほっとしたのか安心したようにため息をつく

「つかここ何処だ・・・？」

行き絶え絶えの状態で質問する

とりあえず傷はなかったことにしてやろう

「ギルドですよ？覚えてないんですか？」

「は？」

少女説明中・・・

東方か

「・・・ウエンディ。どうか頭ぶつけた？」

「ちがーっ!」

「とりあえずどうかしないとな・・・」

「そうだね」

さーてどうすっかな

「まずみんなが何処いったか分からないとどうにもならないんじゃない？」

「エドラスに行ったのよ」

そう答えたのは、何時の間にかすぐそこに居たシャルルだった

雌猫説明中・・・

また手抜きかよって？

手抜きだよ！あまり長すぎると書くの大変でしょうが！！

それに原作と同じ説明を延々とやるのもつまらんでしょう！

てことでエドラスへ

「ちよつとまて！」

暦が俺を引き止める

「お前こんな手抜きで読者が納得すると思ってるのか！！」

「うん」

「ならしょうがない」

てことで行ってきます

エドラス（後書き）

ええ思っでませんよこれで納得するなんて

でも納得してください

そして理解しろ、これがばふんのやり方だと

はい調子乗りましたすみません

大丈夫です。コミックス20巻を読めば分かる！

前書きでも言ったとおりアンケートは続行中です

内容はエドラス終了後の番外編で何をやってほしいか

それじゃまた次回！

最近不老不死になった（前書き）

安心院最強すぎるだろ・・・人間が消しゴムと同じ価値に見えるってオイ

そしてそいつが勝てないというめだかつて・・・

とかちやつかりメタな発言をしているような気がするんですがそれは気のせい？

西尾維新の作品って面白いよね

それじゃどーぞ

最近不老不死になった

暦 side

「最近不老不死になった」

エドラスに来て早々、変装に便利そうな部屋に落っこちてそこで峻が言った言葉

えーっと不老不死って

「安心院のスキル？」

「その通り」

というか安心院はチート転生オリ主物の小説キャラよりもチートだよな

一京のスキルってなんぞ・・・

さて、どうでもいい蛇足も終わったことだし、峻に視点を戻そうと思う

峻 side

「さーていきなり妖精の尻尾を見つけてしまいましたよ皆さん」

「誰に話しかけてるんですか・・・」

無論読者だ

メタ発言は俺の特技！

魔法が使えないため俺の武器の大半が使用不可になりました

異常、過負荷は使えるから問題なし

で、しばらく傍観しているとなんか怖いルーシイが目の前に居る

ちなみにその時点で俺は知られざる英雄で姿を隠しているためこの場で姿が見られているのはナツとウェンディとシャルルとハッピーのみ

暦は霊体化した

出来たのかそんなこと・・・

ちなみに霊体化すると能力の攻撃力とかが若干上がるらしい

まあ生身の人間には当たらないからまったく意味のない行為なんだけども

霊にのみ効果アリ

一応この世界にも悪霊の類は存在するにしてもそこら辺に虚やらな

にやらがいるわけでもないので宝の持ち腐れである

なんかナツはルーシィ（恐）に抱きつかれている

その後頭ぐりぐり（某幼稚園漫画で某5歳児にその母親がやるやつ）を喰らっている

あ、あれぐりぐりクラッシュって言っただ・・・ここでは

なんか姿を現しても問題無さそうなので俺も暦も知られざる英雄、
霊体化をとく

「「「「!?!?!」」」」

あーやっぱ驚くか・・・

「テメエ！何処に隠れてやがったあああああ!!」

ナツが切れるのかよ

いまだにぐりぐりクラッシュ喰らってます

「隠れてたんじゃなくて傍観してたんだ」

「同じことだと思います・・・」

そんなことをやっているとおから女の子が出てきた

「リサーナーーーーー!!!!!!」

あーそうだ思い出した、リサーナだ

はいナツ蹴られましたー

グレイにつれてくれましたー

仲いいのかこの世界のお前ら・・・

いや知ってたけどね？原作見て

「なんでリサーナが居るんだ・・・？」

ハッピーがなみだ目と言う

「ミラさんの妹の・・・確か亡くなった筈だよね」

「みんなが逆になってる訳じゃないって事ね」

「本当だ。ミラさんだけ何も変わってない」

「決定的なのはあれ」

シャルルが指差した先には背が高く胸が大きい・・・ウエンディ？

ウエンディだった

いや実際生で見ると驚くね

「逆じゃなくて違うのよ。この人たち、私たちの捜してる皆じゃないわ。エドラスに最初から居る人たちよ」

ありえない話じゃない

エドラスにも独自の文化がある

妖精の尻尾が存在する可能性だってある

「これ以上ここに居るのも面倒ね、行くわよ！」

シャルルがハッピーを引っ張って外に出ようとする

「シャルル！どこへ！？」

「王都よ！吸収されたギルドの手がかりは王都にあるはず！」

あと一歩で外へでると言う所で誰かが慌てた様子でギルドに入ってきた

「妖精狩りだあああーッ！」

急にあたりが騒がしくなる

ついでになんか遠くの方からデカイ化物のようなものが飛んで来た

どうやらこの世界では王国とギルドは敵同士らしい

「よし！！転送魔法陣展開！！転送開始！！」

間一髪でギルドが消える

「野郎共！！引越し完了だ！！」

ギルドごと移動した

「な、何だったんださっきの奴は・・・」

「どうしたのナツ、久しぶりで忘れちゃった？」

「そんな訳ねーだろ！！」

「アレは王都魔戦部隊隊長の一人、エルザナイトウォーカー。又の名を妖精狩りのエルザ」

ここのエルザは敵だった

あーもうエドラス編はややこしいから・・・

最近不老不死になった（後書き）

アンケートは継続中です

町に着いた（前書き）

最近更新遅くてすみません

あとがきで重大発表（？）があります（多分）

括弧の中は気にしないでください

それじゃどーぞ

町に着いた

そついや髪伸びてきたな・・・

もう目に掛かってるし・・・

後ろに至ってはもう肩どころか腰まで来てるし

「何現実逃避してるんだよ・・・」

暦がツツコミを入れる

はい、現在俺たちはルーエンの街と言う所に居ます

ここに来る途中エドルーシイが仲間に加わりました

で、俺と暦、それと既に魔法を所持しているエドルーシイ以外は魔法が使えないから買いに来たわけ

そんでまあ喫茶店で茶飲んでたらさあ・・・

「居たぞ！街の出入り口を封鎖しろ！！」

「妖精の尻尾の魔道師だな！？そこを動くな！！」

王国軍に見つかったってわけよ

「ハア・・・ナツ、えーっとまあルーシイでいいや。ルーシイ、ここは俺に任せといて」

「はあ！？お前まだ魔法使えないじゃねーかッ！！」

エドルーシイが何か言ってくるが無視

「さーで、過負荷の使用準備は万端ですよーっと」

王国軍の連中がこっちへ向かってくる

俺はそいつらに向かって

「『真昼間から迷惑行為ご苦労様ですなモブキャラの皆さん。異世界にまでわざわざ迷惑かけてくる方々ですしねー。多少の迷惑行為はもうなれましたけど。とりあえずモブキャラはでしゃばらないでモブキャラらしく背景と同化しててくださいモブキャラの皆さん。アレ？どうしたんですか啞然としちゃってモブキャラの皆さん。膝着いちゃってどうしたんですか消しゴムと同価値のモブキャラの皆さん』」

最初の1つ目の文章で動きが鈍り二つ三つ目の文章で動きが止まり4つ目で目が死んで消しゴムと同価値の辺りで膝を着きながら泣いた

「さて、行くか」

「お、おう・・・」

エドルーシイは呆れて声も出ないのかそれとも若干過負荷のダメージがそっちにも行ったのか良く分からないが固まっていた

ナツは戦えなくて退屈だったらしい

暦とウエンディはもう今更って感じらしい

うん、いい感じにキャラが崩れてるなウエンディ

そんな訳で現在他の所をまわっていた王国軍から隠れるために誰も使っていない建物の中に身を隠している

「まだ残ってるなあ・・・」

「それよりさっきのあれはどうやったんだ・・・？」

さっきのってああ

王国軍の皆さんに深刻な精神ダメージを与えたアレか

うん、ヤバかったよ本当

こないだのジャンプで球磨川がやってたのをまねしてみたんだけど

効果抜群だね

あれもう立ち直れないぐらいの精神ダメージ食らったもの

「心を砕いただけだよ」

「いやだけって・・・」

そんなやり取りをしていると

「居たぞ！妖精の尻尾だッ！」

と言う兵隊の声が聞こえた

扉の方を見る

そこには誰も居ない

どうやら外から聞こえているらしい

扉をちょっとだけ開き除いて見ると

「放してよお！」

「お前はルーシィだな」

「確かにルーシィだけど何なの一体！！」

どうやらアースランドのルーシィのようだ

とりあえずこう区別して

俺がルーシイって呼んでる方はアースランド

エドルーシイがこっち

まあ分かるだろうけど

「助けた方がいいのかな？」

「その方が良さそうだけど」

暦が懷から刀を抜き俺は銃を出す

換装で出したんじゃないよ

暗器使いだよ

異空間には124361923個ぐらいの武器が仕舞ってあって懷には3213464個くらい入ってる

「開け・・・天蠍宮の扉！」

スコーピオン！と言った途端「ウィーアー」の掛け声と共にさそりの尻尾を着けた男が現れる

聖霊スコーピオン

ぶっちゃけ天蠍宮って一発変換出来ないから面倒

「魔法!？」

「何で!？」

「こ、これは・・・」

エクスボールか

あー俺は飲むつもりないよ？

偶には異常とか過負荷とかも使わないとさあ・・・

そんな訳で俺たちはルーシィと合流した

町に着いた（後書き）

アンケート「番外編でやって欲しい事」は継続中です

ついでに二つほど追加でまず

神様の名前を考えて欲しいんですね

なんかあった方がいいと思ってたんですがしっくり来るのが無かった

て事で頼んだッ！

峻「あまり読者任せに色々やるのってどうかと思うよ？俺は・・・」

黙らっしゃい

で、二つ目です

安心院が「京もスキル持つてるならいくつかオリジナルのスキルを出してもいいんじゃないか？」

と言つものです

ついでにはふんもいくつか考えていたりする

とりあえず例

言葉の束縛
チエインオブワード

あれ？厨二？

いやまあ今日の学校帰りにどうやってザンクローいじめようかなー的な事を考えててそのやり方って言うのが・・・おっとこれ以上はネタバレに・・・

まあ悪魔の心臓編をやるかどうかは未定ですが・・・

まだコミックスの方でも終わって無いし本誌でも買っていないから何処まで進んでるのか分からないし

ちなみに効果は口に出した言葉で相手の精神を束縛していくと言うもの

まあこんな感じの物を出して良いかどうか

ついでに何かオリジナルのスキルを考えてくれると嬉しい

それじゃ又次回～

今言う事じゃないかもしれませんがエドラス編終わって番外編やったらしばらく更新停止するかもしれません

コミックスの方にもうすぐ追いつきそうなので（笑）

まあエドラス編はゆっくり行くから大丈夫だろうとは思いますがけどね

シツカの街（前書き）

ひと月半も放置して本当にすみませんでした

という訳で久々すぎる更新です

リヨウってどんなキャラだっけ（笑）

シツカの街

忘れてんじゃねえよ!!

いきなり前書きにツツコンでごめん

俺たちは何故か魔法が使えるルーシィを仲間に加えてシツカの街と
いうところに来ていた

ルーシィはアニメに吸い込まれる寸前ホログラムに助けられたら
しい

ちなみに俺たちは今、シツカの街のホテルに泊まっている

「見るよ!こいつとあたし体つきまで同じだよ!」

「だーーーーーッ!そんな格好で出てくなーーーー!!」

なんて騒ぎがあったりした

体が女になり精神的にも女になって来た俺はもう何も感じない

もう開き直るわうん

ちなみにこの時のルーシィはエドルーシィが全裸でルーシィがタオ
ル一枚

どっちもどっちだよ

「エドルーシイさん！ナツさんがいるんですよー！！というかりヨウさんとコヨミさんも止めるの手伝ってくださいー！！」

「えー」

「えー」

モンハンプレイ中だから嫌だ

「・・・」

無言で魔法を構えるウェンディ

「分かった分かった止めるから」

俺は立ち上がりエドルーシイに近づく

「【服着ろよ。露出狂かお前ら】」

「私も！？」

言いつつ服を着る2人

創帝の力を舐めてはいかんだよ

アレだね、便利だねコレ

「というか自分同士で風呂入るってどなの？」

「（（言われてみればー！！）（（」

ダメだこいつら・・・早くなんとかしないと・・・

なんてジョークは置いておく

「鏡のモノマネ芸できるじゃねーか!」

「やらんわ!」

「ああ・・・息もぴったり」

「残念な2人」

「誰が残念だ!」

「ルーシィ」

今度は俺と暦の声が重なった

グサリとルーシィの胸に刺さった俺の言葉に膝をつく2人

で、髪切った

なんでかと言えば区別が付き難いからとかなんとか

ついでに俺も切って貰った

ほっとき過ぎて鬱陶しくなってたし

もう目にかかってたよ

口元まで来てたよ髪

「本当によかったの？リョウはともかく」

「ん？アースランドじゃ髪の毛を大切にする習慣でもあるのか？」

「まあ・・・女の子は皆そうだと思うエビ」

「女の子ねえ・・・こんな世界じゃ男だ女だって考えるのも馬鹿らしくなってくるよ。生きるのに必死だからな」

なんで生きるのに必死なんだろうか

必ず死ぬって書くんだぜ？

言葉遊びレベル2ぐらいだろうか

つまり単なる遊びである今は気にしないでくれい

「でもこっちのギルドの皆も楽しそうだったよ」

ハッピーが言う

「そりゃそうさ。無理にでも笑ってねえと心なんて簡単に折れちゃう」

俺は折る側だぜ

いやごめんもうふざけないから武器向けるのやめろウェンディ

「それにこんな世界でもあたしたちを必要としてくれる人たちがいる。だからたとえ闇におちようとあたしたちはギルドであり続けるんだ」

ギルドってそんなに大事な物か？

闇におちてまですがる物じゃない

別に集まって仕事したいならギルドじゃ無くても有るだろう

喉まででかかった言葉を飲み込む

で、翌日

『王都へは東へ三日歩けば着く。あたしはギルドに戻るよ。じゃあね。幸運を！』

と置手紙が書いてあった

エドルーシィは帰ったようだ

「信じらんないっ!」

信ニランナウエイ

「何よこれー!!!」

N A N I Y O U c o l l e o

「なにコレ、ねえナニコレちょっと!なに変な当て字してんのよあんなは!」

「うわ!ルーシイが切れた!斜め45度チョップすれば戻るか・・・」

「戻るか!」

ナイス突っ込みだぜルーシイ

「手伝ってくれるんじゃないのー!?モォー!どっいう神経してんのかしら!」

「ルーシイと同じ」

「ルーシイと同じじゃないの?」

「同類だろお前ら」

「っるっさい!」

「しょうがないですよ。元々戦う気はないって言ってましたし」

だな

「あたしは許せない！！同じあたしとして許せないの！！」

「ルーシィって自分勝手だねー」

「だなー」

「おう」

「ですねー」

「ええ！？」

以外に皆乗ってきた

理解したのかそれともタダのノリか

「戦って自分の国が良くなるとは限らないし、それで余計に悪くなるかも知れないし。誰とも知れないやつらに任せるのも嫌だろ普通」

「だよなー」

「ですよねー」

「そうなのか？」

ナツだけ理解してなかった

ちなみにだよなーは暦です

「うっ・・・」

「ルーシイは異世界の自分とはいえそいつに自分の世界の事全部任せられるのか？それに俺たちの目的は自分の仲間の奪還であってこの国の王政をどうにかする事じゃない。手伝ってあいつらに得があるとは俺たちはまったく言っただけ。この国をよくするとは一言も言っただけなのに手伝ってくれと思うか？」

「うっ・・・」

「あーなるほど」

ナツもようやく理解

あれ、こいつこんなに頭良かったっけ

シツカの街（後書き）

グダグダです

ほんとすみません

スランプ中です

あと風邪引きました

咳が止まりませんぜ

それではまた次回

アンケートは継続中です

1・番外編でやって欲しい事

2・オリジナル異常及び過負荷

3・神様の名前

ファイアボールのナツ（笑）（前書き）

サブタイひでえww

（笑）は無かったかもしれない

まあいいか！

てことでどうぞー

ファイアボールのナツ（笑）

飛行船デケーな

着陸して人が入って行くのは恐らく王都の飛行船

というか飛行船なんて久々に見たぞコノ野郎

「あの巨大魔水晶の魔力抽出がいよいよ明後日なんだとよー！」

「うひょー！！乗り遅れたら世紀のイベントに間に合わねーぞ！」
だそうだ

まあそう言う事だ

とりあえず潰そうかと思ったけど後々の展開を悪くするのは良くないと思うんだ

原作ブレイクが楽しみだ

そう思っていた時期が俺にもありました（笑）

「あの船奪うか」

と言ったのはナツだった

「普通潜入でしょ」

「隠れんのヤダし」

「なんて自分勝手な理由」

「ナツが乗り物を提案するなんて珍しいね」

「ふふふ・・・ウエンディのトロイアがあれば乗り物など」

「あたしたち魔法使えませんか」

「この案は却下しよう」

「大嘘憑き使えば乗り物酔いを経験した事になるけど・・・」

「よし！」

「下手したら世界そのものを無かった事に・・・」

「却下ッッ！！！」

全力で俺を止めるウエンディ

一応本場の事

万が一とは行かずとも京が一ぐらいはあるかもしれない

つまりまず無いと言う事だけでもあ言ってみた

出来る事には代わり無い

俺の気分しだいで世界そのものを無かった事に出来る事を考えると恐ろしく感じるな・・・

嘘だけど

「あたしは賛成よ!」

「大嘘憑きで世界を無かった事にする事に?」

恐ろしい子やわぁ

「違うわ!!!」

ですよー

「んじゃ奪いますか・・・面倒だけど」

いつそこの世界の魔力を無かった事にするのも面白いなうなんて冗談を半分本気で考えなくも無い感じで考えつつ飛行船に向かったルーシー

「って、アンタも来なさいよ!!」

「俺魔法使えないし」

「大嘘憑き使えるって言って無かったわけ!?!」

「アレは魔法じゃないから」

凄惨な死体が見たいというのなら話は別だが

「やっぱ来ないでいいッ！」

以前顔面が腐った死体を見たのがルーシイの中ではトラウマになっているそうです エルザ談

確か鉄の・・・なんだっけ

あれ編参照

「ほいほいほい」

「来ないんじゃないの？」

「体術でも十分イけるしね。銃使う？」

デザートイーグル

その気になれば辺り一帯血の海に

「止めとく」

「止めとけ」

ルーシイは聖霊が出せずに困惑している

いや出せてるけど出て来たのがバルゴだった

「肝心な時に使えないなルーシイは」

「まったくだよね」

「アンタが言うな!!」

「俺は使えてるだろ現時点では」

「ハッピーに言ったのよ・・・」

「オイラは基本使えないよ」

「開き直るな!」

そんな感じでナツとウェンディが参戦し、暦も刀を抜いて参戦

10人ぐらい銃で撃つて半ばトリガーハッピーになりかけていたところで飛行船が飛んで行ってしまった

「兵隊は全滅させたんだけどなあ」

「残念」

「あんたら落ち付きすぎ・・・」

「そういうキャラだから」

「あくまでキャラ付けだッッ!!」

「「キャラ付けかい!!!!!!」」

「「「ハア」」」

溜息をつくと遠くからエンジン音が聞こえてきた

なんで魔法なのにエンジン音が聞こえるんだろっな・・・

やって来たのは妖精の尻尾の紋章がついた魔道四輪

「これは一体どういう状況だ？」

「ようエドナツ」

「あん？」

「ファイアボールのナツ（笑）、だろ？」

「（笑）ってなんだ！っーか誰だ！！」

「誰だはこっちの台詞だよ。俺は一応お前の正体理解してるけど自己紹介は大事だぞ」

「・・・・・・・・」

呆れるエドナツとその他暦以外のメンバー

「し、知り合い？」

「いや初対面。受信感度の悪用」

「なるほど・・・」

そんな感じでエドナツが王都まで送ってくれる事になった

ちなみにナツはいつもどおり魔道四輪乗ったと同時に気絶

情けねーとエドナツに嘲笑されているがナツの耳には届いていない
ようだ

とりあえずこう言って置こう

「明日から特訓するか？ 乗り物の」

ちなみに特訓とは列車の中で縛り付けて置く拷問の事である

それを感じ取ったのか無理に起き上がるナツだが結局出来ずに気絶
した

「ごーもん特訓確定」

青さが増したナツを尻目にこの魔道四輪についての話を聞いてみる

これはSEプラグが付いていないらしい

ちなみにSEプラグとは・・・説明面倒になって来た

原作買え21巻だ

420円ぐらいの出費は諦めろ！！

て事で読者に丸投げしたまま

次回に続く

ファイアボールのナツ（笑）（後書き）

最後はメタの嵐

もうこの作品が何処に向かっているのか見失ってきた

ただの敵キャラいじり小説な気がして来たよ

という事にして開き直りました

それじゃまた次回！

アンケートは継続中です

1・番外編でやって欲しい事

2・オリジナル異常及び過負荷

3・神様の名前

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9723o/>

フェアリーテイルの世界に転生しました

2011年7月22日14時07分発行